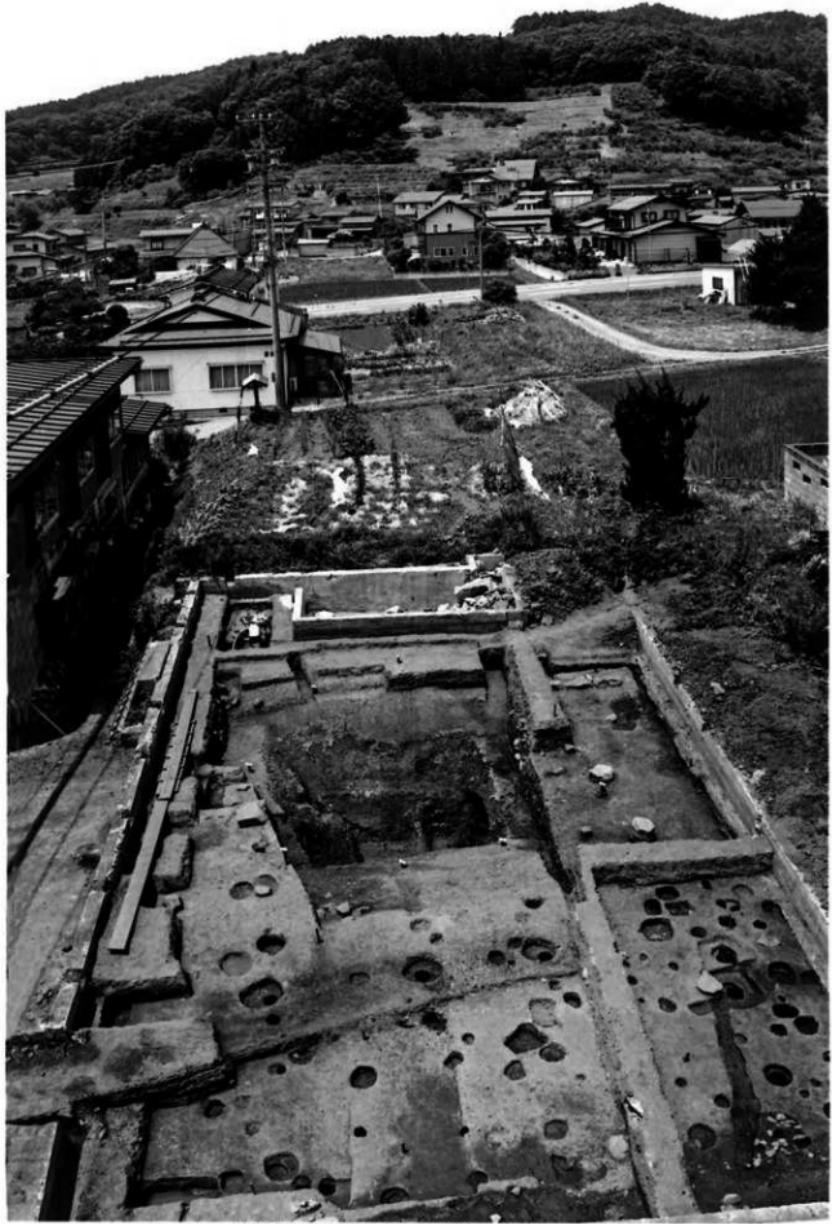


# 芋川氏館跡(第4次)・(伝)願生寺跡

——飯綱町芋川田中公会堂建設・中山間地域等直接支払い事業ため池造成  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2014年3月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会



茅川氏館跡櫓列・東堀から主郭・町部落と鼻見城山を望む



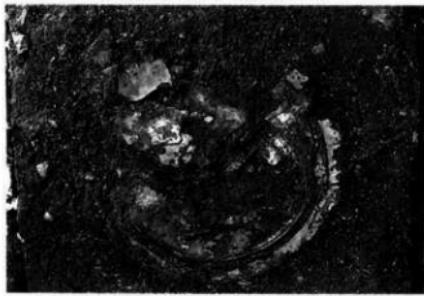
1. 東塗 SD05・欄列 SA05



2. 再建福正寺礎石・盤地層と下部層



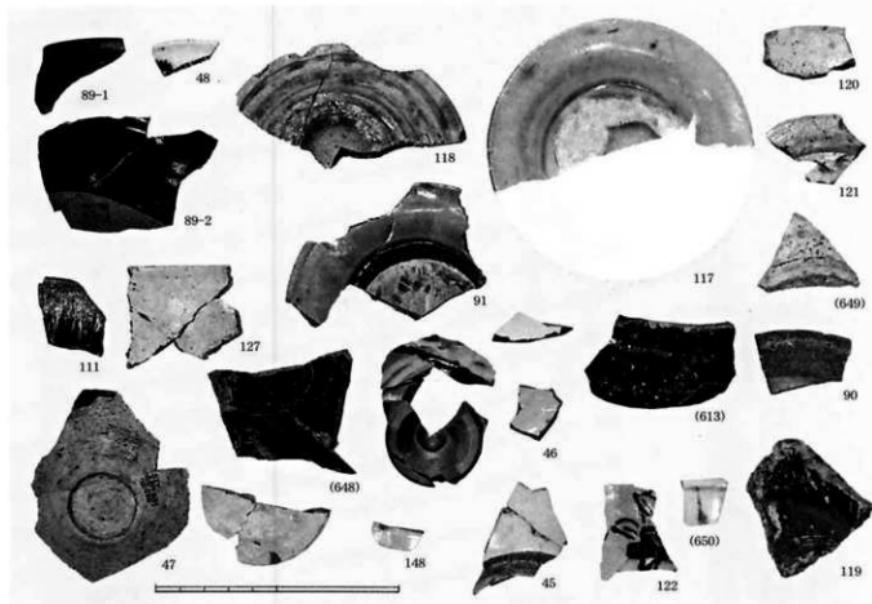
3. 東塗埋土土層 (4・14・15・17・18・19層)



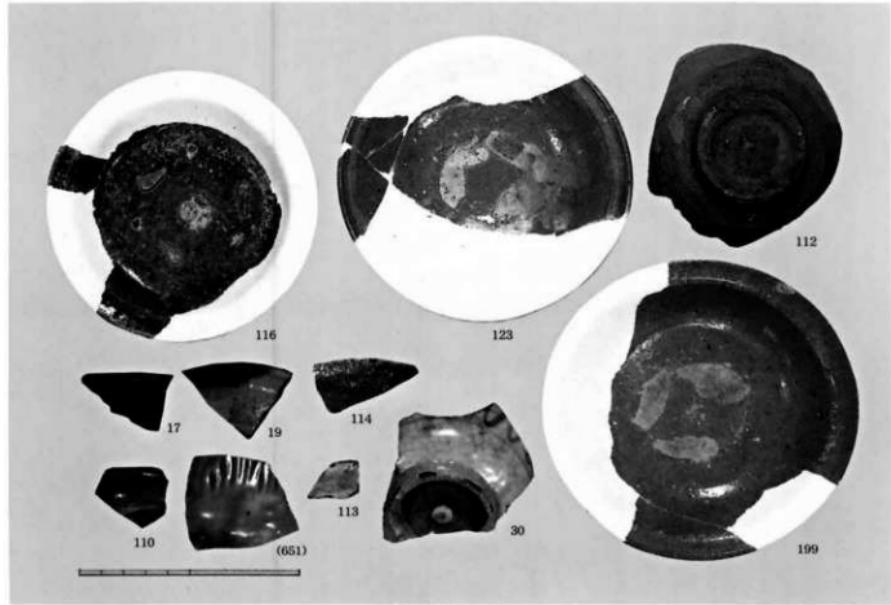
4. 漆器出土状況 (4層)



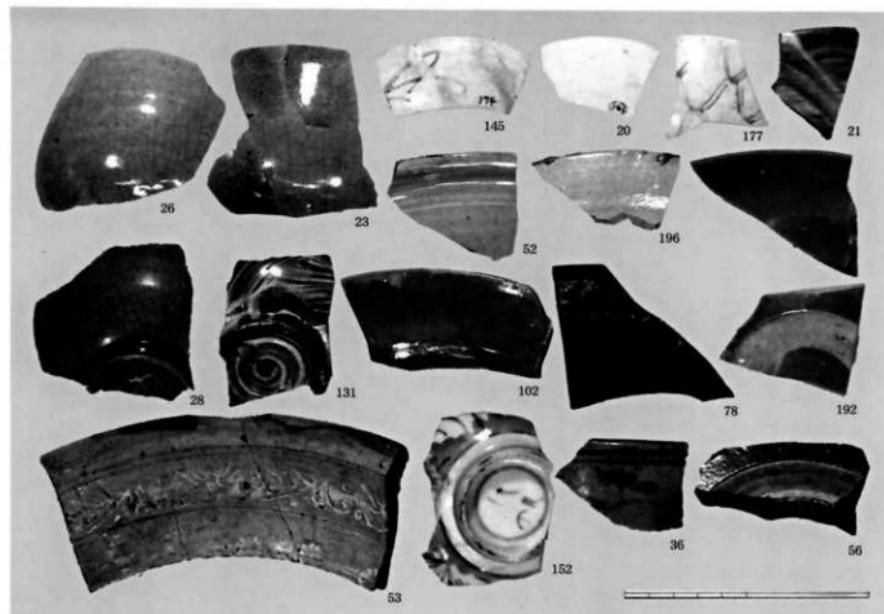
5. 蓋 (17層)



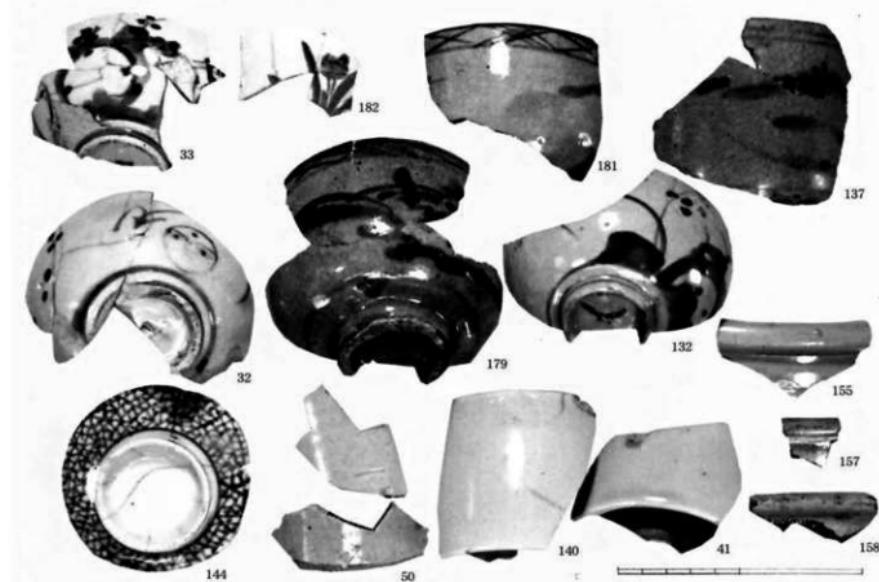
1. 輸入陶磁器、瀬戸・美濃・越中瀬戸・京・萩



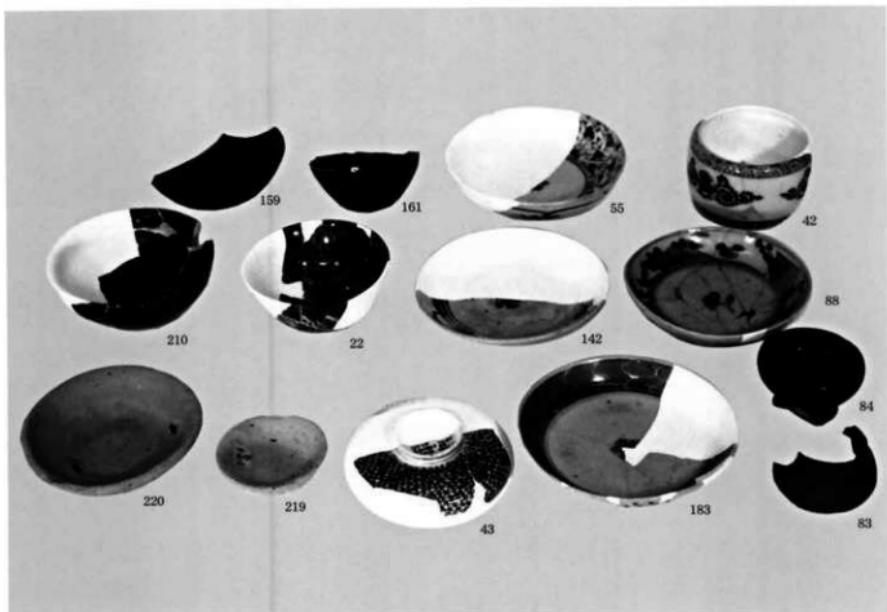
2. 肥前陶磁（I～II期）



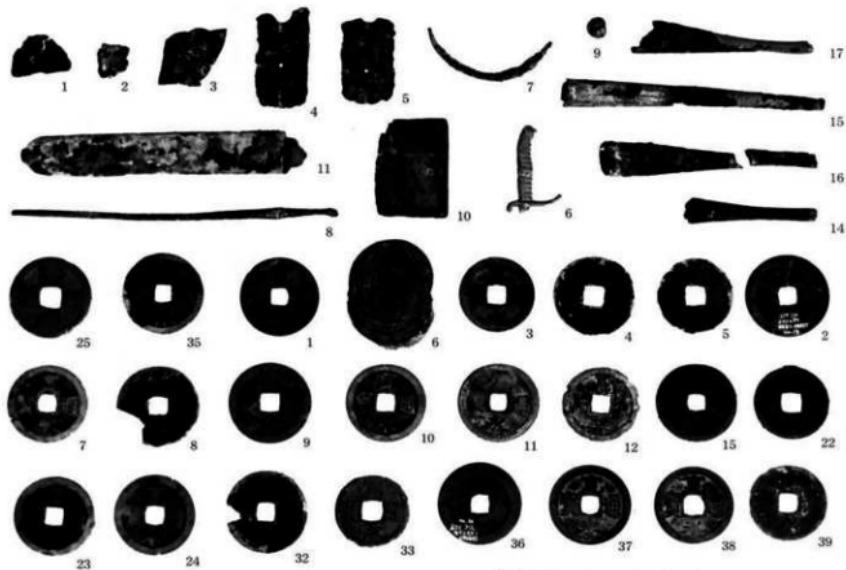
1. 肥前陶磁 (III ~ IV期)



2. 肥前陶磁 (IV ~ V期)・赤塗焼



1. 土師器小皿 (カワラケ)・肥前陶磁・瀬戸美濃・地方窓



2. 金銅製品・銅製品・鉛製品・錢貨

# 芋川氏館跡(第4次)・(伝)願生寺跡

——飯綱町芋川田中公会堂建設・中山間地域等直接支払い事業ため池造成  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

2014年3月

長野県上水内郡飯綱町教育委員会

## 序

本書は、長野県上水内郡飯綱町に所在する芋川氏館跡ならびに（伝）願生寺跡の緊急発掘調査報告書です。芋川氏館跡ならびに（伝）願生寺跡は表町遺跡とともに平成21年度に発掘調査されました。

芋川氏館跡は、古代以来の芋川莊に根を張り、中世から戦国時代まで活躍した芋川氏の根据地といわれてきた場所です。地元では芋川氏について昔から、用水を開削し耕地を開いた豪族、社寺を創建し文化をもたらした豪族として語り継がれてきました。（伝）願生寺跡も同じく中世に隆盛した浄土真宗願生寺があった場所だという伝承の地です。また表町遺跡も芋川氏が活躍した中世の時代に、島津氏の居城矢筒城の城下町だったという伝説がありました。

これら3つの遺跡に共通しているのは、先人から伝わる歴史語りの内容に比べて、現在のそれぞれの場所に遺跡の証しが乏しいことでした。芋川氏にせよ、城下町にせよ、お寺にせよ、地上にはほとんど痕跡を残していないので、先人からの伝承を事実としてうけとめるには戸惑いもありました。

今回、考古学のメスがこれらの遺跡に入り、そこに確かな先人の生きた証しがあったことが明らかになりました。この成果は私たちの町の“探し方”を物語る何よりの宝になりました。先人の昔語りが史実を伝えるものだったかは、さらに今後の研究に委ねるとして、本書が広く活用され、私たちの“行く末”を考える良き糧になることを念願しています。

この報告書には芋川氏館跡と（伝）願生寺跡の調査成果が収録されています。1年間に3つの遺跡を立て続けに発掘するのは飯綱町で初めての経験で困難を伴いましたが、無事に発掘調査を終え報告書を発刊することができました。発掘や整理作業に従事された皆様をはじめ、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に御礼申し上げますとともに、格別なるご指導を賜りました笹澤浩先生に深く感謝を申し上げ発刊の言葉とします。

平成26年3月31日

飯綱町教育委員会  
教育長 寺島 政次

# 芋川氏館跡（第4次）

## 例言

1. 本書は飯綱町芋川田中公会堂建設に係る芋川氏館跡の第4次発掘調査報告書である。
2. 使用した地図は国土地理院発行の25,000分の1（使用許可基準範囲内）、飯綱町全図2,500分の1をもととした。
3. 発掘調査の測量は簡易通り方実測法で実施した。なお、国家座標は世界測地系である（詳細「発掘調査の方法」）。
4. 発掘調査及び報告書作成にあたって以下の諸機関等と諸氏に、業務委託または協力を得た（敬称略）。
  - ・長野県立歴史館、長野県埋蔵文化財センター、長野市埋蔵文化財センター
  - ・田中公会堂建設委員会（委員長渡辺千賀雄）、田中組（組長村上今朝男）、妙福寺（住職山殿秀靖）
  - ・測量・基本杭駆定 龍野土地家屋調査事務所 空中写真撮影（㈱清水工務所）
  - ・写真的現像・焼付 ナカムラフォト（信濃町）
  - ・中・近世陶磁器鑑定 市川隆之（長野県埋蔵文化財センター）田中曉徳（長野市埋蔵文化財センター）
  - ・漆器取り上げ 白沢勝彦（長野県埋蔵文化財センター）
  - ・石器・石製品の石材鑑定 中村由克（野尻湖ナウマンゾウ博物館）
  - ・建造物 土本後和（信州大学工学部）伊藤友久（長野県埋蔵文化財センター）
  - ・樹種同定、種子鑑定 勝バレオ・ラボ 木製品保存処理 勝吉田生物研究所
  - ・木製隼 田中寿子（松山記念館）
5. 報告書作成に係る作業分担は下記のとおりである。  
遺物実測 陶磁器－高山いす美・峯山真由美 土器－富岡鹿子 石器・石製品－原田勝美・高山・峯山 木製品－原田・富岡 金属器－高山 拓本－鈴木千秋 遺構図整理－原田・柳澤まち子 レイアウト・トレイス－笠澤・柳澤 観察表－笠澤・原田・鈴木・柳澤・横山かよ子 写真撮影－笠澤 写真図版－笠澤・横山
6. 本書の編集は笠澤がおこない横山・柳澤・鈴木が補助し、執筆は下記のとおりである。  
原田：第1章 笠澤：第2～4章第1～第3節、第5章 佐々木由香：第4章第4節
7. 遺跡の記録類ならびに出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

## 凡例

1. 遺跡名は「芋川氏館跡」とし、記号は「SIY」である。
2. 遺構記号は以下のとおりである。遺構番号は第1～3次調査からの通し番号とした。  
SA：柱列・土壘 SB：建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SF：炉床跡と類似遺構  
SK：土坑 SX：廐棄土坑（集石）ならびに性格不明な遺構
3. 遺構・遺物実測図・遺物写真的縮尺は概ね下記のとおりであるが、例外は図中のスケールによられたい。  
また、遺構図の方位は真北、レベルHは海拔である。  
発掘図1:800、1:120、1:100 掘立柱建物・構列・礎石建物・溝1:50 杭列1:80 井戸1:40  
廐棄土坑1:20  
遺物実測図 土器1:4 陶磁器・土師器皿1:3 瓦1:4 白・五輪塔など1:6 石鉢・凹石など1:4 打製石斧・印石・砥石・硯・石盤1:3 石筆2:3 錫貨・銅製品・煙管など2:3 釘など鉄製品1:2 錫治関連1:3 蒔・鍛・柱など1:8 杭1:4、1:8 曲物など木製品1:4
4. 土器・陶磁器実測図の断面は珠洲を含む須恵器は黒色、灰胎陶器・陶磁器・瓦質土器はアミ掛けとした。また遺物の表面に煤・炭化物・漆・鉄駆など塗装・自然付着の場合と遺構における焼土（炉床）はアミ掛けとした。
5. 石材の略称は下記のとおりである。  
輝石安山岩 And1 角閃石輝石安山岩 And2 黒灰色輝石安山岩 And3 褐灰岩質砂岩 Sa 緑色褐灰岩 GT  
凝灰岩質頁岩 TS 石英安山岩 Dac 黒色粘板岩 Si 頁岩 Sh 結晶片岩 SCH 滑石 PA
6. 図・表・写真の遺物表示は原則として同一の図番号で統一し、それ以外は整理番号に（ ）を付した。

## 目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
1. 調査の経緯と目的	1
2. 発掘調査対象地・予定期面積・調査期間	1
3. 発掘作業	1
4. 整理作業	1
第2節 調査の方法	3
1. 調査区の設定と調査方法	3
2. 基本土層	4
3. 整理作業	5
4. 発掘調査日誌（抄）	5
第2章 遺跡の環境と過去の調査	8
第1節 遺跡の位置と環境	8
1. 遺跡の位置	8
2. 芋川氏館跡と福正寺跡	9
第2節 第1～3次調査の概要	11
1. 芋川氏館跡の調査	11
2. 田中下土浮遺跡の調査	12
第3章 遺構と遺物	13
第1節 鍵層の検討	13
1. 東堀埋土	13
(1) 第1赤ソブ層（3層） (2) 再建福正寺整地層－第2次整地層（第4層、4～2層） (3) 第2赤ソブ層（15層）	
2. 東堀東部域	17
第2節 古代・中世の遺構と遺物	18
1. 古代（平安時代）	18
2. 中世（戦国期）	18
(1) 東堀 SD05 (2) 横列 SA05 (3) 据立柱建物 ①据立柱建物 SB08 ②据立柱建物 SB09 (4) 井戸 SE02、P.（掘方）46	
第3節 近世～近代の遺構と遺物	21
1. 瓦石建物 SB07	21

2. 溝 SD07	21
3. 溝 SD09・SD13、杭列 A・B、その他の溝・杭列	22
4. 廃棄土坑（集石）	22
<b>第4章 成果と課題</b>	<b>26</b>
第1節 芋川氏館跡東堀と館の構造	26
1. 主郭の規模	26
2. 隍子堀	26
3. 棚列設置と芋川氏の会津移住	26
<b>第2節 福正寺の創建と再建</b>	<b>28</b>
1. 福正寺の記録と礎石建物跡	28
2. 福正寺の境内と礎石建物の復元	28
<b>第3節 出土遺物の検討</b>	<b>30</b>
1. 陶磁器と土器	30
(1) 分析の前提 (2) 遺構ごとの陶磁器と土器	
(3) 中世的やきもの組成から近世的やきもの組成へ	
2. 瓦	34
3. 石器・石製品	35
4. 金属製品	36
5. 錫冶関連遺物	36
6. 木製品	37
<b>第4節 墓子鑑定</b>	<b>38</b>
<b>第5章 まとめ</b>	<b>41</b>
1. 本稿の目的と前提	41
2. 芋川氏の防御施設	41
3. 芋川氏館と妙福寺の二重構造	42
4. 棚列の設置と館の再防御	44
5. 芋川氏館跡調査の課題	44

引用・参考文献

表

図版

写真図版

## 図目次

第1図 グリッド設定図	3
第2図 芹川氏館跡の位置と周辺の遺跡	8
第3図 土層図・トレンチ配置図	14
第4図 東堀 SD05における陶磁器・土器の層位別 出土状況図	15
第5図 古代の土器	19
第6図 発掘全体図 芹川氏館跡第1次～第4次調 査地点と妙福寺	58
第7図 下層遺構（中世）発掘図	59
第8図 構造 SA05	60
第9図 堀方（P.46）	60
第10図 挖立柱建物 SB08・SB09	61
第11図 溝 SD07と礎石建物関係土層図	61
第12図 土層図②・④・⑥	62
第13図 井戸 SE02	62
第14図 溝 SD09・SD13、杭列 A・B	62
第15図 上層遺構（近世～近代）発掘図	63
第16図 磚石建物 SB07	65
第17図 溝 SD07	66
第18図 廃棄土坑 SX18・20・31・32	67
第19図 中世～近代の陶磁器・土器（1）	68
第20図 中世～近代の陶磁器・土器（2）	69
第21図 中世～近代の陶磁器・土器（3）	70
第22図 中世～近代の陶磁器・土器（4）	71
第23図 中世～近代の陶磁器・土器（5）	72
第24図 中世～近代の陶磁器・土器（6）	73
第25図 中世～近代の陶磁器・土器（7）	74
第26図 中世～近代の陶磁器・土器（8）	75
第27図 瓦	76
第28図 石器・石製品（1）	77
第29図 石器・石製品（2）	78
第30図 石器・石製品（3）	79
第31図 銀貨	80
第32図 金糞製品	81
第33図 銀治闕連遺物	82
第34図 木製品（1）	83
第35図 木製品（2）	84
第36図 木製品（3）	85
第37図 木製品（4）	86

## 表目次

表1 東堀埴土の形成と契機	16
表2 廃棄土坑（集石）一覧表	23
表3 善光寺地蔵における蛭網町城の被害一覧	25
表4 芹川氏館跡出土の大茎植物遺体	38
表5 芹川氏館跡出土古代～近代土器・陶磁器類 表	47
表6 遺構・層位別やきもの集計	52
表7 芹川氏館跡出土瓦観察表	52
表8 芹川氏館跡出土石器・石製品観察表	53
表9 芹川氏館跡出土銭貨一覧	54
表10 芹川氏館跡出土金属製品観察表	55
表11 芹川氏館跡出土銀治闕連遺物観察表	55
表12 芹川氏館跡出土木製品観察表	56

## 写真図版目次

PL1	1. 漆 SD07検出状況（北より） 2. 漆 SD07発掘状況（北より）	PL4	5. 17層中の漆層 6. 5の拡大写真 7. 再建福正寺礎石と整地層 8. 銅と銀の出土状態
PL2	1. 再建福正寺跡全景（西より、上方に妙福寺參道と冠木門） 2. 磚石建物 SB07（南より）	PL5	1. SX18上層 2. SX18下層 3. SX32 4. SX23・24・28・29・42 5. 再建福正寺整地層内の肥前陶磁（22） 6. 再建福正寺整地層内の地方窯香炉（139） 7. 再建福正寺整地層内の地方窯製品（161） 8. ピット（掘方）46と柱頭
PL3	1. 東掘 SD05と柱穴群（西より） 2. 東掘 SD05障子櫻と桟列 SA05（東より） 3. 東掘 SD05・桟列 SA05（南より） 4. 東掘 SD05（東より） 5. 桟列 SA05・掘立柱建物群（南より） 6. 桟列 SA05掘方2と桟痕跡 7. 桟列 SA05掘方2と鍵中窓戸（中央下）	PL6	1. 珠洲・内耳鏡・焰烙・火鉢 2. 鉄製品・轆羽口・鉄漆
PL4	1. 漆 SD07腰岸用石組 2. 漆 SD07・枕列 A 3. 17・18・19層間の不連続面 4. 3の拡大写真	PL7	1. 木製品（曲物ほか） 2. 葛飾白 3. 長床革・銀 4. 石硯・石盤 5. 砥石・磨石 6. 五輪塔

挿入写真1 現地説明会	.....	7
挿入写真2 主郭を介した調査地（中央奥旧公民館）と妙福寺（西より） -手前西堀（道路）・右南堀の一部	…	10
挿入写真3 調査地・妙福寺全景	.....	27
挿入写真4 芋川氏館跡出土の大甕植物遺体	.....	40

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

### 1. 調査の経緯と目的

平成21年1月20日 公共事業照会で田中公会堂建設設計図を確認。町教育委員会から建設予定地が芋川氏館跡で埋蔵文化財包蔵地にあたるため保護協議が必要な旨、田中公会堂建設委員会に連絡し町教育委員会と設計業者で協議。その結果記録保存を前提に町教育委員会が主体となり、調査団を設置して発掘調査を実施することとした。

3月6日 田中公会堂建設委員会（委員長渡辺千賀雄）、田中組（組長村上今朝男）、工事担当者などと町教委・調査団で今後の調査日程や調査方法について打合せ。調査地は芋川氏館の東堀跡が予想されるので、公会堂建設に際し、その場所をさける旨要請、了解される。

6月2日 建設委員会・工事担当と町教委・調査団で協議。調査内容と調査の進捗状況について報告。

### 2. 発掘調査対象地・予定面積・調査期間

対象地 長野県上水内郡飯綱町大字芋川字中峯前田1517-2

調査予定面積 581.6m<sup>2</sup>

調査期間 平成21年4月13日～6月30日

### 3. 発掘作業

#### (1) 調査体制

団長 笹澤浩

調査主任 原田勝美

調査補助員 富岡鹿子 柳澤まち子 鈴木千秋

調査作業員 常田範夫 深津豊晴 松木幸三 峯山真由美 願訪栄一 草間喜美子 柳沢依男 寺島尊夫

### 4. 整理作業

#### (1) 期間

平成21年11月17日～平成26年3月31日

#### (2) 体制

埋蔵文化財調査整理特別指導員 笹澤浩

埋蔵文化財調査指導員 原田勝美（～24年3月31日）・横山かよ子（24年4月～）

埋蔵文化財整理作業員 富岡鹿子 柳澤まち子 鈴木千秋 峯山真由美（～24年9月30日）

高山いづ美（～25年3月31日）

#### (3) 経過

小野遺跡（2012年3月刊行）ならびに表可遺跡（2014年3月刊行）と併行して実施

(4) 事務局（平成21年4月～平成26年3月）飯糸町教育委員会

教育長 相澤壽（～22年11月9日）寺島政次（22年11月10日～）

教育次長 長澤照和（～22年3月）寺島政次（～22年11月9日）早川ひさ子（23年4月～）

生涯学習係（21年4月～23年3月まで担当制、23年4月以降は係制）

参考 早川ひさ子（～23年3月）

係長 平井喜一朗（23年4月～12月）藤澤哲彦（23年12月～25年3月）

宮本裕渉（25年4月～26年3月）

主幹 小山丈夫（23年4月～）小林貢（24年4月～25年3月）

企画員 梨本克裕（21年4月～22年3月）小山丈夫（22年4月～23年3月）

主査 小林貢（21年4月～24年3月）小山丈夫（～22年3月）

米澤忍（22年4月～25年3月）大川明美（24年4月～）黒岩潤也（25年4月～）

産業建設課 主査 久保田和祐（21年4月～22年3月）

いいづな歴史ふれあい館 館長 小柳義男（24年4月～）

臨時職員 伊藤愛加（23年4月～）

調査協力者（敬称略、順不同、現地指導者などは例旨に記載）

青木和明 飯島哲也 大竹憲昭 上田典男 遠藤公洋 岡村秀雄 河西克造 中野亮一 水沢教子 原明芳

平林彰 賢田明 風間栄一 鈴澤正史 佐藤慶二 鈴木俊夫 福島永 宮坂清 金子拓男 水沢幸一

矢野恒雄 龍野正道 中島庄一 中原章子 森晃一

## 第2節 調査の方法

### 1. 調査区の設定と調査方法（第1図）

芋川地区の埋蔵文化財（遺跡）の分布調査は平成26年4月以降実施される予定である。従来この地域の埋蔵文化財の状況把握は地元の龍野正道氏らの収集品にもとづいているもので、判明している遺跡も「点」として示されているにすぎなかった（三水村教育委員会1992）（註1）。よって遺跡範囲の確認や遺跡間の関係などは当地域の大半が水田地帯にあるとは云え十分とは云えなかった。こうした中で本格的な発掘調査は昭和50年に実施された小野遺跡（笠澤・市村・小柳・中村2012）に始まる。ここでは本造り方実測など新しい調査方法で実施したが、国土座標への導入はできなかった。平成13年から15年にかけて実施された3次にわたる芋川氏館跡および隣接する田中下土浮遺跡の発掘調査（笠澤・森・池田2003・2004）は芋川地区の遺跡相互の関係を国土座標（日本測地系）に入れるなど遺跡の空間的把握を十分に意図して実施したが、地区割設定も調査対象遺跡を同一の調査網にかぶせてはいるものの遺跡を広域にとらえた調査方法は今後の検討課題とした。よって、今回の第4次調査を実施するにあたって、飯綱町教育委員会が新たに実施した長野県埋文センターの発掘区設定基準に準じた地区割を採用した。これは合併前の牛丸村教育委員会においてもいくつかの遺跡で実施済である。ただし導入するにあたって第1～3次調査が磁北による調査区設定であり、新たな町の調査区設定方法が真北で実施のため混乱も危惧されたが、第1次～3次調査も旧座標（日本測地系）を採用しており、組みかえが個々にはわずらわしさもあるが、可能であると判断したことによる。さらに、今後の周辺遺跡の対応も含めて座標も世界測地系とすることにした。

調査区の設定は今次調査対象の芋川氏館跡と隣接する田中下土浮遺跡、北方にある小野遺跡、さらに今後の調査が予想される地域全体の中で新たに設けたものである。前述したとおり、周辺の遺跡の存在が不明の中ではあるが、中峯・田中地籍の遺跡群を芋川氏館跡と田中下土浮遺跡にそれぞれ一体化して地区割を設定し、その中に芋川氏館跡及び田中下土浮遺跡を含む遺跡群としてとらえたもので、あくまでも調査区設定上の基準であって、



第1図 グリッド設定図（1:5,000）

この設定区域内に埋蔵文化財が必ず存在すると云うものではない。存在の有無は今後の試掘調査などによって判断されるものである。

かように調査区設定は芋川氏館跡および田中下土浮遺跡を広域にとらえて対象として、前者をI～IV、後者をI・IIの大々地区(200×200m)、A～Yの25区画(40×40m)の大地区とし、各大地区を2×2mの小地区(グリッド)に分け、南北に算用数字1～20を東西にアルファベットA～Tを付与した。尚、測量の原点は町の測量原点のひとつであるNT11-5(X=85,685.731, Y=-21,575.064)、町道上のL.P(H=538.29m)を使用し、T3(X=85,618.951, Y=-21,566.561, H=539.00m)を設定した。大々地区IVの起点はX=85,800, Y=-21,680である。またこの大々地区割は芋川防災センターの北の東西道路や妙福寺前の東西道路と斑尾川などの半永久構造物を区割基準の目安としたものである。

今次調査区は芋川氏館跡のIV W地区となる。ちなみに過去の芋川氏館跡調査地は芋川氏館跡IV K・Uなど、田中下土浮遺跡調査地は田中下土浮遺跡II Fなどとなる。

発掘調査は調査対象地が芋川氏館跡の東堀推定地にあたること、福正寺・芋井学校など中世以来のさまざまなもので土地利用されて来た所であり、そうした遺跡への対応を十分に配慮した調査方法で実施した。具体的には後段発掘日誌などを参照されたい。

なお測量点は地元の龍野土地家屋調査士事務所によって設定された基準杭をもとに簡易通り方で実施した。また写真撮影は9×6cm・35mmフィルムカラー(ネガ・ポジ)及びデジタルカメラを使用するとともに東堀の撮影にはこれも地元業者(有)清水工務所の協力を得て高所作業車から実施したものである。

とくに各土層には留意し、遺構との関係、成立過程と新旧などを把握し、各土層の年代を把握するために遺物の出土状態に留意し、一部遺物についてはレベルなどを計測した。

## 2. 基本土層

基本土層とは原則として広域にわたり形成された自然堆積土であり、いわゆる地層のことである。考古学上の遺構は整地土以外はこれらの土層を基盤として構築される。

芋川氏館跡は南北方向に長めの斑尾川扇状地の扇頂部分にあり斑尾川に近接した右岸上にある。扇状地は最大幅でも東西方向500m程度で扇頂と扇端の比高差は53mと小さく、館跡の下方500mの寺村地籍では平坦となる。斑尾川はこの小規模な平野部を経て、東南に向きを変えながら狭い谷間を急流となって中野市善佐で千曲川に流れれる。

扇状地上では斑尾川はこうした地形と深く係わり、扇頂にある小野遺跡周辺では明瞭な河岸段丘を左右に残すが、芋川氏館跡付近では不鮮明となる。館跡下方の田中下土浮遺跡で検出された9世紀代の旧斑尾川は現斑尾川に沿って幅10m深さ1mで蛇行しながら南流をしていた(笠澤・森・池田2004)。現河床は3m程と深いがこれは河川改修によるもので、その前は浅かったことになる。

芋川氏館跡の基本土層は表土・黒色土・黄褐色砂質土である。これは斑尾川上流域にある小野遺跡や下流域にある下土浮遺跡と共通する。しかし、基盤層である黄褐色砂質土(シルト層)は同一遺跡内でも異なる。縄文時代以来生活の基盤としていた小野遺跡と館跡の主郭部分では後者の方が粘質性が強い。この傾向は主郭部周辺域や田中下土浮遺跡と共通する。芋川氏館跡の西堀や、今次調査で明らかになった東堀の基盤層はこの粘質化した黄褐色砂質土が厚く堆積し、下部はグライ化した砂礫層と互層になるなど、基盤層の堆積が斑尾川の浸蝕・運搬作用と深く係わっている。

小野・芋川氏館跡の2遺跡は縄文時代前期初頭から居住域となったことを示す遺物類が出土し(笠澤・森・池

田中2003・2004、笹澤・市村・小柳・中村2012) 田中下土浮遺跡でも、その可能性を示す磨製石斧が出土している(笹澤・森・池田2004)。つまり、原状地中央部分は菟尾川右岸の尾根状の台地であったことを示すものである。一方、この台地と町部落との間には低地がある。西堀調査の際にも多量の砂礫土が堀内に流入している箇所がある所から、この低地がかつて菟尾川の流路であったことを示している。

このように芋川氏館跡は菟尾川とその支流に挟まれた縄文時代以降の比較的安定した尾根状台地に立地するが、堀埋土などに砂礫層が認められるところから、地点によっては砂礫層を含み基本土層に違いがある。

今次調査域の基本土層は中世以降現代に至る複雑な土地利用を示すものである。1層は搅乱層、2層は黒褐色粘質土(水田耕作土)、3層は鉄分集積層(第1赤ソブ層)、4層は福正寺整地土である黒色土まじり黄褐色砂質土、5層以下はその下位層で、グリッドL列を境に西と東側では異なる。西側は東堀埋土中層となり、粘質化した青黒色土が第2赤ソブ層を挟んで砂・砂礫・粘質土の互層となり、埋土下層はグライ化した砂層と粘質土の互層となる。グリッドL列東側は再建福正寺整地層の下部が江戸時代前半かそれ以前の包含層で西側と同様に基盤は黄褐色砂質土である。

芋川氏館跡の基本土層は菟尾川の浸食・堆積作用と深く結び付いたものである。しかし、館跡の東堀とその埋土の形成、福正寺の整地など、そこには人の生活活動と後述されるように善光寺地盤という自然活動が加わった基本土層とは異なった独自の土層が形成されることになり、その痕跡に地元で赤ソブと呼ばれる鉄分沈澱層がある。水田や沼沢地に沈澱層として形成され、水質汚染を示す例とされ、当方には数多く認められる。調査地では第1第2の2層があり、発掘調査において地層検討の鍵層として活用した(第3章第1節)。加えて、調査地の土地利用の歴史が文献からある程度知られているので、それと考古学検討を経た土層とのつき合わせから新たな当地方の地域史が復元可能となる。

### 3. 整理作業

表町遺跡の整理作業などと併行して進めた。表町遺跡同様に木製品が多量に出土したため、その整理と保存処理を計画的に進めてゆく上では効率的ではあったが、分析が不十分になった点もある。また陶器については市川隆之氏(長野県埋文センター)、石製品素材は中村由克氏(野尻湖ナウマンゾウ博物館)、長床翠については田中寿子氏((財)松山記念館学芸員)に鑑定を依頼し、各土層の年代化や資料の客観性につとめた。しかし一部資料には層位比定に疑問のあるものもあり、その対応にも追われた。東堀埋土のように低湿地堆積層が場所により異なるなど一様でないからである。これらについても該当する各項で述べている。そのほか多くの人々に指導協力を得たが別に芳名を記載している。

発掘調査及び整理作業で作成した図面類の整理・保管の手順などは専門的方法で実施した。

### 4. 発掘調査日誌(抄)

3月30日 試掘調査、公会堂建設予定地内に4m間隔で試掘坑(1×1m)6ヶ所を適宜設定。手掘りで試掘。予定地内は、戦国時代以降現代に至るまで芋川氏館・福正寺・芋井学校・芋川公民館(田中公会堂)の敷地としてめまぐるしく土地利用されてきた所であり、本調査にむけて諸資料を得ることにある。その結果鉄分集積層である第1赤ソブ層(第3層)上部は搅乱が著しいものの検出した礫石と、第2次整地層(第4層)及びその下部は比較的安定した遺物包含層があることを確認。芋川公民館のコンクリート基礎とくにコンクリート製地下室以外も同様と判断できた。

よって本調査に入る前に表土の搅乱層(20cm)は重機で廃土することにした。ただし、基礎及びコンクリ

リート製地下室は周辺造構への配慮からそのままとした。また、予想される館の東堀は存在を確認のうえ、一部を掘り下げるにとした。これは事前に田中公会堂建設に際して予想される館の東堀を避けた設計となっていることによる。寛永通宝ほか陶磁片が出土した。

4月9日 調査地内は旧公民館跡の布基礎の内側をバックホーにより表土20cmを剥ぎとり。調査地南北間に表土からの東西土層観察用土手（土層図②）、中央に南北土層観察用土手（土層図①・⑩）を設定する。

4月10日 調査上支障になる布基礎の一部3か所の取り壊しと堆土作業。芋川氏館跡の南堀確認調査のため旧公民館入口の駐車場アスファルトを1.6×6.0mの剥ぎとり、トレーナー3設定、重機で掘り下げる。黒褐色粘質土に黒色粘質土の落込みが認められたが南堀とは認められずここまで延長していないことを確認（土層図④）。

4月13日 調査団発会式。相澤教育長より団長以下に辞令交付 換擲（教育長、佐澤団長）調査手順（原田調査主任）事務連絡（梨本係長）、発会式後調査開始。グリッド設定。第1層（表土・搅乱層）第2層（黄褐色粘質土）第3層（鉄分集積層・第1赤ソブ層）まで掘り下げ、黄色粘土ブロックを混じえた黒褐色砂質粘質土（第1検出面＝第2次整地層）を検出。黄色を帯びた黒褐色粘質土面（2層）まで掘り下げ調査。G12に黑色土の落込み、J12・K13に礎石を検出。

4月14日 前日に続きG～I・10～12ライン各グリッドの調査、東西観察用土層（土層図②）調査。午後降雨のため調査中止。信濃毎日新聞社来跡。

4月16日 館跡東堀の想定位置に確認のためE11、F11をトレーナー調査。しかし未検出。矢野恒雄氏、長野市教委風間栄一氏来跡。

4月20日 K11グリッドに径35cm大の礎石検出。J12グリッドで径約30cmのSX19検出。調査区内東北L08～O09のグリッド内、溝SD07内の礎群検出。

4月21日 M09グリッドに新たに礎石検出。礎石群と柱筋が合わないため移動したものか。県埋蔵文化財センター中野亮一氏、信濃毎日新聞社来跡。

4月27日 G10～II0グリッド南側に東堀西脇確認のため深掘りのトレーナー2設定。黄色砂質土（6層）に青黒褐色粘質土（19層）の落込み確認、これを基に調査区東堀西脇掘り込みの範囲確認を進める。L08～O08ラインより南へ第1次整地面（4～2層）まで造構検出。

4月30日 H09～H11・I07～I10グリッドの礎群（SD07上部の礎層）の検出。礎層を切って廃棄土坑SX32確認。SD07礎層から陶磁器片、瓦片等が多数出土。

5月8日 SX32調査、SX13・SX14・SX15の断面実測。H11グリッド及びSD07より鉄滓多数廃棄状態で出土。

5月12日 SX32写真撮影及びSD07実測のため礎群の検出清掃。

5月14日 あらたにJ12グリッドに礎石建物SB07の礎石4を検出。SX32・SX16～SX20の平面実測始める。

5月18日 H11の礎群取り除き、SD07の堆土掘り下げ、第2赤ソブ層の確認、健層として重視することとする。SX14・SX15の断面実測。遺跡内東南のL～Oグリッド整地面まで造構検出。

5月20日 土層図②の実測と観察用土手の取り外し。東堀東脇の検出確認のためトレーナー2をII1～K11まで延長し1.7m掘り下げる。K11の黄褐色砂質土（6層＝地山）に東堀掘り下げ面を検出、これが東堀の東法面と確認でき堀の東西幅が8mと判明。横列SA05堀方1～3堆土掘り下げ。いずれも深さ約70cmを測り底に根残りがあった。堀は径20cmで明らかに他のピットとは様相が違い今後の検討課題となる。

5月21日 上層造構の全体写真撮影。東堀規模がほぼ確認できたところで堀底土の掘り下げにあたり、作業の安全確保のため堀の深さを現調査面から2m以上と推定し、東西・南北6mをそれぞれ調査範囲とした。また、南北の掘り下げ法面を45度とし、1.5m下がりで50cmの大走りを設け作業を進めることとした。結果として堀底

は $1 \times 2\text{ m}$ となり、かろうじて障壁土坑を確認できた。SX32の雑群の除去と下部遺構 SD07の埋土を掘り下げる。

5月25日 J08・112グリッドで検出の木地が失われ漆塗膜のみとなった漆器椀を発砲ウレタンによる取上げを県埋蔵文化財センター白沢勝彦氏の指導で実施。

SD07のI09・II0グリッドに検出された

雑群とSD07の平面実測、SD07底面にSD09の溝落込みを検出する。安全を確認のうえ H09・I09より、東堀を1.7m掘り下げ始める。トレチ1・2の土層実測。

6月1日 東堀内に前日の雨で多量の雨水が溜まり北側トレチ6法面幅1mの土砂崩落。又東堀内の湧水が激しく排水路の設置は不可能なため排水ポンプ頼みとなる。調査を難航させる起因となり安全確保と併せ必要最小限の範囲で調査を進めることとなった。

6月4日 東堀西肩落込み青黒色粘質土(19層)、K10・K11黑色混じり黄褐色粘質土を掘下げ東堀東西肩の落込みを確認する。県埋蔵文化財センター伊藤友久氏(建築史)来跡。建物遺構の指導。

6月8日 東堀内の青黒色粘質土(19層)、黒褐色粘質土(14層)掘下げ。湧水が更に多く調査は益々難航を余儀なくされる。各検出ピットの埋土掘下げ及び廃棄土坑の断面実測。J11寛永通宝が6枚銭差の状態で出土。

6月13日 現地説明会 午前10時~12時。來訪者110名。午後堀の検出。土層図③実測。

6月16日 県埋蔵文化財センター市川隆之氏、県教育委員会遠藤公洋氏来跡。中世陶磁器、建物跡などの指導。

6月18日 調査区L~Oライン再精査。

6月23日 堀底部中央の東西壁方向に障壁を検出。長さ100cm、高さ25cm、幅15~20cm。

6月26日 遺跡全体写真の撮影。町内電気工事業者清水工務所の協力により高所作業車で撮影実施。

6月27日 堀の平面実測、縦横断面レベル測定。各遺構の精査及び実測。

6月29日 L09グリッドで井戸と思われる落ち込み(SE02)を確認したが日程の関係により部分調査。埋土保存とする。

6月30日 本日で調査終了。解散式。

7月1日 実測未了部分の実測ならびにチェック。



挿入写真1 現地説明会

注1 飯岡町宇川地区の遺跡の概況ならびに考古学史は小柳義男氏に詳しい(小柳2012)。

## 第2章 遺跡の環境と過去の調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

#### 1. 遺跡の位置（第2図）

芋川氏館跡（SIY）は長野県上水内郡飯綱町大字芋川字中峯前田にあり、標高は538m 前後である。遺跡がある飯綱町は長野県の北部にあり、隣接する信濃町とともに、長野県北部（北信）から新潟県頸城（上越）地方に抜けるルート上にあり、旧石器時代以来、人々が主としてこのルートを往来した。具体的には長野盆地（善光寺平）から千曲川の一枝流である鳥居川を遡上し、信越国境を経て関川沿いに下れば頸城平野に到達できる。現在では国道18号線、上信越自動車道、JR 信越本線、そして間もなく開業する北陸新幹線がこのルート上にははある。

芋川氏館跡は鳥居川水系より一段高い台地上にある斑尾川水系にある。斑尾川は鳥居川よりも規模はごく小さく、中野市替佐で千曲川に合流し、その道沿いは上越地方から野尻湖を経て中野地方（中野平）に抜ける最短ルートとなる。中世の中野には高梨氏がおり長尾（上杉）氏と密接な関係を保持しており、このルートは中世社会では重要な政略上の道路としても開発されて来ている。

斑尾川水系の大部分は狭い谷で、館跡のある芋川地域のみ南2km 東西0.5kmほどのなだらかな扇状地地形となり、沖積地が発達している。繩文時代以降中世に至る芋川氏館跡・田中下土浮遺跡（笠澤・森・池田2003・2004）や小野遺跡（笠澤・森村・小柳・中村2012）が調査されている。この一带は古代から中世にかけて『近衛家所領目録』にある「芋河荘」の故地であろう。とくに、小野遺跡では13世紀代の掘立柱建物群からなる豪族層の屋敷地が明らかにされている。

このように、芋川氏館跡は地理的にも、また歴史的にも、「芋川」という土地の中で語られるのである。



第2図 芋川氏館跡の位置と周辺の遺跡（1:25,000）

## 2. 芋川氏館跡と福正寺跡

芋川氏が文献上に登場する確実な史料は、永祿12年（1569年）2月24日の武田信玄の芋川親正への手紙である。この頃、芋川氏は武田氏支配下にあつたらしく「其甥無事ニ候哉、承度」と信越国境の様子を聞いている（『信濃史料』13の281）（註1）。芋川氏の支配地がどの程度であったか、確定できる史料はないが、手紙の文面から類推するに、芋川の地から信濃町に至る道筋であったものと思われるとともに、この地を信玄が重要視していたことの表れである。

武田氏滅亡後の織田信長支配下では善光寺平は森長可の領する所となる。芋川親正は北信の国人層と謀り、森長可ら織田方に一揆（『芋川の乱』）を企て大敗北をする（『信長公記』）。一揆の企ての背後には越後の上杉景勝がいたとも云われるが、この頃、芋川氏が北信地域で有力国人に成長したことを見すものである。

信長が本能寺の変で没すると北信は上杉支配下となり、親正は本貫地芋川のみならず、新たに牧之島城代（長野市信州新町）となり、香坂・大岡（ともに長野市）の地が与えられる。親正の知行高は4,485石で海津城代須田氏、長沼城代島津氏に次ぐ（文禄3年9月「定数員數目録」）。北信の有力諸将の上位に位置することとなる。

慶長3年（1598）正月豊臣秀吉支配下となった上杉景勝が会津に移封されると、芋川親正は北信の諸将とともに景勝に従った。この時秀吉の命により百姓を除く中間・小者に至るまで親正に従い、芋川氏館跡は無人の地となったと云われる。

館の東に接して芋川越前守親正によって、永祿10年（1567）妙福寺が建立される（『飯山藩寺社領由緒書』）。同寺の寺伝によれば、妙福寺は越後から移転して来たと云うが、場所は特定されていない。妙福寺は寺域が方形区画で塙割は館跡と一致する。東側は班尾川、北と南側は掘跡かと思われる低地や水田がある。妙福寺が館の副郭と云われる所以である（郷道・白田1983）。なお今日の班尾川はこの部分を含めて土地改良事業により改修されている（挿写真2・3）。いずれにしても、芋川氏館と妙福寺が政治と信仰の差はあったとしても、一体として芋川氏の支配権運行の拠点であったことは十分に考えられる。

明治12年（1879）の「寺院明細帳」（『長野県庁文書』）によれば寛永14年（1637）妙福寺参道の西側一角に越後から移転して妙福寺塔頭として、福正寺が建てられ、弘化4年（1847）の善光寺地震で被災したと云う。さらに同記載では「一、堂宇間数 本堂無之庫裏間口十間奥行五間 一、境内坪数並地積百五拾五坪 宮有地第四種」とある。寺域は155坪で本堂は無く10×5間の細長い庫裡一棟からなる寺院が福正寺であったことになる。敷地面積155坪は今次調査地の面積より65坪ほど少ない。しかし、庫裡の正面は文面からは分らない。明治13年（1880）頃記載の『長野県町村誌』によると境内は東西10間、南北15間3尺とある。先の「寺院明細帳」と敷地面積は若干異なるが建物についての記載はない。明治13年（1880）「真宗東派夏正寺院明細帳」（『長野県庁文書』）には「堂宇本堂三十坪 庫裏四十五坪」と本堂と庫裡を分けて記載している。史料からはそれぞれ別個の建物と見られ、さきの「寺院明細帳」の記載とは異なる。この相違は「夏正寺院」は更正寺院のことと、東本願寺末寺の寺院を全国的に網羅するにあたり、明治12年に福正寺が妙福寺塔頭から離れた独立寺院にふさわしい寺院として本堂と庫裡が別けられたことから生じたものと思われる。実体は「寺院明細帳」の記載のとおり、建物は庫裡1棟のみで、その中に本堂と庫裡分を分離した使い分けがなされていたものと思われる。ただし、この史料から善光寺地震による倒壊前の福正寺（前期福正寺）は本堂と庫裡2棟を基本とする寺院であったことを暗示している。福正寺が「本堂無之」庫裡のみからなる寺院であるという記載は善光寺地震で本堂が崩落し、緊急避難的に庫裡のみ再建されたものと考えられるが、被災前の福正寺についての同時代史料はなく、寛永14年（1637）（『真宗東派夏正寺院明細帳』では寛永6年）創建などの前述3史料の記述はいわば「福正寺の寺伝」によるものであり、これらの点は発掘調査の成果であふれる（註2）。

明治6年（1873）福正寺境内に芋井学校が開校される。明治8年の『長野県公立小学校表』によれば「旧民家借用」とあるが「旧民家」とは福正寺庫裡のことであろう。

明治12年（1879）福正寺は妙福寺から独立し「純本山東本願寺末」となる（『長野県町村誌』など）。明治17年（1884）芋井学校は新たに建てられた芋川中峰に移り、福正寺の仮校舎から離れる。そして、明治42年（1909）福正寺は石川県鶴来町（白山市）へ移転し、堂宇は壊され広場となって盆踊りなどに使用される（小林・矢野ほか1980）。

昭和29年（1954）その広場に芋川公民館（のち田中公会堂と改称）が建てられ、平成21年（2009）その建物も取り壊され今回の発掘調査となった。

調査地IV W 地区は芋川氏が館を築いて以来廃館、福正寺の創建と善光寺地震による被災と再建、福正寺庫裡を利用した芋井学校の開校と移転、福正寺の移転、空地化とその利用、そして芋川公民館の建設と取り壊しなど戦国期以降今日に至る間、めまぐるしく土地利用がされて来たのである。



挿入写真2 主郭を介した調査予定地（中央奥旧公民館）と妙福寺（左）一手前西堀（道路）・右南堀の一部

## 第2節 第1～3次調査の概要

### 1. 芋川氏館跡の調査（第6図）

芋川氏館跡及び隣接の田中下土浮遺跡の発掘調査は第1次から3次にわたり実施された。いずれも主要地方道（県道）長野荒瀬原線芋川バイパス建設に係るものである。建設計画は当初三水村指定文化財である主郭を通過するものであったため、村文化財調査委員会の同意が得られず、道路建設はのびのびになっていたが、幾度となく重ねられた地元協議などを経て指定地である主郭部分をさけて、西堀部分を建設予定地とするものであった。よって、記録保存を前提とした発掘調査を実施し、検出した遺構は極力、埋め立てて保存することとした。発掘調査は調査団を設け、村教育委員会が主体で実施した。尚、調査にあたっては長野県教育委員会の指導を受けた。

第1次調査は平成13年10月26日から12月1日、第2次調査は翌年の6月27日から8月24日、第3次調査は平成15年4月28日から7月30日まで実施された。3次調査は田中下土浮遺跡と併行して、館跡の主郭内域の一部を道路工事の関連事業と関連して実施した。事業は調査地を30cm程度削平して農地とするものであった。以下今次調査に直接係る部分について概要を述べる（佐澤・森・池田2003・2004）。

第1・2次調査 芋川氏館跡は「堀の家」と呼ばれる方形の主郭とその4辺を堀で囲まれた芋川氏の館跡とされた戦国期の遺跡である。東側には芋川親正によって創建されたという妙福寺がある。

西と北堀は周辺よりも一段低い水田と主郭西北隅の「L」字状に残る土壘の存在によって、調査前から存在が推定できた。しかし、南堀は民家が、東堀は妙福寺の境内地内の新設墓地や公民館の建設によって、地形が改變されていて確定できない。僅かに主郭南東隅に主郭線に沿う土手が「L」字状に認められる所から、堀の内縁とすることで、芋川氏館跡の規模及び構造を推定していた。

道路建設は西堀に沿って予定されたために、西堀の全域を2次にわたって発掘調査し、ほぼ全域（75×8m）を明らかにした。ただし、予定地が西堀の全幅からはずれていたため、西堀の東壁及び土壘との関係は未調査となつた。つまり、掘り込み面の上端と底部の幅は西堀と土壘から得られた推定値によるとともに、西堀は底部に構造の異なる掘り込み（障壁土坑）や高台部（堀底台）を設けたいわゆる障子堀が、長野県内ではじめて明らかにされたことになる。

西堀の全長は掘り込み面80mでほぼ中央（調査区北端から43m）の位置に上端幅2mの土橋がある。この土橋南6mの2基の障壁土坑を境として堀幅が異なる。北側では堀上端幅（外法）は8m、堀底幅3.8m前後である。土橋より南側は堀の外法は6mと狭まる。調査当初は直線を予想していただけに予想外のことであった。西堀の西壁下部は北側では傾斜35度で整然かつ直線的に粘質土を1m前後掘り込み、壁面は平坦で極めて滑りやすい構造とし、堀底は北西隅側には高低差や規模の異なる障壁土坑を交互・列状に、さらに2基並列に配置している。障壁土坑は堀底から垂直に掘り込まれ、もっとも深いものは1mである（SK05）。尚、各障壁土坑の一部は幅30cm、高さ10cm前後の土手（障壁）で区切られ土橋側では区切りが大きく高低差はない。土橋南側は堀幅が狭るとともに西壁の掘り込みも小さくなる。しかし、南西隅の土坑SK19は堀底から120cmと深くこの部分を特に意識している。

かように西堀は調査時にモルタル化した粘土層から多量の湧水があり、掘削築時でも常に冠水状態にあったものと思われる。云わば「水堀」であるとともに大きさや深さの異なる障壁土坑を配し防衛を目的とした、信濃で初めて検出された障子堀であり、未だ類例はない。障子堀は後北条氏の特有の堀とされるが、その支配地を越え

て調査例が広く知られるようになっており（池田ほか1998・1999、中世城郭研究会1999）、本例の潮流がどこにあるか未だはっきりしない。

西堀の主郭側ラインは未調査地を残すものの堀の構造と規模が明らかにできたことと、南堀の存在と位置を推定できる根拠が得られたことである。從来南堀は民家の西側の直線的な切り通しとするか、東南隅の土手（切り通し）とするか、僅か3mのことではあるが判断できずにいた。しかし、西南隅の土坑SK19によって、その延長線が東南隅の土手の方向と一致することによって、南堀の位置を確定することができるとともに、その土手が直角に折れて北に向かう所から、この東側の土手を主郭側掘り込み線としてその東側に東堀の存在を想定したのである。

第3次調査 主郭西南区（30×10m）を発掘調査した。主郭南東域の実態と南堀に併行する土壙の存在を明らかにする機会であった。土壙跡は検出できなかったが、戦国期の井戸と小型の掘立柱建物群は土壙想定地をさけて構築されており、逆にそれが土壙の存在を示すものである。またここには18世紀後半以降の集石SX09、石組SX10が構築されている。この噴土壙は前平し掘を掘め立てたことによるものである。因みに現存する西北隅の土壙幅は6m、高さは地表から1m、堀底からは2.2m前後であり、南堀に推定できる土壙も戦国期の遺構分析から現存する土壙と同規模であったものと云える。

以上第1次～3次調査では東堀のみ考古学的には未確定ということになり、主郭の規模もまた推定の域を出ないということになる。

土壙の外堀調査は第1次調査時に土橋のSX03延長線上にトレーナー（5×3m）を西堀に沿って設けて実施した。これは土橋の延長線上に幅2mの農道があり根小屋と推定される「町」集落に続いていたからであるが、遺構などは未検出であった。

## 2. 田中下土浮遺跡の調査

田中下土浮遺跡は沼地を挟んだ芋川氏館跡の南方尾模上にあり、旧塩尾川の右岸にある。平安時代から中世に至る断続的に営まれた集落跡であり、中世では戦国期の掘立柱建物群からなる。検出された建物跡は2棟分と少ないが、芋川氏館時代の集落跡であろう。従来考えられていた「町」部落の模小屋（小林・矢野ほか1980）とは異なる集落跡となる。

註1 「信濃史料」13巻281は13巻281頁のことであり、以下同様である。

註2 福正寺の創建については本報告書では「寺院明細帳」や「長野県町村誌」記載の寛永14年（1637）を採用し、「真宗東派更正寺院明細帳」記載の寛永6年はとらない。これは福正寺が妙福寺から離れ独立寺院となるための更生（申請）であり、客觀性を欠くからである。しかし前記の3点の史料は共に福正寺の「寺伝」を元に明治12年前後の報告であり、同時代史料ではない。したがって福正寺の創建については「寺伝によると寛永14年」とすべきであるが略して寛永14年と記載している。なお、考古学的検討でも福正寺の創建が17世紀前葉であることを確認した（本文第3章）。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 鍵層の検討

#### 1. 東堀埋土

調査地の土層はすでに指摘したとおり、グリッドK列とL列の間にある芋川氏館跡東堀東側掘り込み面を境とし大きく異なる。H列からK列間を東堀埋土とし、L列東側を東堀東部として以下述べる。しかし、K列の出土遺物については両者にまたがるため個々に検討した結果による。

発掘調査の過程でもっとも難解で留意しなければならなかったことは、試掘調査で確認され、その後本調査で部分的に検出された礎石群と、それらが据え付けられた整地層が「寺伝」に云うところの1637年創建の福正寺のものであるかどうかであった。したがって、後世の複雑な土地利用を反映して、失われた礎石跡を見出し、建物跡を把握することにあった。この為整地層の確認と現存する礎石の据え付け方を徹底的に調査することであった。しかし、この点は礎石据え付け痕を確実に検出することは不可能であった。整地層にはその後多数の廃棄土坑(集石)の構築や芋川公民館のコンクリート基礎などでかなり不安定であったことによる。

SD07とその周辺、整地層およびその下層などの土層の形成過程の把握と陶磁器による年代把握は調査時の大変な課題であった。つまり、普光寺地震より前の福正寺関係の同時代史料がないことから、整地層が創立期のものなのかあるいは明治12年(1879)の『寺院明細帳』記載の普光寺地震による「被災」かが問題となる。東堀埋土内の調査過程で、SD07とその周辺部で出土した陶磁器は、整地層下部から肥前陶磁V期や18世紀末以降の地方の製品(註1)を含み、整地層が創立期ではなく、普光寺地震による崩壊と再建にともなう後世のものであることと判断され(註2)、創立期の整地層の検出が近々の課題であった。

以下、これらの点を解く鍵層となる再建福正寺の整地層、第1赤ソブ層(3層) 第2赤ソブ層(15層)を中心に、その前後の層位について述べる。特に調査地が戰国時代以降現代に至る複雑な土地利用がなされて来た以上、遺構の検討の前に、鍵層とその年代付与が必要と考えるからである。

なお、土層のナンバー表示は遺構ごとに付与しているが、東堀埋土は今次調査地(IV W地区)の基本土層と一体化して使用している。

#### (1) 第1赤ソブ層(3層)(第17・29・32図、PL 4-7)

上部層は第1層(擾乱層)と第2層(黒褐色粘質土)下にある水平堆積した地元で「赤ソブ」と呼ぶ一定期間溝地状態の中で形成された鉄分集積層であり、一部を除き調査地全域で認められた。第2層が水田耕作土であり、福正寺取り壇し以降に造成され芋川公民館建設前の間の造成土であるが、史料がないため詳細は不明である。ただし、トレンチ3内の土層図(第12図)には第3層は認められない。この部分は道路に面しているところから、福正寺の入口部分として長らく空地として利用され水田造成はなかったらしく、「三水村誌」に云う村人たちによって益踊りなどに利用された広場にあたるものであろう(小林・矢野ほか1980)。よって、第1赤ソブ層の形成は福正寺が移転に伴い取り壇された明治42年(1909)から、その跡地に造成された水田耕作によるもので、芋川公民館が建設されるまでの昭和29年(1954)の間ということになる。第2・3層からは一錢銅貨を含む明治・大正時代の銅貨3点や芋井学校時代に使用されたと思われる石盤片(19・20・22) 石筆(24・25) 石硯(23)がある。このほか玩具片(6)、肥前や近・現代の陶磁器、耳搔(8)などがあり、遺物からも証明される。

(2) 再建福正寺整地層—第2次整地層（第4層、4-2層）（第12・22-25・28・29・32層）

黄褐色粘質土で黒色土を混じているが、版築などは認められない。入口部調査域（トレント3）とSD07の周辺を除く全域に認められた。ただし、後述されるとおり、東堀東域は黒色土混じりの黄褐色粘質土か、黒色砂質土（4-2層）である。水平に整地され厚さ20cm前後の造成上で、礎石は整地土に掘り込んで据えられていたが、礎石据え付け痕は認められなかった（図2-2、PL4-7）。整地層下部は青黒色粘質土を挟んで下部に第2赤ソブ層（第15層）がある。SD07とその周辺には整地層は認められない。土層図②・③では見るとおり第1赤ソブ層直下の第2次整地層（第4層）下部の12層は溝SD07で切られる。その南側4m下方では第1ホソブ層直下で第2次整地層と7・8層を切って薄い河川堆積物（5・6層）がSD07の上にのるため、第2次整地層はSD07の右岸ではごく一部が認められただけである。

第2次整地層からはさまざまな遺物が出土した（PL5）。肥前陶磁器Ⅲ～V期など（137・192～196など）と18世紀末以降の「地方窯」で焼かれた壺鉢などの雜器類が多い（104・107・155・161・164など）。寛永通宝は48点余り出土しているが大半は第2次整地層出土である。寛永通宝は後述されるが寛永13年（1636）の公鑄以来、江戸時代を通して各地で大量に鋳造され、明治時代に入る頃まで流通したもので、年代の絞り込みは個々の貨幣の生産地と時期の特徴、流通の分析を絞りないと困難である（小川2001）。ほかに、石鉢（3）砾石（9・12・14）石硯（18）金銅製品（1・3・5）銅製円鉢（9）鍔（10）小柄（11）煙管（12・14～17）釘（24）などがある。金銅製品残欠などは、善光寺地盤で破損した創建福正寺の仏具の一部とも思われ、鍔や小柄なども含め整地層内に取り込まれたものと思われる。

(3) 第2赤ソブ層（15層）（第7・17・22・25・26図）

東堀埴土内上層にのみある厚さ5cm前後の鉄分集積層で上下2層からなり（土層図②）グリッドK列東側ではない。上層（15層）は海拔538.50m、下層（15-2層）は538.30m前後である。南に向いて傾斜するなど調査地内では一様ではなく、形成には上部の土層のあり方に影響を受けたものである。また第2赤ソブ層のレベル自体は調査域の中では両層とも東堀の東壁から始まり、SD07で上層は切られ以下不明となる。下層はSD07の底部を経て東堀西端の掘り込み面埴土内の整地層下部で消える。下層のレベルは東堀西岸では高くなり、上層のレベルとほぼ一致するところから、SD07西壁付近で上・下2層が合わさっていたものと考えられ、間層に12層がくる。南側8mの土層図③では東堀の東壁寄りでは14層上部に上層は認められず下層のみであるが、西寄りでは14層に対応する12層が第2赤ソブ層の上部層となる。土層図③にみるとおり12層と14層の間に13層が入り込んだ形で堆積している。これら東堀埴土層は凹レンズ状の堆積土で土層図③では17・18と19層間に不連続面（PL4）となり、以下23層まで東堀底部となり堀が順次堆積していくことを示している。また、12・14層と第2赤ソブ層は下位の17層など堀下部埴土層を切り、第2次整地層とその相当層（7・8層）がSD07によって切られる。さらにSD07埴土の上層（5・6層）は第2次整地層を切って堆積していることからSD07はそれらよりも新しいことになる。

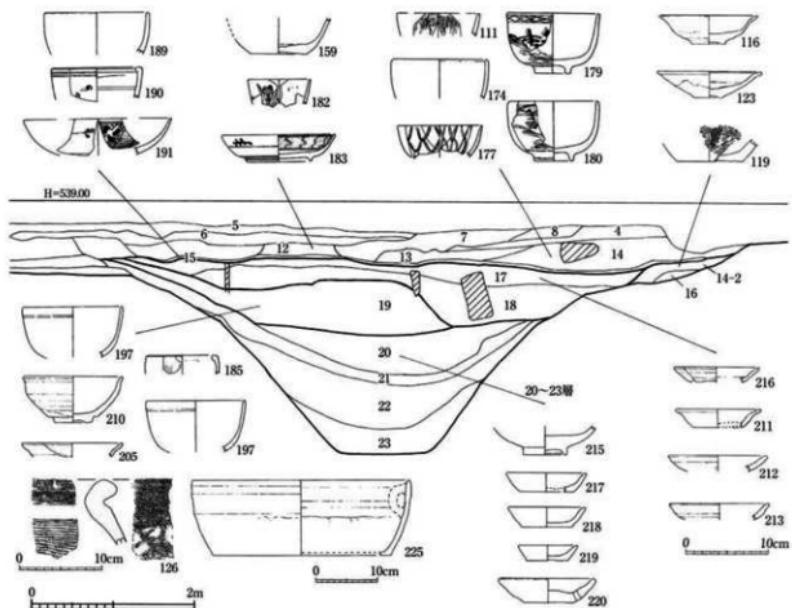


第3図 土層図・トレント配置図 (1:300)

以上、土層の形成過程ならびにあり方から、第2赤ソブ層下層は上位層と下位層の間にできた沈澱層であることが明らかとなった。

次にその時期について検討してみる（第4図）。第2赤ソブ層直上の14層（黒褐色粘質土）からはH12グリッドとその周辺部に良好な資料がある（174～181）。肥前陶磁器Ⅲ・Ⅳ期（174）、Ⅳ期（177）とⅤ期（175・176・178～181）の碗類であり、この層が肥前陶磁の編年でⅣ～Ⅴ期である1780～1860年頃（大橋2000）ということになる。第2赤ソブ層（15層）では肥前陶磁Ⅰ～Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ期（188～191）が、直下の17層からは肥前陶磁Ⅱ期（202～204）、大窯2期（211）瀬戸・美濃窑窓1期の志野丸皿（212～214）があり、この層の出土陶磁器は17世紀前半であり、さらに下層の19層からも肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の1点（197）を除いてほぼ同一時期の陶磁器類（205～207・209・210・224）が占める。17層によって切られた東堀東壁の第2赤ソブ下層直下の粘質化した黒褐色砂質土（14～2層）からは肥前陶磁Ⅰ、Ⅱ期（114・116・123）大窯2期（118）越中瀬戸（119）が出土している。肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の陶器碗（197）は他の併出陶磁から見れば時期が新しく、17～18層出土に係わるものと思われる。だとするならば、14～2層は、資料が少ないとされるが、その資料を尊重すれば、14～2層は肥前陶磁Ⅱ期を下限とする17世紀前半、そしてその層を切るように推積している17層は、肥前陶磁Ⅲ・Ⅳ期の18世紀後半の年代が与えられる。14～2層は第1次整地層（24層）と土層は異なるが、時間的には第1次整地層に相当する残存層と思われる（第12図）。

以上から第2赤ソブ層下層は1850年頃を定点とすることができる。一方19層以下の東堀埋土は堀の機能が停



第4図 東堀SD05における陶磁器・土器の層位別出土状況図（1:60）

止した17世紀初頭から後半代の期間に堆積し、17・18層を含めた下位層の一部が弘化4年の善光寺地震で欠損・流失し、そこへ14層以上が短時間に堆積したものと考えられるのである。

すでに述べたとおり第2赤ソブ層とその上位層（12・14層）と下位の17・18層の間に第2赤ソブ層下層が介在し、17・18層とは不整合（不連続）である。この面は水平ではなく東側が低く、西側との差は30cmであるとともに、小刻な起伏が認められるところから、浸食面であったことを示している。第2赤ソブ層上層も同様と思われる。この浸食面と12層（青黒灰色砂礫土）・14層（黒褐色粘質土）とは不整合であるところからその要因を求めて川（溝）の検出を試み、部分的にその痕跡を後述のとおり杭列Aに認めた（SD09）が、落ち込み面などを含めた溝の全体像は確認しえなかった。17・18層もまた枝など多数の自然木片などを含み、一時的出水による水成堆積であることを示し19層との間に不連続面があり、前述のとおり1847年の善光寺地震によるものと考えてよい。よって、19層の上位にあった創建福正寺の第1次整地土もこの時流出したのであろう。第2次整地層出土遺物と年代的に近似しているところを見るならば、上位土層の堆積は短期の一括堆積となろう。J09グリッドなどに部分的に認められた南北方向の杭列Bと溝状の痕跡（SD13）は土砂の流出に対応したものと思われる。発掘調査では液状化などの地震痕跡は未確認である。しかし、小山丈夫氏の善光寺地震の被害調査によれば、飯綱町は極めて深刻であった（小山2007）（註3）。東堀埋土が南北方向で塙尾川水系の流路方向と一致する上に、調査地南端の地境には高さ1mの石積がある。石積はコンクリートで固められているので旧公民館建設時に積まれたものであるが、そもそもこの部分には段差があり、土手または石積みがあったものと思われ、その部分が地盤により崩落し、整地土を含む基盤土層の一部が崩落・流出された結果、その痕跡が当初第2赤ソブ層下層の不連続面と12・14層の堆積層と考えたが、むしろ18層と19層間の不連続面と考える方が無理がない。東堀埋土以外のJ1列より東側と東堀西側の芋川氏館跡主郭域は、繩文時代以降の安定した土層となっている（笠澤・森・池田2004）。

また、礫を含む19層と砂質土主体の20層との間でも、不整合面が一部に認められるが、出土した陶磁器及び崩落後から第2次整地層形成（造成）までの時間的経過などを考えればそこまで善光寺地震の影響とするには無理がある。

よって善光寺地震による土砂の崩落と流出は不安定な東堀埋土内中央部のみに生じたものである。

ただし、石垣を含めた東堀埋土の流出方向である南北（上下）方向の土層把握は調査範囲が狭いこともあって不十分であり、出土物も含めた再検討も皆無ではない。しかし、発掘調査の成果を重視すれば、堆積土は18層に限定すべきものと思われる。少ないデータからではあるが、土砂の流出量を含めたさらなる細部検討が今後の課題となろう。

以上後段各章で検討されるが、考古学的検討による東堀埋土の各土層を史料にみる土地利用の歴史にあてはめると表1のとおりとなる。

表1 東堀埋土の形成と契機

東堀埋土層の形成	土層形成の契機
・23～19層の形成	・東堀の調査1598～1600年 （芋川氏の会津移住・関ヶ原の戦いに備えた再整備後）
・19層上部へ福正寺第1次整地層の造成	・福正寺の建立（1637年～17世紀後半代）
・19層の認出と12・14層の堆積	・善光寺地震（1847年）による福正寺の倒壊
・再建福正寺の整地層（4層）の造成	・福正寺の再建
・水田の造成（2層）・一部広場化	・福正寺の移転（1909年）
・水田の廃棄と公民館敷地の造成	・芋川公民館の造成（1954年）

## 2. 東堀東部域（第12・22図）

東堀埋土がその形成過程から複雑であるのに対して、東堀の掘り込み面東のグリッドL列以東の基本層は、搅乱層（1層）黄褐色粘質土（2層）第1赤ソブ層（3層）第2次整地層である黑色土混じり黒（褐）色砂質土または黑色砂質土（4～2層）、黑色土混じり黄褐色砂質土（第1次整地層、24層）黄褐色砂質土（9層）である。9層は東堀西域では東堀の基盤層で直下に砾層（26層など）がくるなど一様ではない。L列東でも同様である。とくにL列では調査地北側からの黑色砂礫層が黑色混じり黄褐色砂質土層を切り込んで流入堆積するなど状況が異なるが両層の前後関係は知りうる。L列東で検出された掘立柱建物SB08などは第1次整地層（24層）直下の黄褐色砂質土層を掘り込んでいるがL列検出のSA05もまた、黄褐色砂質土層に相当する黑色砂礫・暗赤褐色砂礫層を掘り込んでいる。各遺構が基盤とする各層相互の細部調査は未実施であるが、検出面での各層の観察で見る限り、横列SA05と掘立柱建物の検出面との時間差は認められない。L列東の出土遺物は極めて少なく信頼度は小さくなるが、比較的安定した出土状態にあるので参考となる。出土遺物は第2次整地層（4～2層）からは多數の寛永通宝とともに肥前陶磁器Ⅲ～Ⅳ期（97～99・102・103）瀬戸・美濃產と思われる18世紀中葉以降の仏龕具（101）地方窯の小型壺などがある。よって、この層の形成が東堀埋土の第2次整地層に相当することになる。また、横列SA05の構築は後述のとおり16世紀末であるが、掘立柱建物SB09の上部にある黑色土混じり黄色砂質土層（24層）との関係は黒褐色砂礫層が介在するために不明である。しかし24層からは肥前陶磁Ⅱ期の端反皿（115）、丸皿（121）、Ⅲ期の手塙皿（125）が出土している。よって第2次整地層の造成は肥前陶磁Ⅲ期の年代である1650～1690年代となる。ただしⅢ期の手塙皿は1点のみの出土で、大多数（といっても総数は少ないが）がⅡ期以前であり、寺伝で云う福正寺の創建年1637年を考えれば手塙皿の混入も考えられるので、17世紀前半代となる。

以上から考古学上から見た場合には黑色砂質土・黄褐色土を混じえた黒色砂質土層（4～2層）は再建福正寺整地層（第2次）であり、その下層の黑色土混じり黄褐色砂質土層（24層）は創建福正寺の整地土層（第1次整地土）になると思われる。よって、掘立柱建物群は創建福正寺の建物と云えずSA05とともにこれらに先行しSA05の構築時期の越中瀬戸Ⅰ期のうちに、第1次整地土の造成は肥前陶磁Ⅱ期の1600～1650年代となろう。

## 第2節 古代・中世の遺構と遺物

### 1. 古代（平安時代）（第5図、表5）

9世紀以降の土器類が少量出土した。大半が東堀埋土内出土で散在的であって、遺構も認められなかった。

遺物は須恵器壺B・壺C・皿・蓋・甕、土器器壺・甕、黒色土器壺・甕、灰釉陶器皿である。須恵器壺Cには瓦質胎土（3・4）を含むところから、飯綱町前高山古窯址群（笠澤・佐藤・原田ほか1986）焼成のものであろう。灰釉陶器皿は東濃光ヶ丘1号窯型式である。

古代の遺構・遺物は芋川氏館跡主郭内や田中下土浮遺跡など竜尾川水系に広く認められるところから古代から中世初期の芋川庄の中心が、当地域にあったことを示すものである（笠澤・池田・森2004）。

### 2. 中世（戦国期）

#### （1）東堀 SD05（第7図、口絵1・2、PL3）

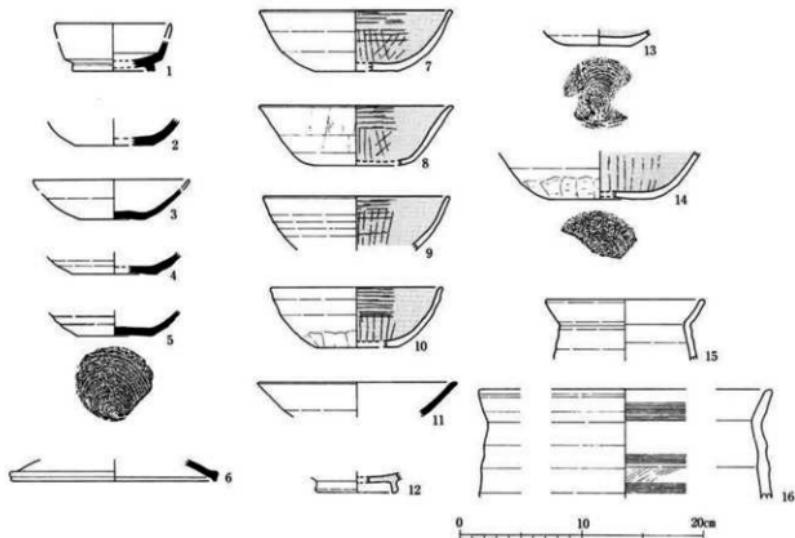
溝SD07の下部に検出された芋川氏館跡の東堀跡である。第1～3次調査では調査成果と現地の地形等からの総合判断で、芋川氏館跡主郭と妙福寺の境界を東堀の西側掘り込み線とする位置を想定したが、今次調査では東堀に8mずれていた。このラインは、妙福寺境内の新旧墓地の境界であるとともに溝SD07のラインである。

東堀は主軸方向がN10°Eで、上端で幅8m底部幅1m深さは検出面から25mであるが、実質調査域は南北方向は上部で6m、底部では2mである。これはトレンチの縁を安全法面としたためである。掘り込み（検出）面は西端で第9層（黄褐色砂質土層）、東端は第9層に対応する29層（黄色土混黒褐色砂礫層）である。西堀に比較して検出面と壁面の状態が良く、ほぼ構築時の状態が保持されているものと思われる。ただし、堀外の主郭側（東土塁跡地）は旧公民館建設時に地下室が設置されたため、大部分は被損され調査はできなかった。東堀の壁は断面形が逆台形状で、上段は比較的緩やかに落ち込むが中段以降は急角度（38度）で底部に達している。この点は西堀の縁と同様である。底部幅は1mで西堀は全掘してないため推定値ではあるが約2mである。東堀の長軸方向に直交して底部（堀底）には上段長180cm下段長100cm幅50cm高さ30cmの土手（障壁）がある。障壁は1ヶ所のみ確認したが、未調査地にいくつか設けられ、その間を障壁土坑としているものと思われるが長さは未調査のため不明である。西堀は堀底幅を広くし、そこに平面形・大きさや深さの異なる障壁土坑や堀底台を巧みに配置して障子堀としていたのに対して東堀では堀底を小さくし、そこへ単純に障壁を築いているなど、同じ障子堀でも構造が異なっている。勿論、今次調査で得られた知見は東堀のごく僅かであり、西堀でも場所によって、障壁設置の仕様は異なるので、東堀全城ではこのような単純な構造であったとは思えない。東堀も西堀と同様に複雑な底部構造をもつ障子堀で、導排水施設などは未確認であるが、そこに水が張られていたものと思われ、変化に富む障子堀の構築に見る芋川氏の防備に備えた姿勢が並々ならぬものであったことを知るのである。

なお、東堀の主軸方向はN10°Eで西堀のN17°Eと7度程度ずれる。また、柵列SA05、掘立柱建物SB09とともに主軸方向がN10°Eで東堀と共に通するが、これらは後段で述べる。

#### （2）柵列SA05（第8・22・37図、口絵1、PL3）

東堀 SD05の掘り込み線に沿った東側1m前後の肩にある部分にある防御のための柵列である。検出面は第2次整地層（4～2層）である粘性の強い黒色砂質土の下部で黒褐色砂礫層を切って構築されている。黒褐色砂礫層は厚さ10cm幅2mの北側からの流出堆積物で、柵方2の南側で終わる。柵方1・2の断面観察では下層に



第5図 古代の土器 (1:4)

2～4層にわたる砂礫の互層があり、深さ70cmで青灰色砂礫層に達しているので一連の堆積物である。この層は土層図③における青灰色砂質土に相当するものと考えられ、東堀はこの層を切り東側では第1次整地層がその掘部に載る。

柵列SA05は径60cm前後、検出面からの深さ70cmの円形状掘方からなり、掘方1～4のみを確認・検出した。予想される掘方6は調査予定地際のため落ち込みの一部を、掘方5はコンクリート基礎により破壊されていて未確認である。

柵列SA05の4基の掘方は掘方中央に径20cmの黒色粘質土からなる柱痕跡が円形に認められ、下部に柱状の横底部があった。柵はクリ材で底部は平坦に切断されており(57・58)、掘方底部も平坦でそれに見合う。柵間距離は真直で掘方1と2は240cm、掘方2と3は190cm、掘方3と4は170cmとそれぞれ異なる。この柵間の不統一とこれらに見合う掘方は他に未検出であることと東堀肩部に直線的に設置されていること、掘方の共通性など、掘立柱建物の柱掘方でないことは明白で、柵列とした根拠である。

橋掘方2の埋土最下部から越中瀬戸I期の小皿(90)が出土した(PL3-7)。柵を抜いた痕跡が認められないところから、柵設置時に混入したものであり、後段でも詳しく述べるが、柵の設置時期および目的は越中瀬戸I期の年代である16世紀末から17世紀前半代(宮田1988)の中でもより古く、関ヶ原の戦いに備えた芋川氏による館防備のために急速設置された施設で、会津移封後の数年間のことと推定した根拠のひとつである(註4)。

### (3) 挖立柱建物

グリッドL列以東では多数の柱穴などのピットが検出されたが、建物跡と思われる遺構は掘立柱建物SB08・09の2棟のみである。いずれも、第1次整地層(24層)直下で検出された中世末期の建物跡と推定される。

## ①掘立柱建物 SB08（第10・37図、PL 3-5）

2間×2間の東西棟で偏柱建物である。掘方はいずれも黒色粘質土（第2次整地層）黒色土混じり黄褐色砂質土（第1次整地層）下に検出された。4隅に大型の、中間に小型の掘方を据えている。2×2間で主軸方向はE5°Sであり、長辺3.0短辺1.8mである。掘方1・3・7には柱痕跡が認められ掘方1には柱根が残存していた（62）。径13.3cmのクリの丸太を表面のみ削り、木口を斜位に切断している。柱の据え付けにはとくに襻板などは認められず、直接土中に埋め込まれていた。尚、掘方7は廐棄土坑SX43が掘方上部に切り込んでいた。埋土は黄褐色土を含む黒色粘質土である。出土遺物は認められなかった。第1次整地層（24層）はすでに述べたとおり肥前陶磁Ⅱ期（115）Ⅲ期（125）大麻2期（117）連房登窓1期の志野（121）などの陶器を含むので16世紀末の建物跡と思われる。

## ②掘立柱建物 SB09（第10図、PL 3-5）

グリッドM11を中心にある1×2間の南北棟の掘立柱建物である。主軸は柵列SA05と同様にN10°Eで東2mの位置にあり両者は併行関係にある。南北230東西180cmで柱間は等間である。掘方1、掘方2は2ないし3回にわたり切り合いがあるが、それに対応する掘方ははつきりしない。各掘方は円形で4隅は径40cm前後でやや大きく柱痕跡は掘方1掘方2でそれぞれ10cm、掘方4掘方5では15～20cmであり想定する柱は大きくなない。それぞれ第2次整地層（4～2層）とその下部の黒色土を混じえた黄褐色土（24層）の下に検出され、黄褐色砂質土を基盤としている。

SB09は検出状況と柵列SA05と併行関係にあるところから、両者は同一時期であり、SB08がSB09に直交するところから、配置状況からみても、これらを含めて1600年代を前後する時期のものと思われる。

## (4) 井戸 SE02（第13・35図）、P.（掘方）46（第9・22・37図、PL 5-8）

柵列SA05掘方4埋土の調査過程で礫を少量混じえた青灰色砂層を埋土とする円形状の落ち込みを確認する。規模確認のため250×80cmの小トレンチを設定し、その結果径約2mの井戸跡と判断した。第1次整地層下部の青灰色砂礫層（基盤）を切って構築していた。この基盤層はSB09の黒褐色砂礫層に相当するものである。落ち込みは検出面から50cm掘り下げほぼ垂直となる壁面を確認したが一部に崩落が認められ、このため平面形は円形とはならない。埋土からは曲物の小片や板材片（23）が少量出土した。なお、この部分は東堀の落ち込みにあたる部分であり、SE02が僅かではあるが東堀東壁上段と同様に青灰色砂礫層を切り込んでいる。よってSE02は東壁よりは新しいが第1次整地面に覆われていることから、柵列SA05と同時期となる。掘立柱建物と井戸がセットとなると思われるが、柵列外に設けたことは、これら施設が柵列構築用の短期の施設で柵列構築後にはこれらの施設は廐棄されたものであろう。つまり掘立柱建物が小規模な小屋程度であることからも、説明がつくものと思われる。なお、以上が確認できたことにより、SE02は完掘せずに埋め立てて保存することとした。SA05掘方4も同様の方法をとった。またP.（掘方）46が近接してあるが第2赤ソブ層を切っており新しい。埋土内から瀬戸・美濃大窓2期の壇反皿（91）が出土しているがこの場合には遺構の年代を示すことにはならない。掘方中央にクリの柱材（63）があった。

### 第3節 近世～近代の遺構と遺物

#### 1. 磐石建物 SB07 (第15・16図、PL 2)

建物 SB07は南北3間分、東西1間分の磐石のみを SD07の東、東掘埋土最上部に検出されたもので、大部分は抜き取られ、現存する各磐石は径50、厚さ30cmの安山岩平石で、第2次整地層に僅かに掘り留めた掘方内に据えられていた。失われた磐石の配置と据え付け痕跡を注意深く精査したが、砾石等は用いられておらず、掘方そのものも不鮮明で確認できなかった。このほか、柱筋の通らない原位置をはずれた磐石がいくつか認められた。よって磐石建物の復元は発掘調査からは困難である。南北方向の磐石の間隔は2間分が240cm(8尺)、1間分が180cm(6尺)東西方向は180cm(6尺)であり南北方向はN9°Eである。別章でふれるとおり整地層及び磐石建物は弘化4年の善光寺地盤で倒壊した福正寺再建のもので、5×10間の福正寺の南北棟廊裡ということになり、南北2列分の磐石列の一部となる。

#### 2. 溝 SD07 (第17・19～21・29・31～35図、PL 1・4)

調査域西側で東掘埋土上部に検出された。幅1.8～2m、深さは検出面から20～30cm、断面U字状の素掘南北溝である。東掘とはほぼ方向を同じくし、主軸方向はN21°Eである。I08グリッドの西壁の一部に長径50～70cm大の玉石を用いた護岸用の石組が認められた。検出は第1赤ソブ層直下で、12層および10層を切り込み、第2赤ソブ層を底部としている(土層図②・③)。埋土内には多量の玉石を含む砂礫を含む。埋土上部は廃棄土坑31・32によって切られている。

埋土は場所によって異なるが、基本は青黒色砂礫土(11層)であり、I09グリッド北壁の土層図②では上層に黄褐色砂礫土層(11-1)が載る。調査当初この層上部には人頭大からこぶし大の川原石が列状に認められたことから「列石」としたが、その後の検討で砂礫土層の一部であることが判明した。砂礫土は一部に粘質土を含み水成堆積であり、「列石」部分は溝の末期以降か廃絶後に投棄されたものも含むと思われる。

以上から構築時の溝 SD07は護岸用石組で保護された南北溝で、磐石建物 SB07の西2mの位置に構築された一体化的なものが福正寺の廃寺に伴い、溝 SD07となって方向にもズレが生じてきたものと思われる。それは護岸用石組の残存と思われる列石状の痕跡(PL 4-1)が、石組みの延長線上(H10)に僅かではあるが認められるうこと、第2次整地層の広がりがSD07付近まであること、そして石組と残存石組を結ぶ主軸方向がN15°Eで、磐石建物 SB07の主軸N9°Eに近いことなどがあげられる。調査当初、SB07の様群を一括して列石とした点も護岸用石組を想定したことであったが、それは結果的には一部のみであったことになる。かようにSD07は福正寺再建に伴い構築された寺域を区画する溝であったものと思われる。

現在芋川氏主郭と妙福寺境を南流する用水路があり、さらに調査地北西隅で屈折し妙福寺境を東流したのち、参道西側沿いに南流する。この現行の用水路はSD07を祖源としており、流路の変更は土地利用を反映したものである。SD07の位置が現行用水路よりも東に7mほど寄っているが、本来はSD07の延長線上にあったものが、妙福寺の土地区画の変更などに伴い現在位置に付け変えたものであろう。また、SD07は館跡東堀の位置と一致し館の構造が廃絶後の土地利用を大きく規定していたことになる。出土遺物は多様で量も多い。陶器・土器(17-77) 砥石(13) 煙管(13) 鉄製品(19) 糖羽口(1-4) 鉄鋤(5-12) 寛永通宝(1-2) 曲物底(4)などと不明木製品(5・7・8・19-22・26)がある。

陶磁器は整理箱2箱分で今次調査でもっとも出土量が多く、実測可能なものの大半を図示した。

### 3. 溝 SD09・SD13、杭列群 A・B その他の溝・杭列（第14・34～37図、PL 4-2）

杭列は溝 SD07壁際の A 杭列群と SD07の東側 J09から I11にかけて弧状に多く認められた B 杭列群がある。B 杭列群は第2赤ソブ層下部の17～19層内に打ち込まれており、第2整地層や第2赤ソブ層以前の構築物である。杭は残存したものだけで腐食が進行し、痕跡だけのものも認められたが、記録には確実に杭と判断可能なものだけとしたため、腐食により消滅した杭も含めて、構築時の杭の数量は倍増するものと思われる。ただしグルーピング化した杭列群すべてが同一時期に属するものは残存杭の性格上わからない。杭56は明らかに第2赤ソブ層を切っており、一部に時期の異なるものも含まれている可能性はある。

杭列 A は SD07の掘方よりも内側両側に30cm 幅で SD07の掘方底部に沿って検出された（32・42・45・50）。杭は板材やソダなどともに土手を作るものであるが、ここでは杭のみであった。杭の分布状況から SD07に先行する SD09の構築物と思われる。よって SD09の幅は50～70cm となる。SD09は第2赤ソブ層下部に認められるので第2整地層造成前の溝で一時断絶のうちに SD07が第2整地層を切って構築されたものと思われる。

杭列 B は西列（37・39・41・49）東列（36・43・47・59・61・64）からなり、南側では太杭（59・61・64）を使用している。後者は先端を平坦に調整しているので柱材を転用したものと思われる。なお南側では杭列 A の東列と B の西列とが接するため杭40・53と杭31の所属は不明である。

溝 SD13の幅は上端で150cm 前後となる。調査過程でも礫層が認められ溝の存在を確認したが、礫層が部分的で平面からの追究はできなかった。よって人工物と云うよりも善光寺地蔵の崩落土に残された流路跡と思われ、杭列 B は最大傾斜線に伴うところから、崩落土保護などに構築されたとも思われるが実体はよく分からない。溝内からは長床莖（1）や銀先（2）をはじめ木片などの植物質遺物が多く認められた。なお杭はクリ・カラマツ・マツ・コナラなどの丸木を使用している。

その他の杭例は N09に集中して認められたが遺存が悪く配列などは復元できなかった。また L09から N09にかけて幅30cm 前後で深さ10cm の小規模な東西溝 SD10・11が認められた。杭穴・溝堀土は砂層で第2次整地面を切り込み、これらは第2次整地層形成以降の遺構である。

### 4. 廃棄土坑（集石）（第18・20～22・27～32図、PL 5、表2）

こぶし大から人頭大の円礫を土坑内に投げ入れた廃棄土坑は、規模と構造上の相違から廃棄土坑 A・B・C の3種がある。A は深さ40～70cm の土坑内に川原石などが投げ込まれた状態で検出されたもので、平面形は径70cm 前後の円形である。B は径が40cm 前後と A よりも規模が小さく、土坑も浅いものであり、平面形は円形が多い。C は規模が B と同程度であるが、土坑は浅いか不明瞭であり、集石のみで見るならば列状の配石遺構と見られるものも含む。中には廃棄土坑以外の目的で石が集められたものもあるが、その目的が不明である所からこれらを一括して C とした。集石はある目的を意図してつくられた構築物であり、土坑内に投げ入れられ、結果として石の集まりとして見られる廃棄土坑とは本来別のものである。よって現象面を重視して性格が把握できる A・B と一部の C については、廃棄土坑とし、それら以外を集石（配石）とすべきであろうが、近世以降の集石の意義付けは恐らく多様で不明部分が多いため廃棄土坑の中に含め、必要に応じて「集石」を併用した。ただし礫石の据え付け用の集石（栗石）は認められなかった。

廃棄土坑 A は溝 SD07周辺に多く SX18・20・31・32・34がある。SX18は第3層（第1赤ソブ）を切った状態で検出された。深さ23cm ほど掘り窓めた土坑内に多数の円礫と陶磁器類（80～84）瓦（8・10・15・16）筒形

鉄器（25）引手金具（26）銅線状製品・銅製コイル（バネか）磨石（8）砥石（10）石硯（15）など多様な遺物が出土した。陶磁器は肥前陶磁V期の皿（80）地方窯と思われる近・現代の碗（81）19世紀以降の地方窯擂鉢（82）や茶瓶（83）瀬戸窯と思われる鉄釉乗器（84）がある。以上からSX18はいわゆるゴミ捨て穴（廃棄土坑）の典型で跡は遺物群とともに埋め立てられたことを示している。遺構の検出と出土遺物から、公民館建設時に構築されたもので、現代の廃棄土坑である。

溝SD07を切って構築された廃棄土坑SX31・32も同様である。SX32からは焼烙（62）など、SX31からは五輪塔（28）などが出土しているが、整地にともない跡とともに埋め立てたものと思われる。

廃棄土坑BにはSX13・14・16・19・22・25・27・28・33・40～42がある。いずれも第3層（第1赤ソブ）直下で第2次整地層を切って構築されており水田造成前に作られたことになる。SX16からは内耳（85）擂鉢（86）、SX22からは砥石（11）、SX28からは寛永通宝2点（4・5）、SX29からは擂鉢（78）と肥前陶磁（IV期）、SX40からは銅製品（3）が出土している。福正寺移転後の水田造成に先立って不要物を埋め立てたものであろう。出

表2 廃棄土坑（集石）一覧表

遺構名	グリッド	平面形	型式	法量(cm)			主な出土遺物 ( )は図番号	備考
				長軸	短軸	深さ		
SX13	J10	円	B	50.0	40.0			
SX14	J09	円	B	40.0	35.0			
SX15	J09-K09	不整	C	70.0	40.0			
SX16	I12	椿円	B	35.0	25.0		内耳(85)擂鉢(86)	
SX17	I11	列状	C	60.0				
SX18	I11-12	円	A	90.0	90.0	23.0	肥前皿(80)碗(81)地方擂鉢(82)常滑茶瓶(83)瀬戸・美濃業鍋(84)軒丸瓦(8-10)瓦製品(15-16)筒形鉄器(26)引手金具(26)銅製品(コイル・銅線)磨石(8)砥石(10)石硯(15)石盤(21)	
SX19	J12	円	B	50.0	30.0			
SX20	J08	円	A	60.0	60.0			
SX21	M10	不整		42.0	30.0	30.0		
SX22	M12		B	30.0	20.0		砥石(11)	
SX23	K-L12	円	C	65.0	50.0	13.0	寛永通宝2(3)	
SX24	L12-13	椿円	C	85.0	64.0	10.0	印石(2)	火床上
SX25	K10	円	B	40.0	35.0	30.0		
SX26	N12	不整円	C	75.0	60.0			
SX27	L10	不整円	B	50.0	45.0			
SX28	K12	不整円	B	40.0	30.0	17.0	寛永通宝2(4-5)	
SX29	L12	円	C	30.0	25.0		肥前擂鉢(78)	
SX30								SX13ダブリ
SX31	H08	円	A	70.0	70.0		肥前鉢((52)空風輪(28))	
SX32	H10	円	A	70.0	70.0	25.0	土瓶(44)内耳(62)瓦(6-11-12-13-14)	
SX33	H08	円	B	35.0	30.0	7.0		
SX34	H10	不整椿円	A	70.0	50.0		瀬戸・美濃業口(87)	
SX35	O10	不整長方		80.0	40.0			
SX36	J11	列状	C	45.0	40.0		中國天目(15-16c)(89)	一部未調査 J11 17-19層 と接合
SX37	J11		C	45.0	40.0			
SX38	K11		C	114.0	70.0			
SX39	N11			47.0	40.0			P7に伴う
SX40	N10-11		B	40.0	36.0		銅製品(3)	P8
SX41	N10-11		B	50.0	50.0			P9
SX42	K12		B					
SX43	M10							
SX44	N09						砥石(12)	
SX45	N09							

土品の年代にもこの点で矛盾がない。

廐棄土坑 C（集石）はSX15・17・23・24・26・29・36～38がある。掘り込みがほとんど認められない所から廐棄目的で石を集めただけか、浅く掘り留めた穴に石を置いたものと思われる。しかし、SX23・24は相接した遺構で60～100×30cmの範囲に小石を集めたものであり、意図を持って石を配置したものであろう。集石または配石遺構とするべきもので土坑はまったく認められない。人頭大の礫を列状に配石したSX36・37・38もSX24と同様に土坑は認められずに集石（配石遺構）とすべきものと思われる。同様にL12-13とその周辺に用途不明のSX23・24・28・29・42が第2次整地土に検出された。SX24下部には焼土が認められた。礫には特に火熱を受けた痕跡は認められない。

廐棄土坑 C（集石）からの出土遺物にはSX24から叩石（2）、SX36から中国天目（89）がある。15～16世紀代のもので輸入陶磁としては当時にあっては貴重品と思われるが、これはI09グリッド、J11グリッドの第2赤ソブ層下部出土品と接合関係にある。上層遺構であるSX36の天目片は、何らかの事情で地表に出現し、再度不要物として円砾群とともに集められ、埋め立てられたものである。天目片はこの場合にSX36の年代を示す資料ではなく、接合関係を通してSX36の集石の構成過程を示す資料になるものと思われる。

廐棄土坑はこの地域の歴史の中でごくごく最近の人々の廐棄行為と土地利用の一端を示すものである。しかし、これらをこの地域の土地利用の歴史と発掘調査の成果から総合的に判断するならば、その廐棄行為が明治43年（1910）以降の水田造成（一部は「三水村駄」に云う広場化）と昭和29年（1954）の芋川公民館建設の造成工事に伴って生じた不要物をごく小型の穴を掘って埋め立てた行為を示すものと思われる。それはSD07内への不要物の投げ込みも同様である。今日の機械化された造成工事とは異なる小規模な人力による労働、おそらく共同作業を思い浮かぶのである。

註1 陶磁器全體については市川隆之氏の教示によるが、越中瀬戸については田中勝徳氏からも教示を受けた。なお、市川氏は肥前陶器を唐津、磁器を伊万里と使い分けをしているが、本稿では九州近世陶磁学会（2000）により肥前陶磁として一括して呼称している。瀬戸・美濃大窯と遠房登臨（鹿澤2007）及び肥前陶磁（大槻2000）の欄年に示される年代は下記のとおりである。

大麻第1段階1480～1530 第2段階1530～1560 第3段階1560～1590 第4段階1590～1610

登臨第1段階（17世紀初葉～17世紀中葉） 第2段階（17世紀後葉～18世紀初葉） 第3段階（18世紀後葉～19世紀中葉）

肥前陶磁（II期（ ））は磁器の場合

I期1580～1610 II期1600（1610）～1650 III期1650～1690 IV期1690～1780 V期1780～1860

また瀬戸・美濃窯に係る基本的文献は藤澤（1986）以外では田口（1983）井上（1992）

肥前陶磁では大橋（1989・2000・2004）、九州近世陶磁学会（2002）を参考とした。

註2 「寺院明細帳」には福正寺は「弘化四年震災ニ罹り」とあり、倒壊したという記載はない。「真宗東派更正寺院明細帳」や「愛野県町村誌」には地震の語すらない。いずれの史料も福正寺からの報告を元に記載されたもので、必要度から使い分けされていたものと思われる。

註3 善光寺地盤については従来はマグニチュード7.4、震源地は長野市浅川清水付近、最大震度7とされていた。中央防災会災害教訓の継承に関する専門調査会報告書（2007）『1847善光寺地震報告書』によれば「マグニチュード7.3震央野尻湖東岸付近約10km、震源域震央から断層の破壊が始まり、北北東および東西の2方向へ伝播、延長約50km 幅約15km。最大震度7」とあり、飯綱町全域が震源域に含まれていたことになる。

なお飯綱町域被害統計は小山丈夫氏によれば震3のとおりである。

註4 越中瀬戸の操業開始は文献上の研究によると、天正19年（1591）と文禄2年（1593）説があり、16世紀末とされてきた。

これに対して廐跡資料をもとに考古学的検討をおこなった宮田進一氏は天正初年～13年間の天正年間説（1573～1585年）を

唱えた。氏は瀬戸の工人の移動（『瀬戸山難歎』）により操業が開始されるが越中瀬戸の初期の資料には野志船が認められないこと輪トテンによる内ハケ皿の重ね焼き挽成によるところから、井上喜久男（井上1988）、藤沢良祐（藤沢1986）両説をもとに示されたもの（宮田1988）である。よって、SA05出土の越中瀬戸丸皿は宮田氏の分類に云う丸皿2類となり、操業開始期に近い年代の付与が可能となった。しかし、それが開窯期の黒川窯の製品とするには今後の検討が必要である。

表3 善光寺地図における飯綱町域の被害一覧

村名	家数	人數	戸数	半 横 漢文	横 土蔵	半横 土蔵	横 物置	半横 物置	横 倉社	半横 倉社	横 蔵庫	馬鹿	倒伏	死馬	死牛	領主名	損耗史 料
芦沢村	15	43	2	7								2	5			幕府(中野代官)	①
野村上村	59	197	55	5								1	10	23	6	幕府(中野代官)	①
高麗山新田村	8	38	6	2								2	4	2		幕府(中野代官)	①
猪之山村	47	208	32	8	2	3	36	7	3			2	2	8		幕府(中野代官)	①
猪之山村	13	49	13	6								1	9	1		幕府(中野代官)	①
夏川村	27	116	11	10						1		2	3			幕府(中野代官)	①
地蔵久保村	21	71	14	7		4	12			2		2	8	2		幕府(中野代官)	①
横手村	18	91	10	4	2							0	4			幕府(中野代官)	①
北川村	23	84	10	8								4	8	1		幕府(中野代官)	①
高麗村	62	253	56	4							2		2	18	2	幕府(中野代官)	①
牛井村	180	826	182	2	23		22	8			88	87	15	2	幕府(中野代官)	①	
牛井新田村(山代代)	16	69	16									4				幕府(中野代官)	①④
小林村	81	327	81					1		1	10	21	8			幕府(中野代官)	①
黒川村(東組)	91	363	80	5			8	5			24	10	2		幕府(中之条代官)	②	
黒川村(西組)	55	241	*								25	9			幕府(中之条代官)	②	
牛宿村(森村ともに)	37	154	32								1				幕府(中之条代官)	①	
新井村	*	*	*								9				幕府(中之条代官)	①	
平出村(新田村ともに)	96	*	18	8							7				坂山藩	④	
福井新田村	22	*	22					1			2				坂山藩	④	
持代村(寺沢新田組)	*	*	5	13							*				坂山藩	④	
持代村(呉沢組)	*	*	4								*				坂山藩	④	
東柏原村	*	*	*								*				坂山藩	④	
猿渡本村	*	*	*								*				坂山藩	④	
春光寺村(寺坂組)	70	*	37								10				坂山藩	④	
春光寺村(舟久保組)	65	*	53								31				坂山藩	④	
伊豆村	250	*	125								90				坂山藩	④	
上赤塙村	80	*	20								5				坂山藩	④	
下赤塙村	40	*	10								10				坂山藩	④	
鬼野村	57	*	20								10				坂山藩	④	
金井村	176	*	125								36				坂山藩	④	
芦谷村(黒川組)	20	*	17								5				坂山藩	④	
合計(割明分のみ)	1638	3136	1056	89	27	7	78	7	21	2	2	394	211	47	2		

\*印は史料に記載のないもの、わからぬもの。

#### 損耗史料

①「高野式左衛門日記」 中野代官所作成の被災統計を同年10月に中野郡中代から傳覽した奉札村高野式左衛門が筆致したものという。

②「黒川村諸家死人帳我人暮上税」 神谷家文書の内、黒川村東組名主神谷佐左衛門がまとめた中之条代官所への報告集録。

③「黒川村越即死人帳書(便用)」 西黒川区有文書の内、黒川村西組から中之条代官所への被災死者の状況報告。

④「高家敷漁家諸家死人帳我人暮上税」 神谷家文書の内、中之条代官所の令で黒川村の周囲2里の漁業・死者被災統計を伝聞し報告したもの。

## 第4章 成果と課題

### 第1節 芋川氏館跡東堀と館の構造

#### 1. 主郭の規模（第6図）

東堀の発掘調査によって、明らかとなった点は、ひとつは東堀の位置の確定によって館跡の規模がほぼ判明したことである。西堀の発掘調査と現在の地形や地割によって南・北堀の位置は推定できていたが東堀の位置についてはいまひとつ明らかにされていなかった。しかし、今次調査によって東堀の主軸方向が西堀のN17°Eと異なりN10°Eで東西の堀が僅かながらではあるが併行せず<sup>9</sup>、東堀と南・北堀の接点では3mほど内側にくいくこむ。ただし東堀の方位は実質調査域が6mと全体の10分の1の範囲の判断であり、また西堀の土壘との接線（西堀の東側掘り込み線）は未調査で推定によるもので不確定要素はあるが、この差は堀または土壘幅の中で吸収されるとすれば、東西の堀の間隔となる主郭の東西径は土壘を含めてほぼ60mとなる。つまり芋川氏館跡の主郭は8m幅の堀で囲まれた一辺60mの方形区画となる。かつて主郭の東西間の距離を50mとし60×50mの長方形区画とした（笹澤・森・池田2003）が、本稿で一辺60mの方形区画とする。

#### 2. 障子堀

防衛を目的とし、堀底にさまざまな土坑（障壁土坑）を設置した障子堀は西堀のみならず、東堀にもあることが、今次調査で判明した。すでに前回調査でも西堀の南・北堀とのコーナーの在り方から、南・北堀も障子堀である可能性を指摘した（笹澤・森・池田2003）。よって主郭は変化に富ませた障壁土坑からなる障子堀で4辺が囲まれていたことになる。そこには防衛を最優先とした芋川氏の意図を知りうる。

#### 3. 棚列設置と芋川氏の会津移住

棚列 SA05はクリの丸太材を東堀 SD05外縁肩にそって設置したものであり設置時に混入した越中瀬戸Ⅰ期の小皿の出土によって、設置時期の上限が知りうる。そこで、この陶器の年代が問題となる。越中瀬戸は瀬戸の工人が越中で16世紀末までには開窯し、17世紀前半に生産した陶器でⅠ期はまさにその開窯期のものとなり（宮田1988）、SA05の年代比定の根拠である。据立柱建物 SB08・SB09と井戸跡 SE02はすでに検討したとおり配置などからSA05と係わって構築されたものである。つまり、棚列と2棟の建物は同時期に建てられた可能性が強い。よってSA05と2棟の建物の年代は出土陶器から判断すれば16世紀末から17世紀前半代の遺構ということになる。しかし、福正寺は寺伝によれば寛永14年（1637）に建立されるのでそれよりも早い時期に棚列及び据立柱建物2棟は建てられていたことになる。

次に棚列設置時期についていま少し年代を絞り込む。創建福正寺の敷地面積は別章で検討したとおり再建福正寺の敷地面積153坪とほぼ同じであるので、その中央にある棚列や据立柱建物と寺院が同時に共存することはあり得ず、棚列と据立柱建物2棟は創建福正寺の建立前の構造物となる。このことは発掘調査の検出状況から見た所見とも矛盾するものではない。もっと平たく云うならば、棚列や据立柱建物と寺院との同時存在は考えられないものである。

慶長3年（1598）、豊臣秀吉により上杉景勝は会津移封を命じられると、芋川親正は百姓を除く配下の一族・

小者に至るまで景勝に従い、芦川氏館跡は廃館となったとされる（小林・矢野ほか1980）。ところが、すでに見たとおり、横列構築の目的と設置時期から、背後に秀吉死後の上杉景勝の徳川家康に対する戦略上の政治姿勢を伺い得る。会津移封に際して秀吉の命は百姓以外はすべて旧地を離れるというものであった（『信濃史料』18巻）が、それがどこまで守られたのかは分からぬ。しかし、堀の外側に新たに横列を設けて館の防衛を固めることは、関ヶ原の戦いを想定したことと思われる。恐らく、会津移封以降、家康との対立が緊しさを増す中で、急進芦川氏配下の人物を派遣して柵を設置したか、親正と結び付きの強かった妙福寺が関与したものと思われる。親正自身は、家康軍の上杉征伐に対応すべく白河小峰城（現 白河市）の城主として、城の普請に忙殺されていた（小林・矢野ほか1980）。慶長3年（1598）3月秀吉の死後、家康は「会津の上杉景勝が旧領の越後・北信に、多年つながりのある残留土豪・地侍層と呼応して侵入する可能性」があったから、家康方の森忠政を海津城主としている（古川1987）。史料的裏付けが十分でないが、発掘調査の成果から考えられることと思われる。よって、横列の設置は芦川氏の会津移住以降で関ヶ原の戦い直前の慶長3年（1598）1月から慶長5年（1600）7月の間となる。



挿入写真3 調査地・妙福寺全景

## 第2節 福正寺の創建と再建

### 1. 福正寺の記録と礎石建物跡

福正寺は寛永6年（1629）あるいは寛永14年（1637）に妙福寺塔頭として建立され、弘化4年（1847）に善光寺地盤で倒壊、その後庫裡のみが再建され、そこへ芋井学校が併設・淨土真宗東本願寺として独立、明治43年（1910）石川県鶴来町（白山市）に移転、堂宇取り去られる。これが福正寺に關係した記録の大略である。福正寺に係わる記録は明治12年（1879）の「寺院明細帳」「真宗東派暨正寺院明細帳」（ともに『県庁文書』）明治13年頃の『長野県町村誌』（長野県1936）であり、創建福正寺に係わる同時代史料はない。よって福正寺の建立年は前述史料の記載にある同寺の「伝承」によるものである。

発掘調査では1棟の礎石建物跡SB07と2層にわたる整地層（第1・第2次）などと関係する溝SD07などと、陶磁器など多量の遺物が出土した。以下これらを用いて、福正寺の建物配置などについて記述する。

### 2. 福正寺の境内と礎石建物の復元（第6・15図、挿入写真2・3）

『長野県町村誌』には福正寺の境内（敷地）は「東西十間南北十五間三尺面積五畝三歩」で面積数は「寺院明細帳」の「百五拾五坪」とほぼ同数である。まず敷地の東西方向について検討してみる。公会堂建設予定地は581.6坪で前記2史料の記載面積より65坪ほど多い。これは旧公民館建設時に新たに用地取得されたからであろう。それがどの部分になるか推測の域を出ないが、芋川氏館跡地と思われる。現在調査地（建設地）と館跡との境界は土手となっているが、これは用地取得に伴ない主郭側が削平された痕跡と思われる。この土手はかつて東堀の痕跡として見誤ったものである。しかし、東堀が今回の調査でSD07の下部にあることが判明し、東堀が埋没した後も用地境としての役割を持っており、その痕跡として溝SD07が福正寺の区画溝（用水路）として残されていたものと思われる。今日、地境の用水路は館跡と妙福寺境を南北に流れ、調査地と妙福寺境を東西に、さらに妙福寺参道に沿って南下しているが、かつては妙福寺の新旧墓地間にあり、さらに調査地の南側では調査地と私有地との境地に一致するところから溝SD07は本来は妙福寺新旧墓地間から私有地に直線的につながっていたものであり、それぞれの方向（N9°E）が一致する。よってSD07は用水路として新旧墓地間から調査地南側の用地境に沿って流れていたものであろう。つまり面積差65坪はSD07の西側面積に近い。尚、新墓地は1970年代には妙福寺所有の水田を造成したものである（中殿秀清氏教示）。東堀の西側のトレンチ調査ではSD07より館跡寄りには認められず、この部分は館の土壘跡にあわせた安定した土層であり、SD07以東の上層に認められる礎を含んだ堆積層は全く認められなかった。福正寺時代の代表的遺物である肥前陶磁器はグリットF列以西では皆無である。以上から福正寺の敷地はSD07を西限とするのであり、この部分から参道までの距離が約20mで『長野県町村誌』に云う「東西十間」に相当するものである。

次に「南北十五間」について検討する。現在の敷地は妙福寺境から町道まで26m前後である。ただし私有地境の石積から町道にかけては私有地であるので、敷地は逆「L」字形となる。この私有地は建設予定地あるいは「寺院明細帳」記載の面積から除外して計算できるので、少なくとも再建福正寺の段階では敷地外となる。よって、この私有地を差し引いた部分が敷地面積となる。尚、この道路沿い部分は入口部分として削平され、トレンチ3でも整地層は確認されていないが整地されていなかったとは云えない。以上から復元できる敷地は東堀の西肩（構築時のSD07）以西と私有地部分を除くことになる。

次に考慮に入れなければならない点は福正寺は妙福寺を本寺とする臨寺（塔頭）であることで、妙福寺の中殿秀靖氏によれば臨寺は通常妙福寺参道側に入口部を設けるということである。つまり参道側から福正寺に入るということである。2点目は「寺院明細帳」にある福正寺は本堂ではなく間口十間奥行五間の庫裡のみからなる寺院であることである。記録が正しいとするならば、 $5 \times 10$ 間の南北または東西方向の建物となる。さらに創建福正寺の存在と、のちの芋井学校併設も考慮に入れて、礎石建物を以下に復元する。ただし、庫裡を南北棟か東西棟とするかで結論が全く異なる。今後は同じ地域内に移設されたと伝える民家もあり、これらも含めて周辺部の寺院建築などを考慮に入れた詳細な検討が必要であるが、一応の結論を導いておく。

南北棟とした場合には礎石列1～4を側柱とする建物で、東西方向と南北方向ともには敷地内に収まる。

次に東西棟についてみる。この最大の難点は東西方向が敷地ぎりぎりに設置されることになる。礎石も建物内的一部となる。ただし妻が5間であるから柱間8尺（礎石1～3の2間と北側1間分）の3間分を身舎とし、その左右に6尺の廊（礎石3と4など）が付く切妻造りなどの建物として復元が可能である。芋井学校を併設した場合に南側は広場としての使用も可能である。逆に南北棟とした場合にこれらの点について別に面答を用意しなければならないが、総じて東西棟とするよりは合理的と思われる。

次に「真宗東派慶正寺院明細帳」記載の福正寺についてみる。ここでは「本堂」と「庫裡（裏）」を分離し、それぞれ30坪、45坪ある。この数字は「寺院明細帳」記載の福正寺庫裡 $5 \times 10$ 間を参考とすれば「本堂」は $5 \times 6$ 間で30坪、「庫裡」は $5 \times 9$ 間で45坪となり、一体の建物としても東西・南北いずれでも敷地内に収まらなくなる。恐らくこの記載は福正寺が独立寺院としての体裁を保持するための数字と思われ、誇大されたものであろう。むしろ「寺院明細帳」の $5 \times 10$ 間が実体を示したものと思われる。

建築史の土本俊和氏の教示によれば福正寺のように南北道路（参道）の東に門を設ける例は長野市善光寺の宿坊に見られ、北方向に本堂を南に庫裡を設置していると云う。これを参考とすれば、創建福正寺の伽藍配置もこれに該当するかも知れない。善光寺の宿坊は善光寺脇の宿泊施設で、善光寺門前の参道及び南北道に面した39の宿坊からなる（註1）。明治24年（1891）の大火で大半は消失し、その後、建物配置などの基本は宝永4年（1709）に成立していた（浅野2009）ものを踏襲して再建された（土本ほか2009）。よって善光寺宿坊と福正寺は臨寺という点と江戸時代の小寺院という点で、共通性がある。よって、福正寺を復元するにあたり善光寺宿坊を参考することは許されるであろう。建物配置は江戸時代の寺院では參詣者の便を配慮して決定される（石田1975）からである。ちなみに妙福寺は南門の延長上に本堂が門の北東方向に庫裡がある（第6図）。

つまり、創建福正寺は本堂を妙福寺側に南側に庫裡があった可能性が強い。だとするならば、再建福正寺の庫裡も倒壊前の状態を踏襲して、応急処理的に庫裡のみ再建されたものと思われる。再建福正寺の庫裡が本堂を含む南北棟とする模様のひとつでもある。

(註1) 善光寺宿坊の建物配置の基本は参道または南北道路に構えた門の位置によって規定されている。東門では南に庫裡、北に本堂（小御堂）が、西門では東に本堂、西に庫裡が置かれる。いずれも門と玄関を空間（庭）を介して庫裡と結び、空間の上方（北側）に本堂を置き、3者が一直線上に配置される例はごく僅かである。門と庫裡・本堂を庭に面して置く建物配置は參詣者を意識したものであるとともに、東門建物では南北・西門建物では東西方向に長い長方形敷地という狭い敷地面積を効率的に活用するためのものであろう。

### 第3節 出土遺物の検討

#### 1. 陶磁器と土器（第19～26図、図版3・4・5-1、PL6-1、表5）

##### (1) 分析の前提

中世以降近代に至る陶磁器や土器などいわゆる「やきもの」には中国産の輸入陶磁器、瀬戸・美濃や肥前などの広域流通の陶磁器と地元の窯などで焼かれた地方窯の製品がある。調査地が中世後半の芋川氏館とその後の寺院の建立、学校の併設など多様な土地利用と普光寺地盤の被災を受けており、出土した「やきもの」もさまざまである。特に幕末から焼かれた当町の赤塙焼（唐木田1974・安藤ほか1977）など地方の製品は食生活のみならず、さまざまな生活用具に影響があったはずであるが、具体的には不明部分が多い。本稿では広域流通品として全国的視野の中で検討が可能な肥前陶磁など以外の地方で焼かれたやきものを一括して「地方窯」の製品としてまとめている。今後の検討の資料となるからである。

今回出土したやきものは、(1) 芋川氏館に関係する15世紀代末頃から16世紀初頭、(2) 前期（創建）福正寺期、(3) 再建福正寺以降のものとなる。(2)についてはさらに創建期・前期福生寺期に分けるが、前期福正寺に直接係わる遺構は整地層の一部を除いて未確認である。それは普光寺地盤による寺院の倒壊や大部分の整地層の滅失、再建時における新たな整地層の造成作業と密接に関係する。この点をより出土量の多い肥前陶磁で見るならば、芋川期に係わる東堀の下部埋土（19層以下）、第1次整地層（24層）と柵列SA05と掘立柱建物に關係した土層以外は新・旧が混在した状態で出土している。つまり土層の頂で検討したとおり、調査地の土層は普光寺地盤の影響を抜きにしては語れない。加えて、東堀や溝SD07などの埋土の形成には多量の砂礫を混入するなど竪尾川や用水路の氾濫が深く係わり、短期間に堆積したものが多く、出土遺物もそうした過程で取り込まれたものである。陶磁器片に磨耗が認められないところから、東堀の周辺部から取り込まれたものである。整地層出土の遺物も、整地作業に伴ない、SD07や廐棄土坑（集石）の出土遺物の多くは廐棄に伴なうもので、鐵滓や瓦などとともに、外部から持ち込み投棄されたものも含むが、大半は土地利用の際に生じたと考えられるものである。つまり、出土した陶磁器や土器類は原則として当該において使用されていたと思われるものであり、こうした前提に立って時代別に整理した各遺構ごとのやきものの特徴を以下に見い出します。こうした作業は多様な土地利用の歴史を経験した本遺跡だからこそ可能であるとともに、少なくとも芋川という土地の地域史復元の出発点となり得るからである。

##### (2) 遺構ごとの陶磁器と土器

芋川期の陶磁器と土器 芋川氏館の存続期間は15世紀末に始まり、1598年の上杉景勝の会津移封に同伴した芋川氏の移住による廐館までとしていた（笠澤・森・池田2003）が今回、柵列SA05の検出によって、関ヶ原の戦い（1600年）までは後述のとおりそこに妙福寺が関与した館としてあらたな機能が生まれ、かつ掘の外縁にそって柵列SA05を設置するなど、完全移住でなかったことが判明した。よって、関ヶ原の戦いまでを芋川期として、この時期の陶磁器にふれる。

芋川期の遺構は芋川氏館跡の障子掘である東堀SD05、柵列SA05と2棟の掘立柱建物がある。陶磁器・土器類はSA05柵方2埋土出土の越中瀬戸I期の小皿（90）、東堀埋土と下層（20～23層）からの出土品がある。下層（20～23層）からは15世紀後半から16世紀前半の中国龍泉窯の青磁碗（215）と土師器皿（カワラケ）（217～220・222・223）がある。下層には肥前陶磁器は全く含まず、その様相は中国陶磁器、古瀬戸や大窯期前半の

陶器と株洲に在地の土師器からなり、西堀（笠澤・森・池田2003）と共にまさに芋川氏館時代の遺物である。この点を東堀廬土とSA05のあり方から検討する。横列SA05は別に述べたとおり芋川義正が上杉景勝の命を受け、関ヶ原の戦いにそなえて、1598年正月の芋川氏の会津移住から、1600年7月の関ヶ原の戦いの間に構築されたものである。この想定に誤りがなければ、越中瀬戸Ⅰ期の定点を示すことになるとともに、開発してさして時間を置くことなく、この地にもたらされていたことを意味する。一般に善光寺平へⅠ期の越中瀬戸が撤入される時期は17世紀前半と云われるが、かならずしもそうでないことを示すものである。越中瀬戸の広域流通を検討する上でも重視されるべきものと思われる。

東堀下層（20~23層）の陶磁器や土器を芋川時代とした根拠はひとつには肥前陶器（唐津）を全く含まず、西堀と同様の中世的組成であることに加えて、すでに土層の項で述べたその在り方にある。20層の有機物層は堀が機能していた冠水状態で堆積したもので、その時期は17世紀代には下らないでの横設置までとなる。堀の経済性は常時行なわれていたと思われるが、芋川時代末期には滲り、底部から1mの不要土が堆積していたことになる。これは西堀には認められなかったので、東堀だけのことであろう。だからこそ、東堀には堀が設置されることになったとも思われる。かように考えれば、下層出土の陶磁器や土器類は16世紀代の時間帯の中に収まることになる。

関ヶ原の戦い前後の芋川氏館完全廃館後から1637年の福正寺創建間の約37年間のやきものの類は東堀SD05中間層（19層）出土資料がある。この層は廃館後から福正寺創建に係わる第1次整地層造成までの堆積層であるからである。

19層からは肥前陶磁I~2期（206）、II期の小皿（199・200・205・207）青磁香炉（185）、III・IV期の小碗（197）大麻2期の天目（210）、株洲IVないしV期の臺（壺）（126・224）と、内耳縁（225~227）がある。19層の肥前陶磁III・IV期の小碗は17層からの混入と思われるがこれ以外は肥前陶磁II期で占められ、これに登窯第1段階の志野丸皿が加わるので中間層の形成は寺伝に云う福正寺建立の1637年より前で横列SA05設置後の時間帯に収まる。何故ならば中間層にはこの福正寺の第1次整地層の残存と思われる相当層（14~2層）とともに上位の17~18層とともに切られ上部に載ると思われるからである（第4図）。

この東堀中間層出土の陶磁器や土器は在地土器編年の定点を示すものであるが、問題はこれらに伴なう遺構が不明であり、使用者が特定できないことである。この点は後段でも述べるが、恐らく芋川氏館と妙福寺との関係から、横列設置以降も芋川氏館の跡地の管理は妙福寺が関与していたことを示すものとすれば、単純に妙福寺でこれら陶磁器類を使用したものとしても特に問題はない。

なお、19層出土の内耳縁は西堀下層出土のそれよりも背が低く、17世紀代の基準資料となりうるものである。

福正寺創建時の陶磁器と土器 1637年の福正寺創建時の陶磁器は第1次整地層（24層・14~2層）がある。東堀の東辺部にあり、第2次整地層の下部にあり、堀立柱建物の廬土上部にある黒色土をまじえた黄褐色砂質土で粘性が強い。横列SA05との関係は別稿で検討のとおり、SD05が古い。第1次整地土からは肥前陶磁I期の見込みに胎土目痕跡のある小皿（116）をはじめ、I~2期（114）、II期（115・123）、III期（125）、瀬戸・美濃大窯第2段階（117）、登窯第1段階の志野丸皿（121）がある。125は手塙皿で年代がやや新しいが他は福正寺の創建時代に年代は合致しており、逆に寺伝に云う福正寺の創立年が正しいことを示している。116は砂目積みの溝縁皿（123・199）（口絵3）とともに、窯詰め法の変遷を知る指標となるものである（大橋1989・2004）。尚、胎土目積みの小皿は善光寺平では初見例であろう。砂目積みの皿は松代城下町跡でも見出されており（西本2005）、肥前陶磁の善光寺平への波及が、17世紀前葉の段階で盛んとなることを示すが、I期陶器の出土はそれよりも古く15世紀末頃まで遡ることになる。しかも、興味深い点はそれらの使用者が福正寺建立にも係わっていることで

ある。いわゆる唐津焼を受け入れ側がひとつの遺跡で時間差はあるにしても異なっていることは興味深い。肥前陶磁は太平洋側よりも日本海側に広く分布する所から、Ⅰ期から北海道まで広く船運で搬出されたと云われ（大橋1992）、上越地方にもⅠ期の資料は上越市至徳寺遺跡（鶴巻2003）に認められる。直江の津（上越市）に陸上げされた肥前陶器（唐津焼）はその後は北陸街道など陸路持ち込まれたものであろうが、そうした広域流通の在り方を検討する資料となり得るものである。

前期福正寺期（1637年～1847年）の陶磁器と土器 この時期に相当する陶磁器などは東堀埋土12・14・15・17・18層があり、第2次整地層（4層・4～2層）にも取り込まれてはいるが後者は次項で取り扱う。前者は1847年の善光寺地震で崩落した堆積物で、再建に伴ない造成された第2次整地層が上位に載る。この整地土の造成時期は不明であるが、地震後に第2赤ソブ層を含む堆積層（12・14層）が形成されている点と被災後の混亂を考慮すれば造成まで若干の時間が経過したものと思われる。被災後の堆積層のうち12層（154・159・171・182・183・198）、14層（110・112・118・174～181）、15層（188～191）、17層（202～204・211～214・216）の陶磁器と土器類は肥前陶磁器Ⅰ期（110・112など）Ⅰ期ないしⅡ期（188・202～204）Ⅲ期（198など）Ⅳ期（177など）Ⅴ期（175など）の全期にわたり、Ⅶ期（1780～1860年）がもっとも多い。このほか中国華南の白磁皿（216）、京焼の徳利（122）、地方窯の片口鉢（154）、小匣（徳利？159）や土器類の燈籠（170）などがある。つまり前期福正寺時代の使用陶磁器は肥前陶磁器、とくに伊万里焼と呼ばれる染付器や窯地の量産化に伴ない多量に生産された陶胎碗が主体であるが、18世紀末頃からは各地で開窯した地方窯の製品が一部器種に含まれるようになり、京焼の徳利なども含むなど多様なやきものを保持するようになったことが伺える。

再建福正寺期の陶磁器と土器 これらは第2次整地層（4層・4～2層）にある。このほか、SD07出土の大半も含まれるが、前期福正寺時代のものも含まれるので、個々に検証が必要である。

第2次整地層の4層からは肥前陶磁Ⅱ期からⅤ期が主体である。陶胎碗（135）など碗が多いが染付の大皿（194）、緑釉（196）や二彩手（192）の鉢、青磁の瓶（149）、香炉（140）がある。瀬戸・美濃登窯3段階（127・148）や京焼小皿（193）と18世紀末以降の陶器が多数加わる。後者は碗（134）、香炉（火入れ139）、燈明皿（141）、こね鉢（155）、壺（161・162）、燈籠（166・168）、火鉢（172）、内耳鏡（187）などがある。

4～2層は4層に比較して資料は少なく器種も限られるが、窯地とり分け地方窯製品の多い点は共通する。肥前陶磁Ⅲ期の擂鉢（103）、瀬戸・美濃と思われる仏飯具（101）、京焼の徳利（122）、地方窯の火舎（105・106）がある。

福正寺再建時の19世紀中頃の肥前陶磁は碗以外に鉢・大皿・瓶・香炉・擂鉢など器種の増加とともに染付以外にも青磁や緑釉そして何よりも陶胎碗などより多様である。肥前陶磁以外では京焼や瀬戸・美濃窯が少数ではあるが一定量がある。そして最大の特徴は18世紀末頃から広まる地方窯の製品が広域流通の製品を補完する器種、例えば香炉（139）、灯明皿（141）、こね鉢（155）や仏飯具（101）が加わるとともに擂鉢（104）、火舎（105・106）、燈籠（172など）に地方窯製品を多用している。地方窯の実体は不明であるためこれ以上は立ち入れないが、こね鉢には地元の赤塗焼（156～158）が2層から出土している。赤塗焼は甕・こね鉢・徳利・片口鉢などの日常雑器とともに素焼きの火鉢なども焼いている（唐木田1974、安藤ほか1977）ので、この頃から赤塗焼が加わった可能性がある。

溝 SD07の陶磁器と土器 再建福正寺造成以降に作られた溝（用水路）SD07出土品は、陶磁器以外にも鐵滓や瓦などが廃棄されるなど、多様な土地利用に際して廃棄されたものも含むので、いわゆる一括遺物ではない。しかし廃棄土坑SX31・32などよりは古い。

SD07からの出土量はW地区ではもっとも多い。ここでも第2次整地層、前期福正寺時代後半の堆積層（12・

14・15層) と同様に肥前陶磁が主体で、これに瀬戸・美濃登窯(47)萩焼(46)京焼(45)地方窯(49・51・59・60・66・67・73・74)在地の内耳鍋と焰燈(61~65・68~71)などが加わるなど善光寺地裏前後の土層出土のやきものの類と産地別の組成は共通する。あえて相異があるとすれば肥前陶磁Ⅲ期が他よりも多い傾向にあるがIV・V期が多数を占める点では共通する。

肥前陶磁の中ではⅡ期の初期伊万里の碗(染付)がある(30)。一重の網目文を描く。Ⅲ期では鉢(52~54・56)がある。53は内面に菊花文を型押し白土を刷毛塗りした三島手と呼ばれるものであり、56は見込み中央に蛇ノ目の釉剥ぎのうちに白土刷毛塗りしている。Ⅳ期では刷毛目文を持つ蓋手碗(22)、外面青緑色釉、内面に四方擇文を持つ染付碗(31)、見込みに五弁花のコンニャク印判を持ち底部外面に「大明年製」の文字と唐草文のある輪花皿(55)、V期では白毫を描いた仏画(32)や梅樹文を持つ(33)染付碗、そして量的に多いⅣ~V期の陶胎碗(34~38)などがある。このほか、青磁(40・41)と半四方擇文・蛸唐草文・雷文を持つ染付の番炉(42)がある。また京焼風の篠利(50)もある。18世紀末頃であろうか。肥前陶磁以外では京焼の松葉碗(45)や瀬戸・美濃登窯3期の灯明皿(47)、萩焼の茶道用の碗(46)などがある。これらも18世紀末から19世紀代のものである。地方窯では鉄釉を施釉した汁吹(49)をはじめ、篠利(51)壺(59)擂鉢(66・67・73・74)や内耳鍋(61~63・68~70)があるが後者の一部は焰燈かもしれない。

麻糬土坑(集石)の陶磁器と土器 SX31・32に見るようにW地区では大半がもっとも新しい。SX18では底部に「カイ」の墨書きのある常滑焼の茶碗(83)や瀬戸系の乘乗(84)、SX34では漢詩「赤壁の賦」を記した瀬戸系の猪口(註1)がある。これらは19世紀以降の所産である。

### (3) 中世的やきものの組成から近世的やきもの組成へ

中世的やきものの組成 前項で今次調査で出土した陶磁器と土器について第1次~第3次の調査成果(笠澤・森・池田2003・2004)もとり込み調査地の土地利用の変遷に即して、芋川氏館跡出土のやきものについてまとめ、かつこの点から考えられる使用者の性格付けをする。

芋川氏が今地に居館を構えた15世紀末頃から1598年の会津移住するまでの芋川時代の陶磁器と土器は中国産の青磁碗・白磁小皿などの磁器類、古瀬戸天目、大窯の铁釉皿・端反皿、能登窯の珠洲壺・壺と擂鉢、在地の土師器皿(カワラケ)や内耳鍋に加えて瓦質の風炉がある。中国陶磁と少量の瀬戸・美濃系陶器を食器とし、儀式用や燈明皿である土師器皿、煮炊用の鍋、茶の湯用の風炉、貯蔵用の珠洲壺と壺が今日まで明らかになっている芋川氏館時代のやきものであり、基本的には当町の矢筒城館跡(牟礼村教委1981・1988)や表町遺跡(笠澤・原田・小柳2014)、長野市栗田氏館跡(原1991、市川1994、田中2014)、中野市高梨氏館跡(中島1993)などと共に通する。もっとも主郭部分に調査が及んでいる栗田氏や高梨氏館跡ではやきものの内容ははるかに豊かである。

近世的やきものの組成の樹立 次に慶長5年(1600)7月関ヶ原の戦い直前から1637年の福正寺創建までの間の陶磁器や土器は、横列SA05構築時を示す掘方埋土出土の越中瀬戸小皿と東堀SD05中層出土の陶磁器がある。前者は16世紀末に瀬戸の工人が越中に来て開窯した初期の陶器で、芋川氏館の歴史的背景と発掘の成果を考慮すれば横列の構築が関ヶ原の戦い直前であろうという時期決定の重要な資料であるとともに、初期越中瀬戸の編年上の定点を示す資料となる。

東堀中層は関ヶ原の戦い以降は廃館となり、1637年の福正寺建立までの間に堆積したと考えられる土層で肥前陶磁Ⅰ期の初期唐津やⅡ期の碗と小皿、瀬戸・美濃大窯と登窯1段階の志野丸皿と中国陶磁に在地産の内耳鍋がある。肥前陶磁Ⅲ期や志野丸皿は17世紀前業(大槻2000、藤沢2007)であるから、横列設置より新しいもので、その使用者を確定することは困難である。むしろ芋川親正が建立したと寺伝(「寺社領井由緒書」)(信濃史料刊行会1976)に云う妙福寺が関わったものとする方が自然である。横列の建設は親正が会津から派遣された配下の

者とするよりも、むしろ親正の要請により妙福寺が関係していたものと思われる。よって壇列及び福正寺創建までの陶磁器類は館に隣接していた妙福寺に係るものと思われる。その陶磁器類は中国陶磁と在地の土師器皿（カワラケ）や内耳皿に少量の瀬戸・美濃系からなる中世のやきものの組成にⅠ期の肥前陶磁と志野皿や越中瀬戸が加わるという近世的やきものの組成への転換期を意味しているよう。そこには儀式用のカワラケが欠落していることも妙福寺とする根拠である。

**近世的やきものの組成の展開** 1637年頃の創建期のやきものは第1次整地層にあり、肥前陶磁Ⅰ期と2期の唐津の碗と皿である。資料が少なく予想であるが、前代に始まつた近世的組成は継続したものと思われる。福正寺は寺伝によれば越後頸城郡猪村から移転したと云い（『長野県町村誌』）、越後と関係が深く、本寺である妙福寺もまた同様の寺伝（『妙福寺聖人木像縁起』）を持ち（小林・矢野ほか1980）、福正寺建立の従事者は肥前陶磁の受け入れが可能であったからである。

**再建福正寺時代（1847年頃より以降）** のやきものは肥前陶磁IV・V期の陶胎碗が主体でこれに京焼や地方窯が加わるがこれらは18世紀末以降で、17世紀から18世紀代の状況は善光寺地盤被災後の堆積層（12・14層）や善光寺地盤崩落土層（17・18層）の資料だけでは分からぬ。しかしSD07などには前期福正寺時代に年代的に合致する陶磁器が多数あるので、それらを加えると肥前陶磁に依存したやきものの組成を見ることができる。かように18世紀代末以降は19世紀中頃の再建福正寺の第2次整地層出土のやきものにも見ることができるとおり、肥前陶磁を中心に地方窯が加わった近世的組成の完成期と思われる。善光寺平各地で始まつた地方窯はすでにあれたとおり須坂の吉向焼などは別として、一般には肥前陶磁や瀬戸・美濃など広域流通の陶磁器の補完として生産を開始した。こね鉢や片口鉢、瓶など独自の器種を生みだすとともに、大型甕や火鉢など素焼の製品も生産した。

以上芋川氏館跡のやきものは中世的組成から近世的組成への変遷過程を垣間見る。資料数が決して多くないために器種別、産地別の比率は目安程度の意味しかないかもしれない。産地別では中国陶磁から肥前陶磁へ、器種別では碗・小皿類などの食膳具から鉢・大皿・瓶・水注・香炉など多様な器種を肥前陶磁に大きく求めたのである。しかし瀬戸・美濃系や萩・京焼などが全く用いられなかつたのではなく、ごく低比率ではあるが使用していた。長野市松代城下町遺跡の調査成果では使用者相や時期によって産地別比率は異なるが、いずれも肥前陶磁の占める割合は高いものの瀬戸・美濃系陶磁の割合もまた決して低くない（西本2005）。同じ北国街道沿いにあるものの、マチヒムラの相異、臨寺という小寺院と武家層との違いを反映したものであろうか、今後の検討課題である。併せて広域流通の陶磁器の搬入経路と方法も検討されねばならない。肥前陶磁は日本海まわり（大橋1992）で陸路北国街道を経てもたらされたものであろうが、瀬戸・美濃系はすべて中仙道経由としてよいかという点が課題として残る。

## 2. 瓦（第27図、表7）

溝SD07・廐棄土坑SX18（8・10・15・16）・SX32（6・11～14）と第2層から少量の瓦が出土した。瓦は橿瓦（14）丸瓦（7・9・10）軒瓦（1～5）軒丸瓦（8）熨斗瓦（6・11）と鬼瓦（12・13）がある。軒瓦は橿瓦に瓦当を接合し、瓦当面には中心に蓮華文を置き左右に均等に唐草文を配している。参考とあげた軒瓦（1）は最近まで妙福寺鐘堂で使用されていたもので中心の文様は柄である。軒丸瓦の瓦当面は欠損して文様は不明である。熨斗瓦は角に釘穴がある。鬼瓦は細片のためどの部分にあたるか不明であるが、渦文が茎線で描いている。遺構内へはいずれも廐棄されたものである。

このほか大棟へ設置したと思われる瓦（15・16）があるが用途は不明である。

瓦の出土量は細片を含めても总数67片であり、投棄された状態で出土している所を見ると、いずれも明治時代

以降に廃棄されたものであり、福正寺の屋根材ではなく今日と同様に妙福寺の築地土塼用の瓦であろう。大棟用の鬱斗瓦や丸瓦はそれを示している。今日でも妙福寺本堂は茅葺きであり、福正寺も同様であったと思われる。一般に今日でも豪雪地帯にある信濃町や飯綱町の多くの建物には瓦葺きは少ない。

### 3. 石器・石製品（第28～30図、PL 7、表8）

縄文時代中期の1点の打製石斧（1）と断面三角形の叩石（2）を除いては戦国期以降の石製品であり、調査地の多様な土地利用を反映している。石斧は芋川氏館跡主郭西南域で打製石斧5、磨製石斧1点が出土しており（佐澤・森・池田2004）、それらと関係するものである。

戦国時代以降の石製品は粉挽き白上白（34）石鉢（3～6）凹石（7）砥石（9～14・33）石硯（15～18・23）石盤（19～22）石筆（24・25）磨石（8）炭化物付着の円盤（26）五輪塔空風輪（27・28）地輪（29・30）石佛（31）と「矢」の痕跡が残る安山岩の建築石材（32）の13種である。

遺構別では廃棄土坑SX18から磨石（8）砥石（10）石盤（21）石硯（15）、廃棄土坑SX24からは叩石（2）、SX22から砥石（11）、SX44から砥石（12）、SX31から五輪塔空風輪（28）、溝SD07からは砥石（13）、東西溝SD10から石鉢（5）がそれぞれ出土し、遺構別では廃棄土坑が多い。これらの遺構はすでに述べたとおりいずれも第2次整地層よりも新しい。また、廃棄土坑に多いことは不要となった石などとともに埋め立てたもので、土坑の構築時期は出土遺物の年代の下限を示すものである。層位別では第2次整地層上層から石硯（16・17・23）石盤（19・20・22）石筆（24・25）がある。第2次整地層からは石鉢（3）砥石（9・12・14）石硯（18）円盤（26）、第2次整地層下部からは石鉢（6）五輪塔（27・29・30）石佛（31）建築石材片（32）粉挽き白（34）がある。

よって、第2次整地層出土の石製品の年代は善光寺地盤の起こった1847年以降に第2次整地層内に取り込まれたことになり、石製品としての使用年代の下限が得られる。第2次整地層下部は善光寺地盤にともなう崩落層で、石製品の下限が1847年以前となる。

以上から、18を除く石硯の大部分、石筆・石盤は用途を考えれば、芋井学校時代の遺物としてよい。石筆と石盤は鉛筆の代用品として使用されたもので、石硯とともに芋井学校時代の学習活動を劈髪とさせる。また、砥石や石硯、石鉢は第2次整地層かその上位出土であり、埋没時期が知り得るので使用時期も推定できる。砥石は携帯用の小型砥石A（10・13）、木枠に固定した砥石B（14）、固定式の大型砥石C（9・11・12）があり、前者には荒砥（14）も含む。第2次整地層とその上位から出土し時間差がある。中世後半から江戸時代初頭の集落（根小屋）である牟礼地区の表町遺跡では砥石は多くが小型携帯用砥石（A）であって大型砥石は見られなかった（佐澤・原田・小切2014）。この相異は時間差もあるうが、遺跡の違いも反映したものと云える。つまり、廃棄土坑SX22出土の大型砥石C（11）などは鍛冶用砥石であった可能性があり、鐵滓などとともに外部から廃棄された可能性がある。だとするならば、出土遺物から遺跡本来の性格を推定する資料とは成り得ないことになる。このほか、自然石に鉄製利器の研磨痕のある砥石D（33）がある。

石鉢は大型（3・4）と小型（5・6）がありともに黒灰色輝石安山岩製である（註3）。出土状態からは新旧があるが、用途や使用時期を推定するには資料不足と云える。

五輪塔は空風輪（27・28）と地輪（29・30）があり、水・火輪を欠くなど、石佛片とともに本来の位置を示すものではない。空風輪の風輪部側面には墨書き痕が残るが、判読不能である。空風輪27は表町遺跡に似るが空風輪28とは異なり時間差がありそうである。おそらく時間差のある二種類の五輪塔は、石佛とともに出土しているので、近接地に墓域があったことを暗示している。

#### 4. 金属製品（第31・32図、口絵5-2、PL6-2、表9・10）

出土した金属製品にも多様な土地利用の反映が色濃い。腐蝕の進んだ微細な破片や薄板の一部など用途不明品を除けば、出土状況や材質などから、ある程度の推測が可能である。

金属製品には材質別では銅（1～5・7～17）、船（6）、鉄（18～26）の製品がある。銅製品では金銅（1・2）、青銅（10・11）、真鍮（8・12～17）があり、金銅製品も含めた銅板（1～5・7）は第2次整地層（4層）出土が多く、寺院に關係した仏具などに係る遺物とすることができる。ただし、鑼（はばき）（10）や小柄（こづか）（11）などの刀剣具類は芋川氏關係の遺物とすることができよう。船製品のサーベルの柄は2層出土で、近・現代の玩具、耳搔も出土状況から近・現代のものであろう。

煙管（キセル）は雁首・煙管・吸口からなり、これらが一体である少數の延べ煙管と雁首と吸口を竹でつなぐ羅字煙管がある（小泉2001）。本遺跡ではすべて後者である。雁首と吸口の多くは真鍮製で、本例（12～17）も同様であり、吸口片である。いずれも端着痕をとどめる。口付から小口にむけてふくらみを持つもの（14・16・17）と直口（13・15）があり、菊花文を毛彫された例（15）もある。いずれも18世紀後半以降とされる（小泉2001）。SD07の1点（13）を除きいずれも第2次整地層出土で、年代的にも矛盾がない。奥掘が江戸時代末期に当地において盛んであったことを示すものであり、肥前産火入れの出土もこのことを後押しする。

鉄製品は断面方形の和釘（21・22・24）、円形の丸釘（23）と巻の引手金具（26）を除き用途は不明である。これらは第2次整地層上層または相当層出土で、近代以降のものであろうし、丸釘は明らかに新しい。また、用途不明の鉄製品のうち第2次整地層出土品（18）も含むが、いずれも江戸時代を大きく遡るものではない。

銭貨は77点がある。銭種の内訳は中国銭2枚、近代銅貨5枚、寛永通宝51枚、不明19点である。不明銭は錢差資料6点（6）を含み、大多数は寛永通宝であろう。寛永通宝は寛永13年（1636）公銭として初鋳された古寛永（1など）と寛文8年（1668）初鋳の新寛永（2など）がある。前者は「寶」の字がスとなるもので16点と3割を占める点注目される。また新寛永には背に「文」をもつ文銭が5点（2・9・18-2・32・36）ある。このほか中国銭2枚は北宋の熙寧元宝（25）と明の永樂通宝（35）、近代銅貨では明治半銭・一銭と不明銅貨がある。

遺構別・層位別など出土状況ではSD07が3点（1・2など）、廃棄土坑（集石）では4点（3～5、整理番号28-2）、第2次整地層（4層）31点（7など）東掘柵土上層（14層）6点（10～12、整理番号34）、東掘柵土中層の北宋銭（25）がある。このほか最上層（1～3層）からは少量の寛永通宝と明治時代以降の近代銅貨がある。層位別の出土状況では土層の分析と矛盾はない。第2次整地層に新・古寛永通宝が集中して出土していることは再建時の福正寺における寛永通宝の流通状態をある程度示すものと思われる。つまり古・新寛永通宝が共に使用されていたのである。銭差状態で出土した例は認められたが、そこにも新古2種が混在しており、再建時の流通に共通する。また古寛永が3割を占めていることから、それを以って福正寺における貨幣經濟の実態を示すものとするには早計である。

#### 5. 錬冶関連遺物（第33図、PL6-2、表11）

糖羽口（1～4・13・14）と鉄滓（5～12・15・16）がある。大多数が溝SD07の青黒色砂礫層（11層）上部の砾層出土（1～12）であり、廃棄された状態である。鉄滓は塊型で少量ではあるが、SD07の周辺部からも出土した（15・16）。器面に多数の炭化物片や砂粒を付着した例（5など）もある。鉄滓の中には鉄分を多く含む例も多い（10・12・15・16）。糖羽口の直径は破片から体部径が復元でき、直径は7cm前後、空気孔径は3cm前後である。粘土製で器壁厚は2.5cm前後である。このほか錬冶用と思われる大型砾石Cがある。廃棄時期は再建福正寺の移転（1909年）以降であろう。調査地の100m西南には昭和30年代まで操業していた錬冶跡（SX08）

がある（笠澤・森・池田2003）。いつ頃から操業を始めたかはっきりしないが、信濃町古間の鍛冶集団から分離した小規模な鍛冶集団の行為結果を示すものである。

#### 6. 木製品（第34～37図、PL 7、表12）

木製品には食関係の漆器・曲物などの容器、文具である木製硯、農耕具である鞆・鋤先、土木・建築関係の柱・樋・杭と板材があるが、大半は小片が多く器種は不明である。器種別では杭が大多数を占める。尚、自然遺物ではオニグルミ・モモ・アンズ・ブドウなどの果実、コメ・ソバ・アサなどの栽培種子などが出土した。

鞆（1）は自然木の設木を利用して鞆床と鞆柄（鞆身）を作りだした一本造の長床鞆である。一般に長床鞆は組木によって鞆ヘラと鉄製の鞆先を着装するが、田中寿子氏によればこのような一本造の長床鞆は類例がないと云う（註2）。鞆は人力による足踏み式の鐵と牛馬に引かせる鞆があって、後者は古墳時代後期以降、大陸または朝鮮半島から持ちこまれたものであり、牛・馬の飼育を伴なうもので、農村への普及は元禄から天明年間（1781～89）以降のことである（三橋時雄1985）。千曲市馬口遺跡で仁和4年（888）の洪水砂で覆われた水田面に鞆先の痕跡が見られた（翠川2012）が、本例は杭列Bを伴なう溝SD13から鉄（2）とともに出土した。SD13は善光寺地震崩落土も考えられるところから、江戸時代後期18世紀末～19世紀前半代のものであり、長床鞆の変遷と普及ひいては当地の農村史を考える上で、貴重な史料である。ハンノキ製。鉄（2）は先端幅が狭まる形である。先端に鉄製の鉤先を着装したものであるが、遺存していない。江戸時代末期に使用されたものでコナラ製である。長床鞆とともに年代が分かる定点資料となり得る貴重資料である。

漆器は杭（3）鉢など5点がある。3はSD05埋土（20層）出土で椀底部で中世末期、他は第2次整地層出土である。鉢（口絵2-4）は第2次整地層出土で、木地が失われ赤の塗の膜のみ残存し、ウレタンで取り上げたものの実測は不可能である。

曲物は側板のヘギ板（12・14）、底板（4・9）と柄（17・18）がある。柄と小型の底板は柄杓であり、西堀から完形品2点が出土している。ヒノキやスギを素材としている。SD07（4）、SA05掘方2埋土内（18）、東堀埋土（12・14）などは、年代が知り得る資料である。ヘギ板の細片は他にもある。木製硯（6）は、石硯の代用品あるいは拂帶用か。コナラを使用している。このほか籠の一部と思われるあみものの片（口絵2-5）や建築用材と思われる板材（19・23）などがあるが、用途は不明である。樋（57・58）柱（60・62・63）を除いて、木製品の大多数は自然木とともに杭がある。杭は枝または細い丸太材の先端を削ったものであるが、柱を転用したと思われる例もある（59・61・64）。樋と転用柱も含めた柱材はクリを用いている。杭もクリ（49・54ほか）が多いが、スギ（28ほか）マツ（29ほか）カラマツ（34ほか）など針葉樹が多用されている。その他にモモ（53）コナラ（48ほか）イヌエンジュ（30）がある。栽培種であるモモを用いている点興味深い。

註1 長野市埋文センター田中暁徳氏の教示による。なお詳細はいいづな歴史あれい館紀要に掲載予定である。

註2 鞆には短床鞆・中床鞆・長床鞆があるが、在来鞆と近代以降の改良鞆などの呼称もある（河野2009）。本稿で使用する用語は日本農業発達史調査会（1953）記載（307頁）の呼称に原則従った。なお鞆身と鞆床が一体の一本造りの鞆は福岡県浮羽町（現うきは市）の在来中床鞆がある（河野2009）。

註3 黒灰色輝石安山岩（And3）は多孔質・軟質で加工しやすく、輝石安山岩（And1）とともに鏡繩火山岩のひとつである。

表町遺跡では五輪塔・板碑・石鉢・石臼などの主要な石材として使用されている（笠澤・原田・小柳2014）。尚同報告では凡例で「無斑晶質」と表記したが、「風灰色輝石」の誤りであり、訂正する。

## 第4節 種子鑑定

佐々木由香・パンダリ・スダルシャン（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

芋川氏館跡は、長野県上水内郡飯綱町芋川に所在し、庄尾川沿いに立地する。利用された植物や周辺植生の復元を目的として、16世紀末以降に埋没したと考えられている東堀などから得られた大型植物遺体の同定を行った。なお、同定にあたり、千葉大学大学院農芸学研究科百原新先生よりご教示を得た。

### 2. 試料と方法

試料は、東堀中など調査区内で取り上げられた17試料である。なお、同一試料中に複数の分類群が含まれている場合は、細分番号を付した。東堀の埋没は別稿とのおりであるが、個々の試料の詳細な時期は不明である。

種実の抽出・同定・計数は、肉眼および实体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。同定された試料は、飯綱町教育委員会に保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のオニグルミ核とコナラ属果実、オオウラジロノキ果実、モモ核、アンズ核、サクラ属サクラ節核、ブドウ属種子の7分類群、草本植物ではアサ核とソバ果実の2分類群、計9分類群が得られた（表4）。得られた種実は完形21点、破片13点の計34点であった。

産出量はソバが最も多く完形12点破片5点、次いでオニグルミが完形4点破片2点、モモが完形3点破片2点であった。そのほかの分類群は1点ずつであった。なお、オニグルミには1点のみ齧歯類の食害痕がみられた。

以下に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

表4 芋川氏館跡出土の大型植物遺体

写真番号	試料No.	遺物番号	グリッド	遺標名	層位	分類群	部位	産出数	破片	備考
1	8	16	J10		20	オニグルミ	核	1		
2	11	19	H11	堀上面	12	オニグルミ	核		(1)	動物食痕
3	17	31	L11他			コナラ属	果実		(1)	
4	13	27	J10		19	オオウラジロノキ	果実	1		
5	5	12	J10		15	モモ	核	1		
6	1	5	L11		19	モモ	核	1		
7	2	7	J11		19	モモ	核		(1)	
8	16	30	H10		19	アンズ	核		(1)	
9	14	28	J11		20	サクランボ属サクラ節	核		(1)	
10	12-1	26	J11		20	ブドウ属	種子	1		
11	12-2	26	J11		20	アサ	核		(1)	
12	15	29	L11他			ソバ	果実	12	(5)	
	3	9		堀		モモ	核		(1)	
	4	11	J09		17	モモ	核	1		
	6	14				オニグルミ	核		(1)	
	7	15	H10		20	オニグルミ	核	1		
	9	17	H10		4	オニグルミ	核	1		
	10	18			20	オニグルミ	核	1		

(1) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 楠 クルミ科

黄褐色で、広卵形。鱗は緻密で硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。計測可能な4点の大きさは、長さ28.5~31.1(平均30.2)mm、幅25.1~28.0(平均26.8)mm、厚さ23.0~26.6(平均25.4)mm。

(2) コナラ属 *Quercus* sp. 果実 ブナ科

暗褐色で、破片だが完形ならば椭円体か。柱頭および鱗は残存していない。縦方向の細かい筋がある。残存長12.5mm、残存幅7.8mm。

(3) オオウラジロノキ *Malus tschonoskii* (Maxim.) C.K.Schneid. 果実 バラ科

暗褐色で、球形。頂部に萼片が残って直立する。下端には円形の鱗がある。長さ17.2mm、幅15.6mm。

(4) モモ *Amygdalus persica* L. 核 バラ科

淡褐色～淡黄色で、上面觀は両凸レンズ形、側面觀は椭円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面には不規則な深い縫がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。計測可能な3点の大きさは、長さ23.4~27.6(平均25.0)mm、幅15.6~20.2(平均17.5)mm、厚さ12.6~14.8(平均13.7)mm。

(5) アンズ *Armeniaca vulgaris* Lam. var. *ansu* (Maxim.) T.T.Y&uuml; et L.T.Lu 核 バラ科

淡褐色で、破片だが完形ならば上面觀は扁平、側面觀は円形。一方の側面では縫合線が発達する。表面には網目状の模様がある。縫合線付近には不規則な縦縫がある。長さ16.2mm、幅12.7mm。

(6) サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* spp. 核 バラ科

淡褐色で、上面觀は椭円形、側面觀は円形～広卵形、上部がやや尖る。下端に大きくくほんだ着点があり、一方の側面では縫合線が発達する。表面は平滑だが、縫合線付近には斜め方向の数本の条が入る。厚く硬い。長さ6.4mm、幅5.8mm。

(7) ブドウ属 *Vitis* spp. 種子 ブドウ科

黒褐色で、上面觀は椭円形、側面觀は下端が尖る卵形。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には縦方向の2本の深い溝がある。種皮は薄く硬い。長さ4.4mm、幅3.4mm、厚さ2.1mm。

(8) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

淡褐色で、上面觀は両凸レンズ形、側面觀は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した椭円形の大きな着点がある。表面には膜状の模様がある。長さ4.3mm、幅3.5mm。

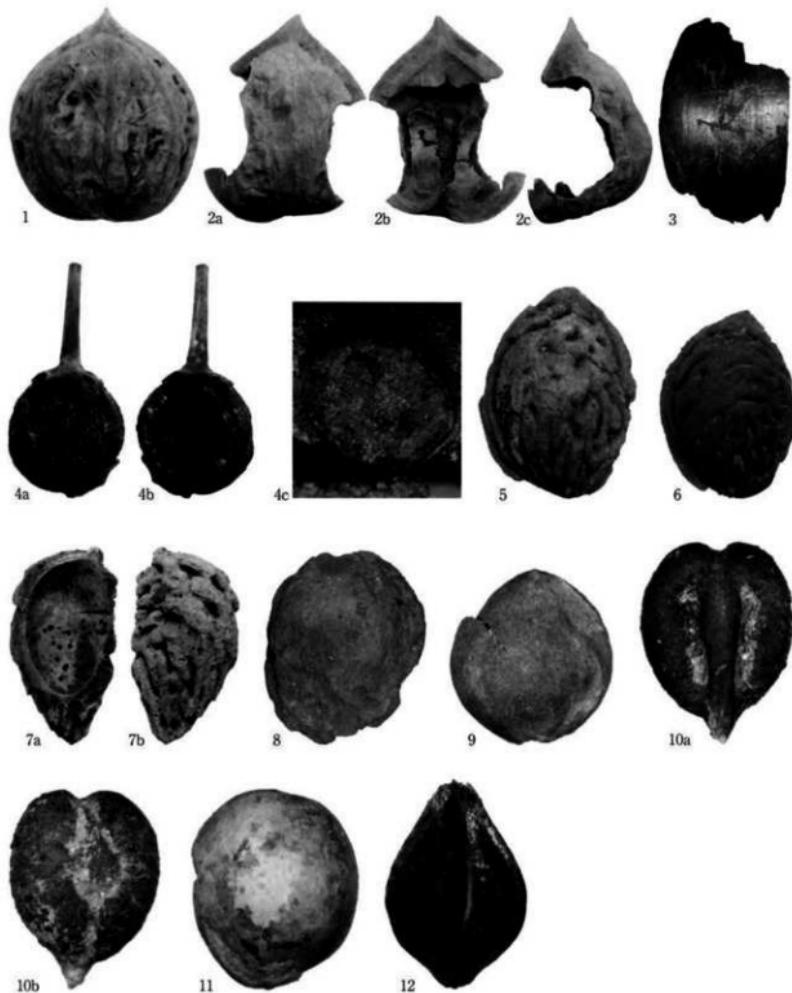
(9) ソバ *Fagopyrum esculentum* Moench 果実 タデ科

茶褐色で、横断面が正三角形の三稜形。着点付近には膜状の果皮が残存する。長さ7.0mm、幅5.8mm。

## 4. 考察

芋川氏館跡からは、栽培植物で果樹あるモモとアンズ、畑作作物であるアサとソバ、食用や薬用などに利用可能な野生植物であるコナラ属とオオウラジロノキ、サクラ属サクラ節、ブドウ属が取り上げられた。これらの植物が館跡の近くに生育あるいは栽培されていた可能性もあるが、食用のために持ち込まれ廃棄された可能性もある。モモなどは、祭祀行為に使用された可能性などが考えられる。今後、樹種同定や花粉分析を併用することにより、周辺の植生についてより詳しく検討できること期待される。

註 種子鑑定は2面にわたり、本鑑定は2面目のもので、第1面と異なる点はイネ(東堀19・20層)、シラカシ(19層)、トチノキ(15・19層)であり、他は共通なので割愛した(佐藤)。



スケール 1-3, 5-8 : 5mm, 4 a-b : 10mm, 9-12 : 1mm, 4 c は任意

挿入写真4 芹川氏館跡出土の大型植物遺体 ( ) 内は試料No.

1. オニグルミ核 (No.8)、2. オニグルミ核動物食痕 (No.11)、3. コナラ属果実 (No.17)、4. オオウラジロノキ果実 (No.13)、5. モモ核 (No.5)、6. モモ核 (No.1)、7. モモ核 (No.2)、8. アンズ核 (No.16)、9. サクラ属サクラ節核 (No.14)、10. ブドウ属種子 (No.12-1)、11. アサ核 (No.12-2)、12. ソバ果実 (No.15)

## 第5章 まとめ

### 1. 本稿の目的と前提

芋川氏館跡第4次発掘調査は、館跡と妙福寺参道間の581.6m<sup>2</sup>で、地元の田中公会堂建設に伴う緊急調査であった。しかし、小面積の調査ではあったが、この地方の地域史を語る上で数々の成果をあげることができた。本稿では、第1～3次調査も含めて、芋川氏館跡に係わる成果と課題を以下の4点についてまとめる。1点目は芋川氏の防御施設、2点目は館と寺の二重構造、3点目は櫛列について、そして4点目は今後の課題である。よってここでは前章ではふれなかった妙福寺や山城についても言及する。また前提として以下の3点を確認しておく。

前提の1点目は遺跡の呼称についてである。これについては過去にふれている（笠澤・森・池田2003）が再度以下に述べる。

居館跡が芋川氏の居館であるという根拠は芋川という地名と地元に伝わる伝承以外に以下の史料がある。ひとつは永祿12年（1569）の武田信玄の芋川親正への手紙（『信濃史料』13の281）において「其堀」（信越国境）についての様相を防ねており、芋川氏の領域を伺い得る。

2点目は天正10年（1582）4月の「芋川の乱」における『信長公記』の記載である。芋川親正は、「芋川の乱」で織田軍に大敗北をするが、信長の死去によって北信を制した上杉景勝により天正10年7月26日本領安堵の上、香坂・大岡（長野市信州新町・大岡）を宛がわれている。ここでいう本領には芋川の地を含むであろう。この時には別に景勝は牧之島城（長野市信州新町）の抜書を下付しており（『信濃史料』補遺上の578）親正は城主として城の全権を委任された。その理由はこの地方が「小笠原貞慶の北進と安曇郡諸土の向背とが連動して、もっとも緊迫し、かつ不安定な前戦基地であった」（池上1998）からである。

国人層の多くが苗字を本領地の地名を冠しており、以上により芋川氏館跡として「伝」をはずした理由である。

3点目は館跡の規模についてである。今回調査で東堀を確認したことにより主郭の規模及び平面形が一辺60m規模であることが判明した。前回調査時より主郭の東西径が8mほど大きくなつたが、市川隆之氏の北信地方の居館分類の半町規模である点は変わらない。市川氏は居館を1町規模・半町規模・30m規模の3種に分類し、14世紀代に半町規模がまず出現し、以後1町規模・30m規模に分化するとし、規模と出現時期から国人層について言及した。（市川1997）。しかし、国人層の判明している居館跡の調査例が乏しく一般化するにはさらに検討が望まれる。芋川氏館跡の出現時期は半町規模ではあるが15世紀末頃で市川編年には当てはまらない。しかし、市川氏が指揮するとおり館の規模は構築時の国人層の力関係を示すものである。例えば、1町規模の栗田氏や高梨氏居館は北信の有力武将の居館であり、芋川氏館跡は中段階の国人層の居館となる。また居館の中には武田氏によって山城の機能を吸収した平城が出現する。海津城（長野市松代）や長沼城（長野市長沼）などであり、武田氏の信濃攻略の拠点となる。

以上により芋川氏館跡は出土遺物で見る限り戦国時代の居館で、芋川親正が牧之島城主となつても本貫地の居館として機能していた。しかし主郭内部は西南堀（笠澤・森・池田2004）以外は未調査で実態不明である。

### 2. 芋川氏の防御施設

芋川氏の防御施設は館跡と山城がある。櫛列は芋川氏が信州を離れた後の施設であるので後段で扱う。この地の国人芋川氏の存在は甲越対立抗争の中で、極めて微妙な立場にあった。これは矢筒城を構える島津氏と同じ

立場にあった。矢筒城の堀の構造は不明であるが芋川氏の防衛施設には障子堀を設けるなど腐心の跡が伺える。障子堀は從来から小田原の後北条氏の城郭を代表する防衛施設と云われてきたが、多くの城館の発掘調査例から、小田原氏の領内にとどまらず、広域に見られることが判明しつつある（池田1998・1999、中世城郭研究会1999）。しかしその情報の入手先は未だ解明できずにより、依然として課題として残されている。

芋川氏の防衛施設は戦国期の国人層と同様に山城と居館である。從来芋川氏に係わる山城には、館の西方背後の城山山頂にある鼻見城と、斑尾川を2km遙った山間にある若宮城とされてきた。

鼻見城は「本丸跡」と「二・三の丸」と呼ぶ3ヶ所の平場からなる。詳細な縄張図は作成されておらず、細部は不明である。「本丸跡」は最高所にあり、東西25m南北6mの平場で空堀で囲まれる。山城自体は全体に小規模であり、帯曲輪も少ない。

若宮城は斑尾川水系が狭まり、深い渓谷に面し斑尾川とその支流に挟まれた尾根先端の山塊を山城としている。鼻見城に比較して若宮城は曲輪・土壘・堀切・堅堀など山城としての機能を整えているところから、応永11年（1404）の足利幕府代官細川慈忠によって攻め落とされた「下芋河之要害」をこれにあて、さらに「防備施設が複雑で念が入っている所」から、戦国時代に施設を増強したとして、芋川氏の山城とし、鼻見城を補助的な山城とする見解が一般的であった（小林・矢野ほか1980）。これに対して遠藤公洋氏は詳細な縄張図を元に、この山城の独自性から、武田家滅亡後の織田軍の越後侵攻に備え急遽築城した上杉側の山城であるとした。さらに氏は若宮城は「尾根を土壘に見立て、谷部分の空間を利用する構造」であり、越後の山城と、北信地方の磐山城（長野市・飯綱町）や町尻城（信濃町）、矢筒城（飯綱町）などにも認められ、「総体として空間確保を最優先した臨時の防備の様相がうかがえる」もので、吉江与太郎らに宛て出された卯月18日付上杉景勝書状にある「新地普請」の城で築城には芋川氏などの協力も得て実施されたものとする（遠藤2009・2013）。遠藤氏の主張のとおり若宮城の立地する斑尾川水系はすでに指摘してきたとおり、越後と中野・飯山を結ぶ云わば軍用道路の役割を担っており、狭い谷間を眼下に、織田の大軍に立ち向かうには最適の備えであると云えよう。館跡から2kmと離れた地点に立地する理由と「若宮城」を「新しい城」と理解すればこの呼称も説明がつく。

もともと若宮城については芋川氏の構築に係わるという伝承が地元には強い。主郭の一角に明治7年（1874）に建てられた「芋川古城の碑」には芋川氏の出自と若宮城との関係が記されている。そこには応永年間に足利幕府に攻められて芋川氏が滅亡し、楠正成の子孫が跡を継ぐなど、楠氏との係わりが示されている。応永年間の記載事項は応永11年の下芋川の要害のことである。

したがって、遠藤説によって、芋川氏の山城は鼻見城のみとなる。しかし鼻見城が山城としては簡易な構造で、障子堀で囲まれた堅固な館とは落差が大きい。はたして簡易な山城であるか、今後の調査・検討が望まれる。同様に若宮城が遠藤氏の主張どおり臨時に構築されたにせよ、その後の管理など疑問が生まれる。若宮城成立の契機は遠藤氏の主張どおりとしても、若宮城が芋川氏の城であるという伝承から織田軍撤退以降は芋川氏の管理下に置かれていたものと思われる。発掘調査などでさらに詳細な検討が望まれる。

### 3. 芋川氏館と妙福寺の二重構造

西に芋川氏館、東に妙福寺が併置されているところから、郷道哲寧・白田武正両氏は、館跡を主郭、妙福寺を副郭とする中世館の二重構造説を唱えた。長野県の中世城館跡の集成を意図したため根拠は特に記されていない（郷道・白田1983）。

妙福寺は森尾山妙福寺と呼び真宗東本願寺末寺であり、本尊は阿弥陀如来で、本堂・庫裡・鐘楼からなる。貞永元年（1232）下総国の莊司鎌田兵衛政清の子政成が、下総国鎌田村に建立、その後火にかかり越後国箱井に

移転、再び兵火にかかり元亨二年（1322）現地に建立するも寛永元年本堂を焼失、現在の本堂は寛文元年（1661）に建立したと寺伝には伝える（「妙福寺聖人木像縁起」ならびに「妙福寺秀益節の墨模換時の文」）（小林・矢野ほか1980）。飯山藩の「寺社領井由緒書」（信濃史料刊行会1976）には「開基永祿十卯年（1567）芋川越前守殿造営」とある。妙福寺の前歴はさておき、永祿10年（1567）、芋川親正によって、館に併設したものと思われる。妙福寺もまた芋川氏館の東堀と葦尾川そして現状の地形からも、東西にすくなくとも土塁や堀に面されていた可能性がある。調査地では、館の南堀は妙福寺まで延長してはいなかったが、参道東側から葦尾川にかけて築地にそった低い水田と北側の地形から、東は葦尾川を利用し西は館の東堀を、そして南北は妙福寺の築地堀に沿った防御施設が予想できる。今次調査では築地堀沿いは未調査であったため妙福寺の防御施設の具体的な内容は今後に委ねられることになる。

館跡を妙福寺と一体としてとらえた研究者は先述のとおり、郷道哲章・白田武正両氏である（郷道・白田1983）。政庁の場である館と宗教施設である妙福寺の二重構造は、上越市にある越後の守護所跡と至徳寺跡（金子2003）など類例はいくつかある。芋川館の二重構造が館創立の当初からであったとは思えない。芋川氏館の建立が15世紀末と思われる所以、永祿10年創建の妙福寺は、のちに館に併設したことになる。この永祿年間は、永祿4年（1561）の川中島の戦いの激戦のあと、上杉謙信が関東各地の転戦の間に、武田信玄が北信国人層を取り込み、国境に近い飯山・哥尻城のみが、上杉方の拠点となり、それも武田軍の攻撃にさらされていた（池上1998）。芋川親正もまた武田側につかざるを得ず、永祿12年（1569）に信玄は親正に国境の様子を伺う手紙を出している。よって、妙福寺を館に併設した大きな理由は甲越抗争の中で、自身の保全を目的に、一向宗の勢力を取り込むことにあったと思えるのである。

武田氏滅亡のあとに織田信長は信濃攻略を開始し、北信4郡は配下の森長可が支配するところとなる。これに対して、北信の国人層は叛乱をおこす。それが天正10年（1582）4月4日の芋川親正を大将とする数千の浪人・百姓らの一揆いわゆる「芋川の乱」である。まず、飯山城を包囲する織田軍の糧薬販通を攻めるが、織田軍の援軍により敗北し、大倉城（長野市疊野町）に婦女子一族數千とともに立てこもる。4月7日には織田方の長沼城（長野市長沼）を攻めるが海津城（長野市松代）からかけつけた森長可によって大敗北し、大倉城にいた婦女子、子供など数千人が殺戮されたと云う。乱の背後には上杉景勝がいたと云われる。この「芋川の乱」は池上裕子氏によって、一種の一揆一揆の性格があったと云う（池上1998）。小山丈夫氏も飯綱町から長野市北部の寺院や旧家に出自が三河門徒であったという伝承が多くみられることが検証して池上説を補強している（小山2000）。こうした三河閥一向一揆を彈圧した織田信長に対する云わば怨念が乱の大きな要因とするのである。芋川親正が一向宗の熱心な信者ゆえに妙福寺を併設しただけではなく、最大の目的は織田信長に対する怨念を持つ一向宗徒の取り込みにあったからである。妙福寺出身の元長野市埋蔵文化財センターの調査員であった中殿章子氏によると家人がゴミ穴を掘った時に多量のカワラケが出土したことを子供ながら見聞きしたと云う。妙福寺が寺院であるとともに軍事的要塞であったことを物語るものである。土師器皿（カワラケ）は戦国武将にとって儀礼用の祭器であるからである。今後妙福寺内の調査が及ぶ機会があればぜひ確認したい点である。

なお、妙福寺の前身に蓮証寺があったと『三水村誌』にある。蓮証寺は西本願寺末寺で近江国から永祿3年（1560）に芋川中峯の地に移転し、寛文7年（1667）に飯山藩主に請われて飯山市奈良井沢の地に移転した真宗寺院で、芋川時代には、妙福寺ほか8ヶ寺ほどの寺院を末寺とし、門徒も1000戸あり、移転に際してそれらを離壇したと伝える。『三水村誌』には永祿3年に館跡に建てられた寛文7年に移転したとあるが妙福寺が永祿10年に建てられるので矛盾している。もっとも別の記載では廃寺跡蓮証寺領の墓として、町部落の背後地を比定している（小林・矢野ほか1980）ので、館跡は誤解である。このように芋川中峯に真宗の寺院として構えていたから芋

川氏と深い関係にあったのであろうか基本的にはよくわからない。寺伝にあるとおりとすれば芋川氏との関係は見られないところから、芋川氏の会津移住後建立されたものと思われる。

同様に現在芋川氏の菩提寺とする菩翁寺が町部落に近接している。芋川氏によって建てられたという伝承を持つ古刹である。元真言宗寺院であったが永禄元年戦火により堂宇消失し、元亀2年芋川金七が再建曹洞宗に改めたという。現在芋川親正の墓があるが、弘化4年に芋川氏一族の柏原村（現信濃町）の中村家が米沢芋川家から分骨したものである（小林・矢野ほか1980）。なお現在の墓は城主を務めた福島市大森城跡にある（小林・矢野ほか1980）。

菩翁寺は芋川氏に係わる伝承をもち芋川時代の根小屋の一隅を占めるところから芋川氏と関係のある寺院であったことは間違いない。しかしそこに前身芋川氏館があったとする見解もあるが、現状ではそれを語る資料はない。

#### 4. 檻列の設置と館の再防御

調査範囲が狭く調査例から柵列の設置について普遍化することには抵抗もあるが、その意義については後段にふれる。

さて、柵列 SA05 堀方2の堀土から越中瀬戸Ⅰ期の小皿1点が出土し、柵列構築の年代がほぼ確定した。これは柵の検出状況とも矛盾しない。第2次調査においては西堀外縁の柵列などは確認できなかったが今次調査における柵列の確認時には、土壘と堀に加えて柵列の3施設による防衛システムを想定したが、越中瀬戸の出土などによって、堀との年代差が明らかになり、別な解答が必要となった。

芋川氏は甲越抗争の中にあって、常に危機的状態の中にあった。これは北信の国人層とも共通し、その時々の政治状況により、甲越いずれに身を置くかによって、自己の存続に深く関わっていたのである。芋川氏も上杉方に身を置いていたが、永禄4年（1561）以降の数年間は武田側に属した。こうしたなかで芋川親正が積極的に事態打開に動いたのが、一向宗徒とともに起こした天正10年（1582）4月4日の「芋川の乱」である。一揆側の大敗北によって上杉景勝は織田軍の侵攻に備えて飯山城と野尻城を二大拠点として、その中间点である芋川の地に若宮城を構築したとする理解は無理がないし、その直接の契機は遠藤公洋氏（遠藤2009・2013）が明らかとしている。こうした対織田軍の対応施設として、芋川館の再防衛も考えられるが越中瀬戸の開発が官田進一氏の研究（官田1988）から無理となる。そこで越中瀬戸Ⅰ期の上限である16世紀末以降で、館の防衛体制を強面にする歴史事象は芋川氏会津移住の慶長3年（1598）正月以降から関ヶ原の戦いの慶長5年7月の間における上杉・石田方と徳川との政治的緊張關係にあるとしたことはすでに述べた。これには百姓を除く芋川氏一党がすべて会津へ移住したのかという疑問点と妙福寺などの一向宗（浄土真宗）の寺院や門徒など親芋川勢力の存在がどう保証されていたのかという点である。豊臣秀吉死去後は北信は慶長5年（1600）2月家康配下の森忠政の入封もあって、どの程度移住が徹底していたか定かでない（古川2000）が、柵列設置など館の再防衛体制は芋川氏の指示のもと、在郷の妙福寺など親芋川勢力によってなされた点はすでに述べたところである。しかし、一地方のしかも極めて小さな館跡の防衛が、日本の政権の趨勢を左右するものではないであろうが、上杉方の情報入手の一拠点として、かつての上杉支配下に多数存在とすれば情勢は変わってくる。今後は史料的裏付けと、類例を考古学的方法で集成・検討することにあろう。

#### 5. 芋川氏館跡調査の課題

東堀外縁にそって構築された柵列の評価は調査範囲が狭く、妙福寺御は未調査域が多く、結論を出すには早計

であるという反論もあり得る。それでもあえてこの点について触れる最大の理由は、各地に残る館跡の現状にある。特に都市部にある館跡は調査されることなく消え去ることは、さすがに耳にしなくなったが、長野県内の館跡について云えば全く問題がない訳ではない。特に堀外縁の調査例は皆無といってよい。文化財指定も、本遺跡がそうであるように、主郭部のみが指定対象とされ、堀が除外されている例が結構長野県には多い。堀の分布範囲が不明であることでも原因であろうが、それだけのことではない。堀または堀外についての知見が乏しく、調査の対象から除外されるという悪循環に陥っていることにあろう。しかし本報告で示したとおり、僅かに残された堀跡にも地域史を紐解く貴重な資料がひそんでいる。根小屋との関係も含めて堀外の調査も視野に入れてゆかなければならぬと考える。したがって本報告が中・近世史研究や文化財保護に対して歴史考古学からのささやかなアプローチである。

#### 引用・参考文献

- 愛知県史福山さん委員会考古部会 2007『愛知県史 別編 窯業2中世・近世窯戸系』愛知県
- 青木和明・市川監之・河西克彦 1994『栗田城跡(2)』長野市教委
- 浅野鈴一郎 2009『都市的スケール、都市計画的視点からみた善光寺とその門前町』『善光寺とその門前町』長野市教委
- 安藤裕ほか 1977『信州の焼き物』信濃毎日新聞社
- 池上裕子 1998『戦国期北信の武士と上杉氏の支配』『史料研究ながの』第5号 長野市公文書館
- 池田光雄ほか 1998『テーマ「障子堀」について』第15回全国城郭研究者セミナー実行委員会 中世城郭研究会
- 池田光雄 1999『障子堀について(発表要旨)』『中世城郭研究』第13号 中世城郭研究会
- 石田茂作 1975『V特論伽藍配置の研究』『新版考古学講座 第二巻寺院』雄山閣
- 市川監之 1994『栗田城出土の遺物と若干の考察』『栗田城跡(2)』長野市教委
- 市川監之 1997『中世の遺構と遺物』『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15-長野市内その3-石川条里遺跡 第1分冊』長野県埋蔵文化財センター
- 井上喜久男 1988『美濃陶磁器研究の現状』『考古学ジャーナル』No.297
- 井上喜久男 1992『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社
- 遠藤公洋 2009『善大城と長野県北部の城館遺跡一横堀遺跡に着目した再評価の視点』『市跡研究ながの』第16号 長野市公文書館
- 遠藤公洋 2013『若宮城』『善山城』『長野県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1992『近世における肥前陶器流通』『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 国立歴史民俗博物館
- 大橋康二 2000『九州陶磁概論』『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社
- 大橋康二ほか 2004-2008『古伊万里の見方』1~5 九州陶磁文化館
- 小川 輝 2001『鐵貨』『因説江戸考古学研究事典』柏書房
- 金子拓男 2003『至徳寺跡』『鎌輪にかけて』『上越市史叢書8考古一中・近世資料一』上越市
- 唐木田又三 1974『赤塙窯物語』『赤塙学校百年誌』
- 唐木田又三 1993『信州松代焼』信毎書籍出版センター
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小泉 弘 2001『奥美濃一堀管』『因説江戸考古学研究事典』柏書房
- 郷道哲章・白田武正 1983『長野県の中世城館跡―分布調査報告書―』長野県教委
- 河野通明 2009『福岡県の在来草一民具から見た6-7世紀の福岡県城-』『商経論叢』44巻第1・2合併号 神奈川大学経済学会
- 小林計一郎・矢野恒雄ほか 1980『三水村誌』三水村
- 小物義男 2012『第2章 遺跡の環境』『小野遺跡』飯綱町教委

- 小山丈夫 2000『戦国時代の太田荘』『豊野町の歴史一豊野町誌2』豊野町誌刊行委員会
- 小山丈夫 2007「コラム本札宿高辻の被害と富くじによる復興」『1847善光寺地震報告書』中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会
- 佐澤 浩・原田勝美・佐藤慶二ほか 1986『前高山癒跡群』牛込村教委
- 佐澤 浩・池田 隆・森 佳也 2003『芋川氏館跡発掘調査報告書』三水村教委
- 佐澤 浩・池田 隆・森 佳也 2004『田中下土浮遺跡・芋川氏館跡(第3次)発掘調査報告書』三水村教委
- 佐澤 浩・小柳義男・市村勝巳・中村由克 2012『小野遺跡』飯綱町教委
- 佐澤 浩・原田勝美・小柳義男 2014『表町遺跡』飯綱町教委
- 信濃史料刊行会 1953『信濃史料』第3巻 信濃史料刊行会
- 信濃史料刊行会 1969『信濃史料』補遺巻上 信濃史料刊行会
- 信濃史料刊行会 1976『新編信濃史料叢書』第14巻
- 田口昭二 1983『美濃焼』ニューライエンス社
- 田中曉穂 2014『栗田城跡(4)』長野市教委
- 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 2007『1847善光寺地震報告書』内閣府
- 中世城郭研究会 1999『中世城郭研究』第13号 中世城郭研究会
- 土本俊和ほか 2009『善光寺とその門前町の伝統的建造物』『善光寺とその門前町—善光寺周辺伝統的建造物群保存予定地区調査報告書』長野市教委
- 中島庄一 1993『中世土器皿』『高梨氏館跡』中野市教委
- 鶴巣康志 2003『至徳寺遺跡－中世後期以降』『上越市史叢書8考古－中・近世資料－』上越市
- 長野県 1936『長野県町村誌一北信編』(複製版 同1985郷土出版社)
- 西本正彦 2005『松代城下町出土陶磁器の様相』『松代城下町跡一中木町・西木町・糸屋町一』長野市教委
- 日本農業発達史調査会 1953『日本農業発達史』1巻 中央公論出版
- 原 明芳 1991『遺物』『栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)』長野市教委
- 藤沢良祐 1986『瀬戸大麻発掘調査報告』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 2007『総論—瀬戸大麻の時代』『愛知県史別編 中世・近世・瀬戸系 痞業2』愛知県
- 古川貞雄 1987『第二章第一節徳川政権の成立と信濃』『長野県史通史編近世一第四巻』長野県史刊行会
- 古川貞雄 2000『第三章第一節豊臣氏の支配から幕藩体制へ』『豊野町の歴史 豊野町誌2』豊野町誌刊行会
- 三橋時雄 1985『すき・堀・鞆 耕軒農具』『日本歴史大辞典』6 河出書房新社
- 翠川泰弘 2012『長野県千曲市屋代遺跡群馬口遺跡(8)』千曲市教委
- 宮田進一 1988『越中瀬戸の窯資料(1)』『大境』第12号 富山考古学会
- 牛込村教育委員会 1980『矢筒城館跡』牛込村教委
- 牛込村教育委員会 1988『矢筒城館跡(第2次発掘)』牛込村教委
- 矢野恒雄 1993『若宮城』『信州の山城』信毎書籍
- 湯本軍一 1987『第三章戦国の争乱と信濃 第一節応仁・文明期の信濃』『長野県史 通史編中世二 第三巻』長野県史刊行会
- 吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

表5 芦川氏館跡出土古代～近代土器・陶磁器観察表

番号	測量点番号	測量点名	測量点	断面・底面など		器種	形態	時期	径量(cm)			成形・文様・施釉などの特徴	土質	色調	残存率	備考
				口	底				高さ							
1	6	J11	復元移在地	HFC				9C	6.5			ロクロナガ 付け高台	硬	青灰	1/4	
2	27	149	J11	復元移在地	HFC				6.4			ロクロナガ 付け高台 余留	硬	青灰	1/4	
3	10	I11	15	HFC					5.3			ロクロナガ 付け高台 余留	瓦灰	暗灰	1/4	
4	13	K10	18	HFC					7.0			ロクロナガ 付け高台 余留	瓦灰	暗灰	1/4	
5	3	H09	17	HFC					6.0			ロクロナガ 付け高台 余留	石灰	瓦灰	1/3	
6	20	J11	20	復元移在地	壺				17.0			ロクロナガ	硬		1/10	
7	2	K12	14	土器群 黑色土器	环				16.0	7.0	5.1	ロクロナガ (内)ヨコタナヘラミ ガキ (底外) 泥付のち手待ちテグ リ	褐	1/4		
8	4	H10	22	土器群 黑色土器	环				15.0	7.5	5.0	ロクロナガ 口縁外側 (内)ヨコヘ ラミガキ (底)	褐	1/4	(外)ヘラ ミあり	
9	14	H09	2	土器群 黑色土器	环				15.2			ロクロナガ (内)ヨコタナヘラミ ガキ	硬	1/4		
10	5	K11	11	土器群 黑色土器	环				14.0	6.0	5.0	ロクロナガ (内)ヨコタナヘラミ ガキ (底) 手待ちテグリ (右)	真透石 瓦灰	暗灰	1/3	
11	7	L12	12	復元移在地	壺				15.4			ロクロナガ	瓦灰		1/6	
12	620	G11	2	復元移在地	壺				6.6			ロクロナガ 付け高台 内面ハケ	杏	灰白		
13	11	H11 H09-15	20	土器群 黑色土器	壺				8.0			ロクロナガ 緩減、余留	柔	素胎	19-30-21 等級合	
14	12	143	110	土器群 黑色土器	壺				8.6			ロクロナガ 頭部下一度中央先端持ち ケズリ 中央先端切欠 (内)テグリハ ラミガキ	石灰	素胎	1/3	
15	229	H11	14	土器群	小鉢蓋				13.2			ロクロナガ	硬			
16	228	H09 J10	20	土器群	大型壺							ロクロナガ (内)カキ目 口縁一体 型3ヨコナメハケ			1/10	
17	148	SD07	11	南移 沈器	小壺	丸形	I-II	8.0				透明釉		透灰	1/6	
18	122	SD07	11	南移 沈器	小壺	丸形	II	11.0				透明釉		透灰	1/10	
19	156	H11	SD07	11	南移 沈器	小壺	圓錐	II	13.0			透明釉、火痕		白灰	1/15	
20	141	H11	SD07	11	南移 沈器	小壺	丸形	II	12.3			火痕、外張		灰白	1/6	
21	819	SD07	11	南移 沈器	壺	圓錐	II	11.2				火痕、外張			1/6	
22	168	H10	SD07	11	南移 沈器	碗	反起	IV	11.0	4.4	10.0	透明釉、表面墨目文、荷葉落葉、ハマ、白 模様	滑	透	2/3	
23	103	H09	11	南移 沈器	碗	圓錐形	II-IV	14.2				透明釉	中や硬	灰灰	1/6	
24	116	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	II-IV	12.6				透明釉	中や硬	灰灰	1/6	織紋
25	102	K10	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	II-IV	11.2			透明釉	中や硬	灰灰	1/6	
26	104	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	II-IV	10.2				透明釉	中や硬	灰灰	1/6	
27	101-106	H11	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	II-IV	5.4			透明釉	中や硬	灰灰	1/6	
28	125-183	H11	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	IV	8.0			透明釉、底部見込みにハマ板	中や硬	透灰	1/4	
29	107	SD07	11	南移 沈器	碗	丸形	IV-IV'	8.2				透明釉		透灰		
30	94-235	SD07	11	南移 沈器付	碗	II	5.0					透明釉、荷台内輪脚、網目文	透	明灰色	1/6	
31	88	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	IV	9.6				透明釉、外周青緑色縞、西方擇文、内面 透明釉	白灰		1/6	
32	99-211	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V	10.0	4.0	5.1	透明釉、荷台内輪脚、草文文、白毫ある人物面 模様、西方擇文、文字	白灰		2/3		
33	136-222	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V	10.4	4.2	5.0	透明釉、吳承、柳葉文	密	白灰	1/3		
34	85-2	J07-08	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V				透明釉、吳承、柳葉文	中や硬	透灰	1/12	
35	85	J08	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V				透明釉、吳承、2面織紋	中や硬	透灰	1/12	織紋
36	629	H09	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	IV	10.8			透明釉、吳承、2面織紋、草花文	中や硬	灰	1/6	平井ある はいは生 底足
37	72-189	H09	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V	5.0			透明釉、吳承、草花文、付竹脚模様	中や硬	灰灰	1/4	
38	97	E08	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V	4.4			透明釉、付竹脚模様	中や硬	灰灰	1/5	
39	118-221	E09	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	IV	12.2			透明釉	中や硬	灰	1/6	
40	149	SD07	11	南移 沈器付	香炉	Y						模様(口縁内輪脚模様)	密	白	1/10	
41	132	SD07	11	南移 沈器付	香炉	Y						模様(口縁内輪脚模様)、直脚、茎脚	密	白	1/6	
42	143	J09	SD07	11	南移 沈器付	香炉	Y	8.4	7.4	6.7	口縁内輪脚模様、口縁高台子窓大、茎 脚脚頭下厚まで	密	白灰	1/2		
43	192-212	E09-10	SD07	11	南移 沈器付	碗	丸形	V	10.4	4.4	2.8	つまみ足2面織紋、足底水波文(?)、 模様(口縁内輪脚模様)、足底ハムナビ(?)、 模様、枝脚文	中や硬	1/2	あるいは 豆か、春脚 付竹脚 長いから 蓋とした	
44	137-220	I10	SK07	11	南移 地方窓	土瓶	近代	8.4				透明釉、枝脚文	中や硬	灰	1/6	
45	150	I09-10	SD07	11	南移 京焼	茶碗	18世紀- 19世紀		4.4			透明釉、高台ケズリ出し(ジヤーブ)	中や硬	黄灰	1/8	109-10 年 合計
46	159	I09-10 H10	SD07	11	南移 安政	碗	18世紀-19世 紀		3.6			ケズリ出し高台ケズリ、明暗-灰色の 地に白・銀線脚込み乳白色地	中や硬	灰	1/3	織紋
47	105	SD07	11	南移 沈川-奥焼	盃形皿	3			3.0			ケズリ出し高台、底脚	中や硬	3/4	織紋	
48	615	I08	SD07	11	南移 花青系銀	碗	15世紀- 16世紀		8.0			口縁内輪脚模様、草文(?)	密	白	1/6	
49	130	H11	SD07	11	南移 地方面	什件		18世紀- 19世紀	5.4			ロクロナガ、口縁内輪ニビナガ、找物 口縁内輪脚模様			1/3	H01-12+ SD07 合計

番号	測量等	平地等	出土地点		概要-遺跡など	種類	形態	時期	出土(cm)			成形・文様・施漆などの特徴	出土	色調	埋葬年	備考
			グリッド	遺跡名					口幅	底幅	厚さ					
50	127	H20-11 G11	SD07	11 海苔 沼前奈波風	焼利			18cm		7.5		圓筒内面堅快の太引き底、肩下手一 走査脚ケズリ、施漆物	青	白灰	青 1/3	H20-11 G11 有蓋&足 鋸切
51	114	J08他	SD07	11 海苔 地方窓	焼利			18cm~ 19c		6.0		ロクロ			灰赤	1/4 4/5
52	188	240	I08	SX31	11 海苔 沼前	鉢	Ⅲ	18.3				透明釉	青	白灰	1/8	
53	113	234	I09	SD07	11 海苔 足廻	鉢	Ⅲ	20.0				灰筒内裏、底厚し(花文文、白土刷毛 きと三瓣手)	青	灰赤	1/4 1/5	織部
54	142	H11	SD07	11 海苔 沼前	鉢	Ⅲ							今板	白灰		
55	147	J09	SD07	11 海苔 沼前海舟	輪花皿	IV	14.7	4.5	7.4			透明釉、足とふにコニニケイ印有 (左印)、透明釉、右印	青	白灰	1/2	
56	161	H11	SD07	11 海苔 沼前	鉢	II						透明釉、乳白と中央の足と脚刷毛の ちと土刷毛り、施漆物	今板	赤	1/5	
57	160	J08	SD07	11 海苔 沼前海舟	皿	IV						見込み、草文文、圓輪	青	白灰	1/5	
58	184	H11	SD07	11 海苔 沼前	盤?	Ⅲ	~					灰筒内中裏、灰筒(食器輪)	根	灰赤	1/5	
59	110	E06	H10	SD07	11 海苔 地方窓	盤	18cm~19c					底脚ケズリ出「巻物底」、輪脚乳込 ふに水引(底脚のコブ、施漆物)	根	灰赤	1/2	
60	87	H08	SD07	11 土師器								口縁ロクナギ、内裏に水口目	青	赤	外観判定	
61	46	J10	SD07	11 土師器	内耳鍋							ロクナギ(丁寧)、口縁直角切欠 内裏タマラヘラテ(丁寧)、(5)底脚、 (5)足	昭和	1/5	外観判定	
62	61	206	I10	SX32	11 土師器	内耳鍋						ロクナギ、輪脚ローリー、内小盤、寸 子	昭和	外観判定		
63	54	H10	SD07	11 土師器	内耳鍋							ロクナギ(丁寧)、口縁外側直角切 欠	白灰	白灰	1/2	外観判定
64	55		SD07	11 土師器								口ロクナギ(丁寧)、輪脚ターナー、(内) 底脚	昭和	1/2	外観判定	
65	56		SD07	11 土師器								ロクナギ(丁寧)、輪脚ターナー、(内)タヘ ナラギ	青	赤	1/6	輪脚
66	28	245	SD07	11 海苔 地方窓	盤体		18cm~			13.5		圓筒外切	輪脚、施萩 片		1/5	
67	31	E07-08	SD07	11 海苔 地方窓	盤体		18cm~			10.4		圓筒内切	石灰、白板刷		1/5	
68	55	H10	SD07	11 土師器	内耳鍋							口筒内裏直筒、丁寧なロクナギ 輪脚、(外)底脚でなく、(内)底脚。( 内)底脚	青	白灰	1/5	
69	44	K10	SD07	11 土師器	内耳鍋							ロクナギ(丁寧)、底脚ターナー、(内) 底脚	昭和	1/2	輪脚	
70	43	H10	SD07	11 土師器	内耳鍋							ロクナギ、底脚内裏オキニエ、(内) 底脚	赤	昭和		
71	64	223	I09	SD07	11 土師器	内耳鍋						底筒内裏にクロナギ、底脚穿孔、 底脚外側穿孔	赤少	昭和		
72	29		SD07	11 海苔 地方窓	盤体							ロクナギ、水引、腹壁、輪脚、施漆物、 (内)底脚	今板	灰赤	1/5	
73	32	198	H08	SD07	11 海苔 地方窓	盤体						底筒口斜切、上面にロクナギ(底脚 (内)底脚)	今板	灰赤	1/5	
74	35	J08	SD07	11 海苔 地方窓	盤体							上部上口ロクナギで括去、(内)底 脚	灰赤	1/5		
75	30	J08	SD07	11 盤体						12		手切+模印 無輪	見 赤	青	1/5	
76	632	J12	SD07	11 便所-溝端	盤	V						タキシ 由良真	古色較少灰青	青		
77	40	217	SD07	11 便所-溝端	盤	IV						タキシ 由良真	白较少	青		
78	630	L12	SX32	海苔 沼前	盤体	III						口筒部斜削り、直筒口斜切、横口(4 本)斜切、右側	根 墨色土	赤		
79	22	N10	P54	海苔 沼前?	小皿							底筒(底ふのみ)	赤	白灰	2/5	
80	156	SX18	海苔 沼前海舟	皿	V	(14.0)						草文文	赤	白灰	1/5	
81	157	344	SX18	海苔 地方窓	小皿	18cm	18cm	7.4	4.7	5.3		铁鍍錫鏡、高合物なし	今板	白灰	1/5	
82	34	345	SX18	海苔 地方窓	盤體							16.4		青	1/4	
83	195	370	SX18	海苔 常滑	茶碗	18cm以降	4.5	4.5	19.0	2.5	ロクロ底亞 底部画面「さ」	根	黄青	2/3	鐵鍍(内外 面)	
84	163	355	SX18	海苔-先端	浅碟		18cm後半 以後	6.0	4.0	4.0		底部無脚手切	赤	白灰	第一 脚少	
85	81	I12	SX16	土師器	内耳鍋							ロクナギ、脚部外側灰化土、 器身合	昭和一次 外腹	根	1/10	
86	33	I12	SX16	海苔 地方窓	盤体							脚部(内外腹)	根	昭和		
87	644	206	I10	SX34	海苔 沼前-溝端	小耳(指 口)	粗面形	18cm以降	6.0	3.0	4.1	見込み?「金合葉製」 鉛使用 外腹 器身脚部無脚手	根	白灰	1/2	昭和 高合
88	125		SD07	海苔 沼前海舟	小皿	IV						赤	白灰	1/5		
89	121	148	J11	SX32	中正海舟	天目	18~19c					ロクナギ、脚手(手)ケズリ 施漆	青	青灰	1/4	
90	630	L11	SA05 屋刀73	海苔 地中腰	小皿							施漆ケズリ由利合	明	明	1/5	腰方土
91	628	K09	P46	海苔-糞便 大皿	埋瓦							灰(骨才 リゲード)	灰	青	1/3	
92	186	M12 L12	2	磯器 炙鉢	小碗		18cm以降			3.0		赤+黒、撒青、青海文			1/4	藍點不明
93	126	M10	2	磯器 海苔	碗?	笠形	18cm以降			12.4		口端(内)施漆、裏青	青	白灰	1/5	
94	193	L11	2	古磯 海苔	碗	丸形	18cm~19c			10.0			青	白灰	1/5	腰青 青のいの 腰青
95	186	M12	2	海苔 沼前	皿							疊青釉、白化粧土	根	白灰 (青)	堆存	
96	170	M09	2	海苔 地方窓付	碗	丸形	18cm以降	10.0	4.0	5.2	脚部下手、高台に直面脚、青竹脚筋	青	灰			
97	81	N08-09	4-2	海苔 沼前海舟	碗	腰形	7.7					四方傳火、草文文				
98	624	K12	2	海苔 沼前海舟	碗	腰形	7.7					10.0			1/5	
99	75	M11	4-2	海苔 沼前海舟	碗	腰形	7.7					2重腰青、草文文			1/4	
100	180	K10	4	海苔 沼前	小皿	II						灰脚筋	今板	灰赤		

器種	器形	年 代	出土地点		断面	地層	時期	施設(cm)	式部・文書・施設などの特徴	粘土	色調	残存率	備考		
			グリッド	遺物名											
101	194	M09 -10	4-2	南都 舞阪・奥須 (?)	弘徳真(?)			18cm~19cm	6.0	(内外)鉄錐	やや板	暗青	1/3		
102	153	M12	4-2	南都 舞阪	鉢	II前	18.0		透明・ワラ灰釉	青	灰白	1/5	移動式蓄水池 (L1.1)28.7		
103	609	K11	4-2	南都 肥前	擂鉢	III			鉢物				暗青	1/12	
104	36	M11	4-2	南都 地方窯	擂鉢				鉢物						
105	66	M12	4-2	土師器	火鉢				ロクロナガ・腹部外巻き上底 (内) ニビナガシタケ・タガキ付	板	青褐				
106	62	M09	4-2	土師器	火鉢			23.4							
107	134	K10	4	南都 地方窯	小擂鉢(?)		18cm~ 19cm	3.2	灰釉剥け 底部ケズり出し	板	にれい青黄	1/3			
108	190	L10	4-2	南都 肥前	碗		1~2	2.8	灰物 底部ケズり出し+比較 善光	灰青	暗青				
109	131	K10	4	南都 肥前	碗		?	8.5	鉢物 無切+ケズリ ロクロ	石英少	にれい青 青	2/3			
110	610	K08	14	南都 舞阪	小碗	丸形	1~2		灰釉剥け						
111	645	K11	14	南都 舞阪・奥須 肥前	小碗		1		鉢物・灰釉剥け	やや板	暗灰青				
112	95	247	K10	14	南都 肥前	小碗	I	4.5	網附下一日面ケズり(右) 底部ケ ズり出し+灰釉剥け	やや板石英板	にれい青黄 青	3/4			
113	622	M11	2	南都 肥前	小豆	丸形	I		灰物		白灰 (青黄)		細片 青灰 灰化		
114	23	145	K11	24	南都 肥前	小豆	無反	1~2	10.8	灰物		灰青			
115	618	M13	24	南都 肥前	小豆	無反	II	12.8	灰物	青	灰白	1/12			
116	144	K11	14~2	南都 肥前	小豆	無反	I	11.8	4.0	灰釉剥け、跡土子(3箇所)折下皿板 ケズリ+底ケズリ出	石英少	にれい青 青	2/3		
117	17	L09	24	南都 舞阪・奥須 肥前	小豆	糊灰	2	10.6	5.6	灰物		白灰	1/2		
118	19	K08	14	南都 舞阪・奥須 肥前	小豆	糊反	2	10.2	5.5	灰物		灰青			
119	624	K10	14~2	南都 舞阪	擂鉢				10.0	底部剥け、底部ケズリ+底 ケズリ+底ケズリ出	石英少	白灰 (青黄)	1/6		
120	256	M09	2	南都 舞阪・奥須 肥前(近世)	丸豆		1	11.4		灰石物	やや板	白灰	1/6		
121	256	M13	24	南都 舞阪・奥須 肥前(近世)	丸豆		1	8.0		灰石物	やや板	白灰	1/6		
122	620	M13	4~2	南都 京阪	鉢		18cm			透明物、山水(模倣)		白灰(青 中に黄)			
123	16	K08	14~2	南都 肥前	小豆	糊様	II	12.4	3.4	灰釉剥け 砂目(近世)底面に砂付 ケズリ出し 見込みに比較	灰	1/2			
124	612	M11~12	4~2	南都 肥前	擂鉢	*	II	11.4	3.7	灰物 壁付鉢	白灰	1/3			
125	129	L09~10	24	南都 肥前白磁	手盤瓦		II	9.2	3.6	28.8 手 目物剥ぎ+灰被 砂下平 底付			1/3		
126	36	K10	19	高須屋 沖洲	盤		II'			ロクロナガ 平手タキ (内)白具 灰	白粉少	青灰			
127	167	トレンチ ?	4	南都 舞阪・奥須 肥前	灰陶瓶		3	9.2		灰物	やや板	灰白	1/5		
128	154	111	4	南都 肥前	小豆	H~H'	9.2		透明物	やや板	黄灰	1/4	細片 青灰 灰化		
129	92	H11	2	南都 肥前	小豆	V		3.8	透明物 ケズリ出し薄青	青物	白灰	1/4			
130	108	H08	2	南都 肥前	小豆	H~H'	4.6		透明物 蓋付瓶	やや板	黄灰	1/3			
131	182	H09	2	南都 肥前	瓶	H~H'	4.8		透明(白土)蓋付瓶	やや板	青				
132	91	H10	4	南都 肥前金付	小豆	V	9.4	34.5	SD. 有竹利賀子、梅瓶、梅竹文、蓋合内草 木	青	灰	1/2			
133	93	H11	4	南都 肥前金付	小豆	V	9.4		梅梅瓶	青	白灰	2/3			
134	188	H11	4	南都 地方窯	碗			6.5	透明物、ケズリ出し高見、見込み物/ノ リ	青	にれい青 青	1/2	底部打 大きさ (?)		
135	48	H11	4	南都 舞阪西周	碗	V	5.5		青物 草花文、蓋付物剥ぎ、透明物 (底)	やや板	にれい青 青	2/3			
136	135	N11	4~2	南都 肥前金付	瓶		7.0		灰色 透明物 蓋付瓶 見込みに缺損 +白色(底)	青	白灰	1/3			
137	88	H11	4	高須 肥前金付 (?)	火入れ(春形)	V	12.0		青灰 透明物 壁付 瓶形文(?)	やや板	灰	1/4			
138	166	J08	4	南都 肥前金付	香炉	II'	9.8		黒縁 玉花文(?) 灰灰	青	灰	1/6			
139	169	J10	4	南都 地方窯	香炉			10.0	透明物、片端一辺縁に灰灰 腹下 灰灰、内面執筆(口 底・見込み)	やや板	にれい青 青	1/3			
140	138	J10	4	南都 舞阪青磁	香炉	V	9.2	9.0	7.0 三足 かけ高台・物剥ぎ 灰灰	青	白灰	1/5			
141	117	H11	4	南都 地方窯	壺型皿	18cm~19cm	16.0	8.0	4.1 三足 かけ高台・露胎 外葉・内葉 見込みに缺損 +灰灰	やや板	灰	1/3			
142	87	H11	2	南都 肥前金付	皿	II'	14.2	7.4	3.6 透明 玉花文	青	白灰	1/2			
143	102	H10	4	墓地不明	磨付			13.2	8.2	青灰 玉花文、見込み草文 2重蓋 縁付磨付	青	灰白		4.3と同一 器形	
144	191	J08	3	南都 肥前金付	皿	V	4.6		青灰 玉花文、見込み草文 2重蓋 縁付磨付	青	灰白				
145	174	H11	4	南都 肥前金付	小豆	II'	12.8		青灰 (外)玉花文 (内)草花文	青	灰灰	1/4			
146	175	H11	4	南都 肥前金付	小豆	II'	12.0		青灰 (内)磨付	青	灰灰	1/6			
147	183	H11	4	南都 舞阪	瓶			9.4		透明物(?)	青	灰灰	1/4		
148	605	トレンチ ?	4	南都 舞阪・奥須 肥前	瓶	3	5.6	1.0	青灰 玉花文	やや板	白灰 (青黄)	1/2			
149	606	H11	4	南都 肥前青磁	瓶			3.6		青灰	灰白	1/4			

留年	種類	草木等	出土地点		鉱脈・露頭など	部位	形態	時期	寸法(cm)		成形・文様・転写などの特徴	胎土	色調	墨年	備考	
			グリッド	遺跡名					口径	盤高						
150	181		J10	2	陶器 亂地不規	蓋			10.0	1.6	(%)灰釉 白土	白	に点付 黄	1/2		
151	196	O09	3	陶器 亂地不規				19~20c	6.8	0.9	(外)透明白	白	(青黄)	1/3		
152	171	L09	1	鐵器 茶葉輪付	小瓶		N		4.6		直徑 花文、高台内不規 文様不規	白				
153	197	L09	1	陶器 亂地不規	水注			19~20c	6.5		(内)透明白	白灰	(青灰)	1/3		
154	614	H12	12	陶器 地方窓	片口鉢			18c~19c	22.0		輪底 白色釉樹毛盛り	中や灰	灰白	1/6		
155	109	H11	4	陶器 地方窓	こね井			18c~19c	10.9		透明釉 玉縁	中や灰	灰白	1/6		
156	631	H20	2	陶器 亂地	こね井			18c後半~20c前半	16.0		灰釉 玉縁	白灰	透明白	1/10	試掘	
157	632	H10	2	陶器 亂地(松代)	こね井			18c後半~20c前半			灰釉 玉縁	白灰	透明白			
158	118	H08	2	陶器 亂地(松代)	こね井			18c後半~20c前半			灰釉 玉縁	白灰	透明白			
159	24	H11	12	陶器 地方窓	蓋(膨乳)			18c後半~20c前半	5.5		底部向左上傾斜 ロクロナデ(裏) リニアコロナデ(外) 黄白色	赤褐		2/3		
160	128	J09	12	陶器 地方窓					3.4		ロクロナデ 両側(内)黄白色	褐		2/3		
161	169	J11	4	陶器 地方窓	蓋				5.2		ロクロナデ 両側(外) 略斜	中や灰	暗灰	2/3		
162	111	H08	4	陶器 地方窓	蓋				3.6		ロクロナデ 両側(内) 略斜	中や灰	灰	1/3		
163	37	J10	2	陶器 地方窓	蓋(片口)			19c~	30.0		ロクロナデ 裏面(タシ12mm) 口縁 内外斜面	褐	暗赤褐			
164	38	J10	4	陶器 地方窓	錐体			19c以降	12.0		裏面(タシ1~15mm)、区画反時計回り 亂文 未切 ロクロナデ	褐	に点付	3/4		
165	227	Z	2	土器群	地塔				25.0	21.8	5.0 リヨロナデ 裏部内斜板豆足	石青	碧	暗灰	1/6	
166	60	H11	4	土器群	地塔				34.0		ロクロナデ 成形外面ヘラナデ(?)	石美多	暗青	1/3		
167	65	J11-H10	4	土器群	(?)						底部内斜ヘラナデ 沈底素脊孔(風穴状き)				網目あり、 底部は焼 物跡に似 似	
168	68	254	J11	4	土器群	地塔					裏下方に沈底前脊孔 ロクロナデ(外) リニアコロナデ(内)	石青など				
169	70	M09	4~2	土器群	火鉢						裏下部 おもらく火鉢	石青など				
170	57	N10	4~2	土器群	地塔						ロクロナデ(内) 背耳は付け (外)膨乳	石青など	稍青	1/12		
171	58	J11	12	土器群	地塔						ロクロナデ+ミナデ	高風石美多	暗青			
172	601	J09	4	土器群	火鉢						口縁にないしの背耳+仲ち中央に刃形の火入れ痕があると足部前の火鉢底 部が穿孔化あり 補足器 成形火鉢	石青など	暗青			
173	74	J10	2	土器群	後炉(?)						上部に刃形の火がある 頂部少なく 脇部は火印跡が多く、更に瓶狀片 がある(20~25 K15 H10)	青素鐵	青青		盤の付着 されな い	
174	106	J09	14	陶器 巴背	瓶	新彌形	E~H	11.4								
175	177	E09	14	陶器 巴背	瓶	新彌形	V	9.0			透明白	中や灰	淡青	1/4		
176	140	E07	14	陶器 巴背	瓶	新彌形	V		5.2	透明白	中や灰	淡青	1/5			
177	178	H12	14	陶器 巴背付	瓶	新彌形	N	10.2		透明白	中や灰	淡青	1/6			
178	90	H12	14	陶器 巴背付	瓶	丸形	V	11.0		透明白	中や灰	淡青	1/12			
179	45	J10	14	陶器 巴背付	瓶	新彌形	V	11.2	4.2	4.4 方背火 瓶底 白土 透明白 瓶 外側斜面	中や灰	白灰	1/3	横手H10 +H12 +H13 +L11		
180	47	H12	14	陶器 巴背付	瓶	新彌形	V	11.0	4.8	7.3 四方膨大 瓶身(?)	中や灰	白灰	1/3			
181	69	H12	14	陶器 巴背付	瓶	新彌形	V	11.0		四方膨大 透明白 瓶身	中や灰	白灰	1/3			
182	176	H11	12	陶器 巴背付	瓶口	椭形	F~V	7.8		透明白 瓶身(?)	中や灰	白灰	1/7			
183	63	J11-H12	12	陶器 巴背付	小瓶		V		13.6	7.6	33.ニャコナデ(透明白火) 背にはじま文 (内)透明白火(?)	白	白灰	3/4 SX18と 同一整体		
184	172	H10	4	陶器 巴背付	春炉		X	9.0		透明白 瓶身(?)	中や灰	白灰	1/8 H12-M9			
185	173	H12	19	陶器 巴背付	春炉		X	8.8		横文 (内)口底下まで透明白	中や灰	白灰	1/10			
186	49	J11	19	土器群	内寫瓶				31.2				青素鐵	青青	1/10	
187															欠番	
188	145	201	J11	15	陶器 巴背	瓶	丸形	I or II		4.6	断面下半・内面黒斑流しがけ 瓶 内面斜面ケシリ 瓶台内ヒンナ	中や灰	に点付 褐 灰白	2/3		
189	139	J10	15	陶器 巴背付	瓶	新彌形	V		12.6		透明白	中や灰	白灰	1/5		
190	623	J09	15	陶器 巴背付	春炉		Y~V		10.6		外延長透明白 瓶身口縁下まで透 明白 瓶身	中や灰		1/7		
191	164	J12	15	陶器 巴背付	皿		V				伝承透明白(外) 文章文(内)ぶどう 草花文	中や灰	白灰	1/12		
192	119	J12	4	陶器 巴背二重手	瓶		Y		15.0	6.4	(外)透明白 (内)新彌形 透明白(瓶 底) 亂文 人形ノゾム 蔵物足	中や灰	透明白	1/5	(内)舞山北 山	
193	112	J09	4	陶器 巴背	小皿			18c~19c	13.0		透明白 瓶身(?)	中や灰	白灰	1/5		
194	96	J10	4	陶器 巴背付	大皿		Y以降		17.0		透明白 瓶身 亂文にコニヤク 人形ノゾム 蔵物足にハリタマ	中や灰	白灰	1/10		
195	625	J09	4	陶器 巴背	皿		Y		18.6		透明白	中や灰	白灰	1/12		
196	163	J12	4	陶器 巴背付	瓶		Y(前)		18.0		透明白 (内)透明白	中や灰	透明白	1/5		
197	98	J08	19	陶器 巴背	小瓶	新彌形	Y~H		12.2		透明白	中や灰	白灰	1/4		

測量年	測量者	測量年	出土地点		標高	地形	時期	地質(cm)			成形・文様・施薬などの特徴	地土	色調	含水率	備考			
			グリッド	遺物名				厚さ	日 経	夜 経	積 高							
198	26	H11	12	陶器 肥前(灰陶コピ)	小皿	圓錐形	Ⅲ		5.0			圓錐形 端付斜削ぎ シャツ	砂	黄灰	1/6			
199	18		19	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ	13.7	4.2	3.8		アラベスク(2面削) 端付斜削 ケ	砂	東灰	2/3			
200	152	J11	19	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ		11.8			造形的(丸込み~端部)		灰白	1/6			
201	627	J10	18	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ					圓錐形		灰	1/16			
202	145	J09	17	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ		13.0			圓錐形		灰	1/10			
203	626	J11	17	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ		11.2			灰白		灰白	1/12 既に2面削 化			
204	617	J11	17	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ		11.2			灰白			1/7			
205	83	J10	19	陶器 肥前	小皿	圓錐	Ⅲ		12.0			灰白		暗灰白	1/6			
206	621	J09	19	陶器 肥前	小皿	丸形	I-II	11.4				草木灰灰白		灰	1/12			
207	616	J10	19	陶器 肥前	皿		Ⅲ		4.8			灰白抜け 底部ケズリ出し 番目		灰黑	1/6			
208	608	J09	—	陶器 肥前白磁	平底皿	丸形	Ⅲ	9.0				圓錐形		白灰	1/6 13番?			
209	607	H10	15+	陶器 唐戸・美濃 肥前	火鉢			3	11.0			側面		やや灰	白灰	1/6		
210	130	J09	19	陶器 唐戸・美濃 大皿	火皿			2	11.8	4.4	5.6	側面 ケズリ出し鉢 / 目高台 シャツ 底下半面削ケズリ		にれい(黄 灰)	2/3			
211	21	H08-09	17	陶器 唐戸・美濃 大皿	小皿	圓錐	2	10.4	6.0	2.2		側面		やや灰	灰白	1/4		
212	611	J11	17	陶器 唐戸・美濃 大皿	九重		1	11.8				黄石釉		やや灰	灰白	1/4		
213	122	J10	17	陶器 唐戸・美濃 大皿	九重		1	12.0				黄石釉		やや灰	白灰	1/5		
214	124	J10	17	陶器 唐戸・美濃 大皿	九重		1	12.0				黄石釉		やや灰	白灰	1/4		
215	151	J10	20	中國青磁 青磁底	碗				5.2			青磁を帶 びた灰			1/8			
216	146	J10	17	中国青磁(青磁)	皿		12c	10.2				印花文	雷	白灰	1/4			
217	15	H10	21	土加器	皿(カワラ ケ)			9.6	6.3	2.4	ロクロナデ 糸切	A	明治白	1/3				
218	9	166	J11	22	土加器	皿(カワラ ケ)			9.2	6.2	2.5	ロクロナデ 糸切	B	明治白 石高少	洪素白	1/2		
219	1	H11	20	土加器	皿(カワラ ケ)			7.2	5.0	1.9	ロクロナデ 糸切	C	明治白 石高少	明治白	完			
220	8	J01	22	土加器	皿(カワラ ケ)			11.3	6.1	3.0	ロクロナデ 異込みナデ 糸切	A	明治白	完 脚丁手半 (横切)				
221	257	J10	20	土加器	坪		古代灰	11.0			ロクロナデ		異色など無	明治	1/8			
222	254	J10	20	土加器	皿(カワラ ケ)			7.4			ロクロナデ	A		1/8				
223	258	J10	21	土加器	皿(カワラ ケ)				5.8			ロクロナデ 底下半ヒビオサエナナ (手付)	C	灰	1/5			
224	252	J10	19	便器器	壺		V					タキ(?) ニビナデ		底色を帶 びた灰色				
225	225	J11	19	土加器	内耳鍋				26.0	26.0	12.5	ロクロナデ 底下半ヒビオサエナナ (手付) 多	D	西番-高麗石 瓦など少	暗褐色	1/5	脚土跡	
226	226	J11	19	土加器	内耳鍋				33.8	25.6	11.8	ロクロナデ 底下半ヒビオサエナナ (手付) 多	E	西番	1/5			
227	42	J09	19	土加器	内耳鍋					24.0			ロクロナデ 脇下半 内外カキ目 (手付) 脇下半に巻き上り模様 オ ホエ	F	西番	1/6		

表6 遺構・層位別やきもの集計（観察表集録のみ）

	肥前							鹿戸・美濃					當清	萩	京	地中廻面	地方面	在地		備考			
								大窯			登窯 (追房式)								Ⅲ				
	I	I-2	II	III	IV	V	VI	VII	不明	1	2	3	4	1	2~	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ			
2-3					2	1	2												4	1	不明1		
4			1	2	1	5	6	2							2	1	8	4	1	不明2			
12~15	1	1	2	2	1	3	9			1					1		3	1					
SD07	1	3	5	6	8	9	1								1	1	1	9	2	9	1	不明1	
SD11			1		1	1									2	1			4	2	1		
廃棄土坑																							
小計	1	2	6	10	10	18	27	3	1		1	5	1	1	2		28	2	17	2	4		
14-2	1		1															1					
17		3							1		3										1		
19	1	5	1						1	1								2	4		2		
20																			2		1		
21																				2			
22																				2			
小計	1	1	9		1					2	1	3					1	2	6	4	2		
1						1																不明1	
2-3	1			1	1						2	2					1		1		1	不明1	
SX29																							
4-2	1		3		3	1				1		1			1	1	1	1		4			
24	1	1	1														1						
P46 P54																							
SA05																							
小計	1	2	1	5	5	2	2			3	3				1	1	2		5	2			
計	3	5	16	15	11	23	27	5		5	1	7	8	1	1	3	2	30	4	6	26	4	6

表7 芹川氏館跡出土瓦類表

監査番号	監査番号	取扱番号	出土地点		遺物名	型式	残存率	法量(cm)				成形・文様などの特徴				備考		
			グリッド	遺構名				長径	短径	厚さ	臺							
1	(参考資料)				模瓦					25.0	4.4	妙福寺境内 桅・唐草文 面使用	現代					
					軒先平瓦													
2		Z			模瓦					4.2		樋・唐草文						
3		J09	2		模瓦					4.0		タテヘラケズリ 頭下端ヨコナダ 唐草文						
4		N12	2		模瓦					4.2		タテヘラミガキ ヨコナダ 唐草文	第1赤ソブ底下					
5		L08-09	3		模瓦							ヨコナダ 唐草文						
6	210	I09-10	SX32		鰐斗瓦			1.8				軒穴 左端に成形時の沈線						
7	221	220	H10	2	丸瓦			1.6				縦キリ(内)ヘラナダ 捩付着						
8	350	111	SX18		軒先丸瓦			1.3				瓦当面欠 キリ 接合(タテハケ)						
9	204	H08			丸瓦			1.8				(外)タテヘラナダ 端部ケズリ						
10	364	II1	SX18		丸瓦			1.1				(外)タテヘラミガキ (内)ユビナダ 増脚キリ						
11	207	I09-10	SX32		鰐斗瓦			2.0				全面ヘラナダ 左肩に軒穴	3点接合					
12	241				鰐斗瓦													
13		228	II0	SX32	鬼瓦(?)							鬼瓦の一部か 4条の底線による溝 端文 接合痕						
14	220	202	H09	SX32	鬼瓦(?)							12と同一個体 粘土塊に指頭による オサ工痕						
	216	II0			模瓦											4点接合		
15-	223	366	II1-12	SX18	平瓦													
16	224	358			不明							不明 断面1/4円形						
													大様・下り様に開 係したものの 裏に円孔(径13.4) 各部品組合せ 器面ヘラナダ					

表8 芋川氏館跡出土石器・石製品観察表

器 種 名	基 準 基 準	出土地点	遺 物 名	形 式	残存率	石 材	估量(cm. g)				属性
							長径	短径	器高 (厚さ)	重量	
1		I09	4 打製石斧	先端	TS	10.7	4.8	2.0	126	正尖兩側調整 斧頭一方向削離 先端刃用痕 残端 上端磨耗痕	
2	246	L12-13 SX34	石刀		Sa	12.5	5.8	4.0	450	新正尖角形の川原石利用 両端に敲打痕 側面に付着痕(炭化物)	
3	237	G11	4 石鉤		And3	31.0				敲打底部 内面使用により磨耗 底部欠	
4	235	I09	18 石鉤		And3					敲打・ケズリ成形 底径16.7 口縫部欠	
5	233	N09 SD10	石鉤	1/3	And3	12.0		7.2		三足・脚部 底径10.2	
6	236 307	SD05	石鉤		And3	11.6					
7	234	Z	凹石	略完	And1	11.4	11.0	5.4	1,110	平面円形 断面丸長い方形の自然砾一部加工 中央・口部 底部平幅敲打	
8	244 354	I11 SX18	砾石			9.0		5.8	1,320	自然砾磨 全面磨滅	
9	238	J10	4 砾石	C	And1		11.0	9.5		長方体、自然石利用 下平オレ・3面研磨 上面に切り出し跡の切削痕 四石兼用 下端レ	
10	249 373	I11 SX18	砾石	A	GT	5.7	2.7	2.1	71	拂擦痕、下面使用 1面使用面数少 縦・横使用痕	
11	240	M12 SX22	砾石	C	先	Sa	20.3	9.6	7.9	2,700	六角柱体 各面利用 両端敲打 敲石兼用 研ぎ面に使用痕
12	239	N09 SX44	4 砾石	C	GT			10.2	7.2	下端レ 上端研削(キリ) 長方柱 4面研ぎ痕	
13	241 195	H11 SD07	砾石	A	Sa		5.2	2.8		板状長方体上端オレ 下端と側面に切削痕研究用	
14	80	I10	4 砾石	B	Sa					両端レ 宽底用 側面に切削痕 兩面に使用痕	
15	243 367	I11 SX18	石硯		Si		7.7	1.5		長方鏡、背(裏)が圓形 側面キリ+ミガキ 背と側面の角は取り落し 海(底)背 下端欠 暈堂(輪)使用により曲面	
16	76	J09	3 石硯		Sh		7.9	2.3		海盤鏡一部欠 側面ミガキ	
17	78	L11	1 石硯		SCH					海の一部存 背欠	
18	259	J09	4 石硯	1/3	Sh		2.5			海から壁の飛沫 背一部欠 緑幅 0.3cm	
19	79	H11	2 石盤片		1/5	GT		1.1		角欠取り 側邊切削痕	
20	77	M09	2 石盤片		SCH					海盤鏡片 海部欠 角面取り	
21	245 353	I12 SX18	石盤片		Si					側邊欠落 測量片 估字状の継刻	
22	84 37	H11	2 石盤片		SCH					側邊欠片 背部が残ケズリ痕 後端欠 側面め切削痕	
23		M09	2 石盤		Si					海盤鏡のみ絆片 繰り込組角 背面欠	
24		J11	2 石盤		PA	5.2		0.5	2.6	タテミガキ 下端ナメナミに研磨	
25		H09	2 石盤		PA	4.2		0.5	2.7	タテミガキ 下端ケズリ	
26	242	I10	4 風石(?)		And1	16.0	15.2	5.7	2,000	平面形で板状の自然砾 表面に網織痕 全面磨滅 全面に炭化物付着	
27	230 153	I10	20 五輪塔 空風船		And3	空 18.5	風 17.0	23.3	7,700	空筒形ナメハツリ+研磨(一部) 風船形ナメハツリ+研磨(一部) 暈堂痕? 底径4.6 精打四枚	
28	232 239	H08 SX31	五輪塔 空風船		And3	14.0	12.6	14.0	2,200	器面磨滅、敲打痕を基本 底径9.0	
29	251	J11	14 五輪塔 地輪		And3	22.0		17.0	16,600	上辺に円形に彫み成形 水輪設置痕 敲打底部	
30	231	K09	14 五輪塔 地輪		And3	17.0	(18.6)	10.5		敲打底部 桶形一部欠損 上辺に水輪 設置痕(円形に赤堀、周囲スス付着)	
31	248	J09	東端下層 石佛		And3					石佛か 正面線に幅4cmの底帶 内面 平底とし背面はカマボコ形 破片のため詳細不明	
32		I12	建築石材片		And1	37.0	27.0	12.5		木口に幅4~5cm奥行5cmの矢板痕が 5cm距離にあり、木口及び上面にノミによるハツリ成形 他は破損	
33	247		P103	砾石	D	And1	20.0	19.5	8.0	板状痕、スス付着 加工痕なし 金属先端研磨痕自然形に多数	
34	250		K10	14 磐持き臼 上臼	1/2	And1	(30.0)			側縁欠損 6分割 左まわり 周縁5段 被給孔 志摩受口孔 挽き玉孔	

表9 萩川氏館跡出土銭貨一覧

留置場	整理番号	取上番号	出土地点			造物名	法量(mm.g)			備考
			グリッド	造構名	層位		幅	横	重量	
1	7	H10	SD07	11	寛永通宝(古)	24.0	24.0	3.0	初鋳 寛永13年(1636)公鋤	
2	13	237	SD07	11	寛永通宝	25.0	25.0	1.8	背面[文] 初鋳 寛永8年(1668)	
3	28-1	267	L12	SX23	寛永通宝	22.8	22.9	2.4		
4	29	K12	SX28	寛永通宝(古)	24.2	24.4	2.1			
5	30	K12	SX28	寛永通宝	22.9	22.7	2.2			
6	15	282	J11	寛永通宝	23.2	23.2	13.0	6枚銀鑄		
7	36	52	L11	4	寛永通宝(古)	24.2	24.3	2.5		
8	51	M10		寛永通宝	25.2	25.2	1.8	一部欠損		
9	57	N11		寛永通宝	25.1	25.2	2.6	背面[文]		
10	21-1	I50	J11	寛永通宝(古)	24.2	24.2	2.8			
11	21-2	I50	J11	寛永通宝(古)	24.4	24.5	9.9	3枚銀鑄		
12	14	I10		寛永通宝	23.1	22.9	2.1			
13	45	I00	L09	寛永通宝(古)	24.0	24.0	2.2			
14	9	H11		寛永通宝	22.2	22.1	2.3			
15	5	H11		寛永通宝(古)	24.2	24.1	3.3			
16	4	I33	H10	寛永通宝	22.4		1.4	一部欠損		
17	16	322	J10	寛永通宝	23.5	24.2	2.2			
18-1	23-1	K10		寛永通宝(古)	25.0	25.0	5.2	2枚接着		
18-2	23-2	K10		寛永通宝				背面[文] 銀鑄		
19	24	K10		寛永通宝	23.1	23.4	1.5	他に不明1		
20	31	I64	K12	寛永通宝(古)	24.5	24.7	3.1			
21	32	I62	K12	寛永通宝	23.4	23.5	1.8			
22	26	K10		寛永通宝	22.8	22.7	1.8			
23	27	K12		寛永通宝(古)	24.3	24.4	3.3			
24	63	K08		寛永通宝(古)	25.0	25.0	1.8	試鋳3		
25	36	314	H11	熙寧元宝	24.8	24.7	3.2	初鋳 北宋熙寧元年(1068)		
26	42	L09		寛永通宝(古)	23.9	23.9	1.8			
27	39	S33	L11	寛永通宝	22.8	22.7	2.8			
28	40	S50	L11	寛永通宝	24.3	24.3	3.1			
29	41	S51	L11	寛永通宝(古)	24.1	24.0	2.8			
30	54	N12		寛永通宝	23.2	23.2	2.7			
31	37	L10		寛永通宝	23.1	23.0	2.4			
32	56	N11		寛永通宝	25.2	24.7	2.7	一部欠損 背面[文]		
33	62	N12		寛永通宝	22.0	22.3	2.2			
34	52	N10		寛永通宝	24.1	23.6	2.4			
35	49	I15	M11	水樂通宝	24.8	24.8	3.3	初鋳 明 永樂6年(1408)		
36	20-1	J12		寛永通宝	25.1	25.0	3.2	背面[文] 銀鑄		
37	20-2	J12		寛永通宝(古)	24.3	24.3	2.8	銀鑄		
38	20-3	J12		寛永通宝(古)	23.4	23.2	3.5	銀鑄		
39	20-4	J12		寛永通宝	23.0	23.2	2.4	銀鑄		
1		H11		銅 貨	21.6	21.9	2.9	近代		
2		H11		銅 貨	27.8		6.4	近代		
3		H11		明治半錢銅貨	22.0	22.0	3.0	初鋳 明治6年(1873)?		
6	192	H11	SD07	11 不 明			0.5	2/3欠損		
8		H10		2 不 明	24.0	24.4	1.7	萬食		
10		I10		2 寛永通宝?	24.1	23.7	2.4	一部欠損		
11		I07		1 不 明	22.9	22.9	2.6	萬食		
12	44	I12		12 不 明	27.0	27.0	2.1	萬食		
17		J12		2 寛永通宝			1.0	1/2欠損		
18	167	J11		4 不 明	23.6		1.7	萬食		
19		J10		4 寛永通宝?	25.6	25.5	2.5			
22		K08		4 寛永通宝	22.6	22.8	1.6	背面		
25		K08		4 寛永通宝	20.3	20.4	0.6	一部欠損		
28-2		L12	SX23	寛永通宝?	23.9	24.3	2.5			
33		K11		4 不 明	21.1	21.1	2.0	萬食		
34	47	I10		14 不 明	23.5	23.3	1.9	萬食		
36	45	I10		4 不 明	24.0	23.9	2.9	萬食		
43		L12		4 不 明	22.7	23.0	1.3	萬食		
44		I09		3 寛永通宝(古)	23.9	24.0	1.9	背面		
46		M09		2 不 明	22.9	22.9	2.1			
47		M12		1 明治-銅銭貨	23.0		3.5			
48		M13		4 寛永通宝			1.1	1/2欠損		
50	266	M10		4 寛永通宝	21.8	22.0	1.9			
53		N12		3 明治-銅銭貨	23.0	23.0	3.3	他に不明1		
55	57	N11		4 不 明	23.2	23.5	2.4			
58		N11		4 不 明	22.9	22.9	2.0			
59		N11		4 不 明	20.2	18.5	1.7			
60	99	N10		4 不 明	24.4	24.4	3.2			

表10 芦川氏館跡出土金属製品観察表

図書号	種類	草書号	出土地点			遺物名	型式	残存率	材質	法量(cm.g)			属性	
			グリッド	遺構名	層位					長径	短径	厚さ(厚さ)	重量	
1			L10		4	金銅製品	残欠	金銅						鋼製金箔張薄板
2			L10		3	金銅製品	残欠	金銅						鋼製金箔張薄板
3			N10	SX40	4	銅製品	残欠	銅						厚板 混みあり
4	212		I11		4	銅製品	残欠	銅					12	厚板 混孔 混みあり 国N6と重ねて使用か
5	213		I11		4	銅製品	残欠	銅					11	厚板 混孔 混みあり 国N4と重ねて使用か
6	214		L11		2	瓦具 サーベル	残欠	鉛						サーベル柄、鉛 おもちゃ部品
7	218		H10	SD09		鉛製品	残欠	鉛						円環切削
8	210		J11		2	瓦接	完	真鍮	10.0	0.8	21	耳かきと 把手部からなり、混みあり		
9	211		L11		4	円紋	完	鉛		0.6	0.8			球形
10	219		L09		4	塵	略存	青銅	3.0	2.2	1.1	113	刀鍔具 中央に刀身残	
11						小柄輪	略存	青銅	8.2	1.3	0.5	131	中央に身久あり	
12	209		K12		4	環管	片	真鍮		(0.7)				吸口片 細者直
13			I09	SD07		環管	片	真鍮						吸口 特大環管
14	205		N12		4	環管	片	真鍮	(0.8)	0.4	(2.8)			吸口片、口付から環管にかけふくらみ
15	207	163	K12		4	環管	片	真鍮	(8.0)	(0.8)	0.4	(2.8)		吸口片 口付から環管直角的 緩者 直毛彫り花文
16	208		J11		4	環管	片	真鍮	(6.0)	(1.0)	(0.5)			吸口片 ふくらみ 緩者直
17	206		K11		4	環管	片	真鍮	(5.6)	(1.0)	(0.3)			吸口片 ふくらみ 緩者直
18	223		M11		4	円状吹製品	缺	7.0		2.0	186	金屬サビ 用途不明		
19	198		I08	SD07		Y字状製品	缺	7.1		0.7	41.8	鍛造 用途不明		
20			N13		2	輪状金具	缺	5.0	2.0		108	用途不明 平面圓形金具の一部か		
21	200		L11		2	環巻釘	欠	鉄	(6.7)		(0.5)	丁度欠 サビ付 短面方形 錆造		
22	201		I09		2	環巻釘	下端欠	鉄	(7.8)		(0.6)			新面方形
23	202		M12		2	環巻釘 (丸釘)	略存	鉄	(9.0)		(0.6)	14.4		新面円形 大きく両曲
24	217		K09		4	頭巻釘	欠	鉄			(0.6)	(7.8)		新面方形両端丸
25		362	I11	SX18		菱形鉄器	欠	鉄		(3.5)	(0.2)	(67.2)		用途不明 鉄器
26		361	I12	SX18		譽引手金具	略存	鉄	14.5			47.3		径4cmの円筒と長さ10.5cmの金具からなる 風化著しい

表11 芦川氏館跡出土鍛冶関連遺物観察表

\* 法量短径 (推定値)

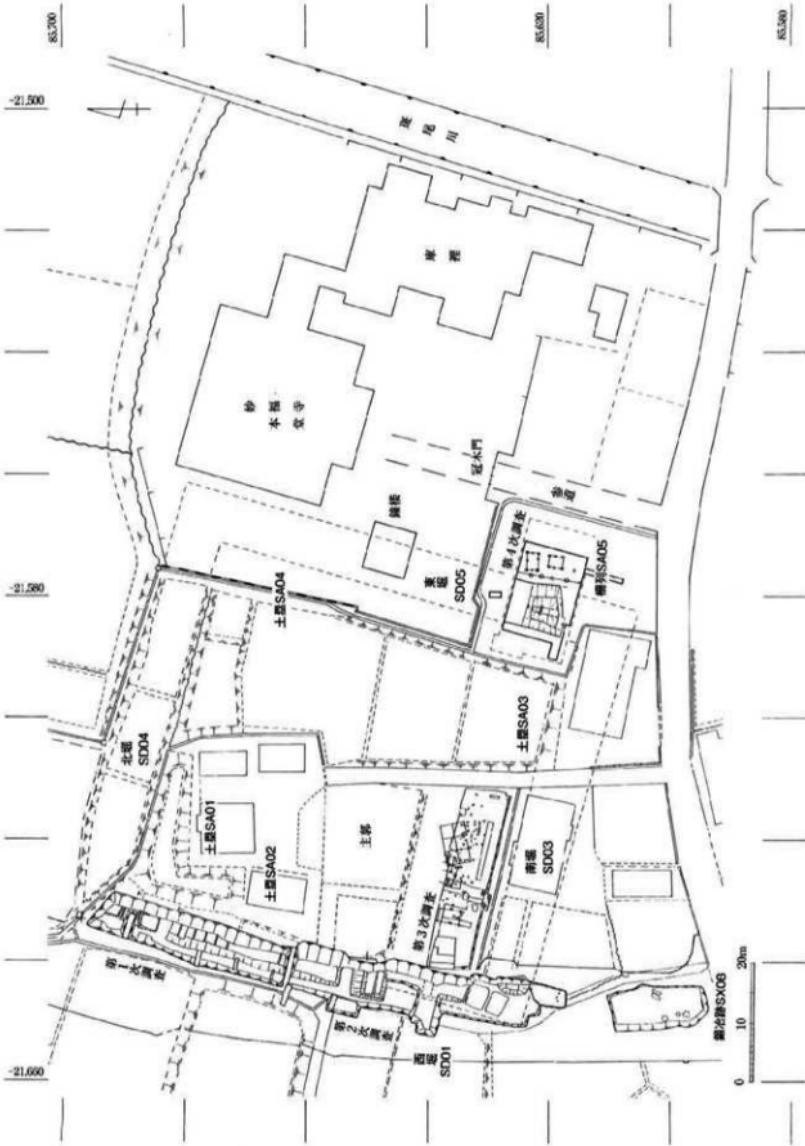
図書号	種類	草書号	出土地点			遺物名	型式	残存率	法量(cm.g)			属性	備考	
			グリッド	遺構名	層位				長径	短径 (上段 外径) (下段 内径)	厚さ	重量		
1	260		H11	SD07		鍛羽口				(6.9)	(2.1)		羽口端部火勢でケロイド状 器物タテハナツ	
2			I12	SD07		鍛羽口				(5.9)	(2.3)	2.0	羽口端部ケロイド状 タテハナツ	
3	261	214	I08	SD07		鍛羽口				(7.0)	(2.0)	2.5	体部片 タテハナミガキ	
4			I07-08	SD07		鍛羽口				(6.6)	(3.6)	1.5	羽口端部ケロイド状	
5	199		I08	SD07	(燃焼)	鍛津(複形)			6.8	5.9	2.0	59	炭片付着	
6			I07	SD07		鍛津(複形)			9.0	6.8	3.2	151		
7			I08	SD07	(燃焼)	鍛津(複形)			7.1	7.1	3.9	203	小石、炭多量付着	
8	213		SD07			鍛津(複形)			6.0	6.1	2.0	80		
9	213		SD07			鍛津(複形)			9.6	5.3	2.5	134		
10	224		I09	SD07		鍛津			4.9	3.5	1.6	22	鉄分多い	
11	213		SD07			鍛津(複形)			8.4	6.8	3.0	204		
12			I07	SD07	(燃焼)	鍛津(複形)			8.3	6.5	2.8	181	鉄分多い	
13			H10		2	鍛羽口								体部片外側のみ 大型羽口
14			G11			鍛羽口								鉄錠鉄分多い 羽口片鉄錠中 に取り込まれる
15			H10		2	鍛津(複形)			5.6	5.4	3.5	113	鉄分多い 砂付着	
16			G11			鍛津(複形)			5.2	3.0	2.2	32	鉄分多い	

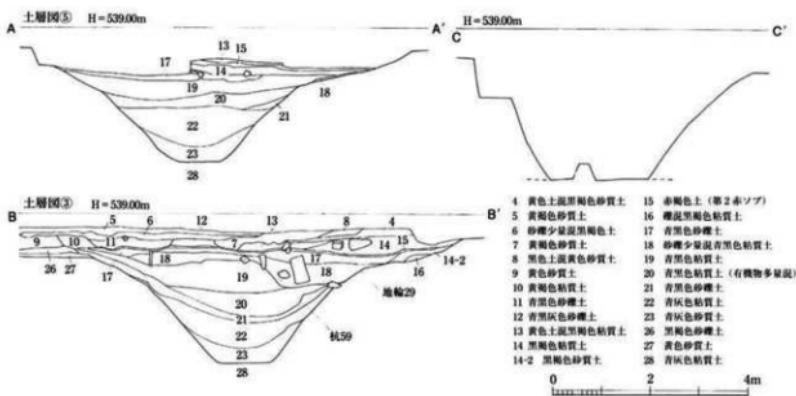
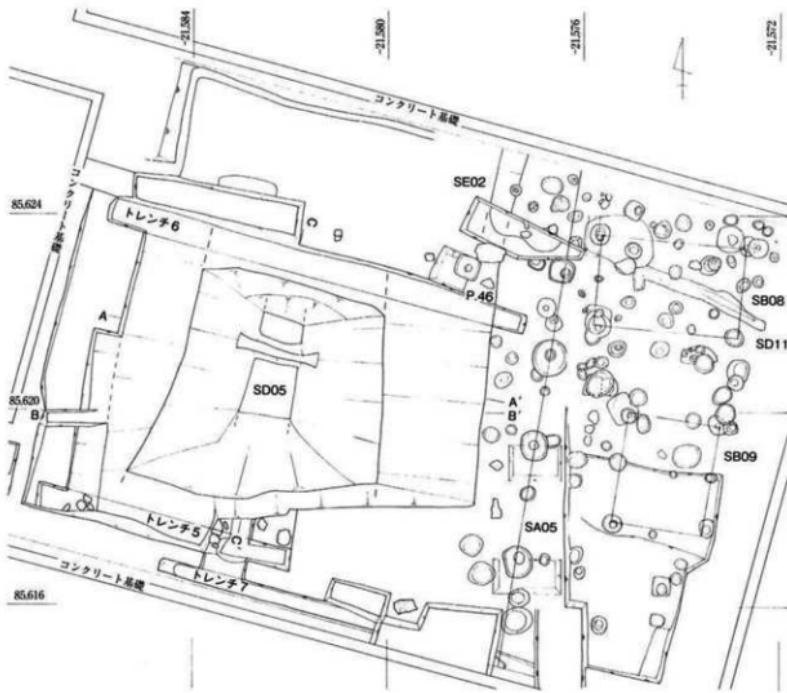
表12 芦川氏館跡出土木製品觀察表 ○番号は樹種同定済み

番号	樹種	出土場所	グリッド	遺構	層位	樹種	木段・木目	表面	寸法(cm)			属性	備考
									長	幅	厚さ		
① 75 325	J09	SD13		長床板	芯材	芯材	ハシノキ属 ハンノキ属		75	14.0	1.0	自然木の狭木用。脚部と脚側をケブリ出し、両端の凹み角度は約8度で床板表面は底面を丸くカーブしており、握持により脚部の脚側表面はやや丸みを持つ。表面はカミナリ目。剥離約2cmで上端が少しあげた後、表面は木のままである。表面に細かい凹凸がある。表面に手垢がある。	
④ 34 334	J09	SD13		板	板目	コナラ属		30.5	14.0	3.0	自然木の狭木用。脚部と脚側をケブリ出し、両端の凹み角度は約8度で床板表面は底面を丸くカーブしており、握持により脚部の脚側表面はやや丸みを持つ。表面はカミナリ目。剥離約2cmで上端が少しあげた後、表面は木のままである。表面に細かい凹凸がある。表面に手垢がある。		
⑤ 6 262	II1	SD05	20	掛机	板木取り	トヨコ属 トヨコ属		75	12.0	3.0	高台に置いた木製の机。表面は木のままである。表面に手垢がある。	高台の狭木用。脚部と脚側をケブリ出し、床板立ち上がりわざかに残す。	
4 46	J10	SD07	11	垂幕	板目	針葉樹		26.5	9.0	1.0	39の1回廊。木口一側削化		
③ 39-3	J09	SD07	11	加工木製品	板目	スギ		21.5	3.4	3.0	杉木の木口一側削はやや厚く、板目端は板から薄く加工され、先端は刀刃の先端がケズル。上端は削、底端は丸められ、表面に手垢がある。	杉木の木口一側削はやや厚く、板目端は板から薄く加工され、先端は刀刃の先端がケズル。上端は削、底端は丸められ、表面に手垢がある。	
⑥ 7 1.0				板	コナラ属		14.5	4.5	6.0	木製の板。先端で板状態が良い。側面・底部も脚側に埋り墨塗にスリ或は墨塗。表面は木のままである。表面に手垢がある。	木製の板。先端で板状態が良い。側面・底部も脚側に埋り墨塗にスリ或は墨塗。表面は木のままである。表面に手垢がある。		
⑦ 40	J09	SD07	11	加工木製品	芯材・切妻出し	ヤマダ属		19.5	5.3	4.0	自然木本物用。上端から脚側まで斜状にケブリ先端部は5度とな	自然木本物用。上端から脚側まで斜状にケブリ先端部は5度とな	
⑧ 3 267	J10	SD07	11	加工木製品	芯材・みかん削り	マツ属		15.0	2.5	1.0	自然木本物用。外板は丸削りである。表面に手垢がある。	自然木本物用。外板は丸削りである。表面に手垢がある。	
9 8 165	H12		17	側内板板	板状	ヒノキ		9.5	1.0	内裏に木口1カタナウチアズリ痕跡とどの痕跡木口も丁寧なケブリ仕上げ。表面の3分の2は削り跡で、表面は丸められ、表面に手垢がある。	内裏に木口1カタナウチアズリ痕跡とどの痕跡木口も丁寧なケブリ仕上げ。表面の3分の2は削り跡で、表面は丸められ、表面に手垢がある。		
⑨ 39-2	J09		12	水桶	板木取り	スギ		41	2.5	1.0	小片状の表面から脚側側面の部分とし、既定よりも狭くなる。表面に手垢がある。	小片状の表面から脚側側面の部分とし、既定よりも狭くなる。表面に手垢がある。	
11 58 322	II1	室内	木桶	板材	針葉樹		12.5	1.7	1.0	14の水桶外。外板はケブリが残る。新削合板。全体に劣化。用途不明	14の水桶外。外板はケブリが残る。新削合板。全体に劣化。用途不明		
12 56	K11		22	舟物	不明	スギ		8.6	0.8	0.5	直削りケブリ		
13 39-1	J09		19	舟物	針葉樹(スギ)		5.6	3.3	1.0	上端にケブリ加工が施され、下端は丸削。小破片で用途不明	上端にケブリ加工が施され、下端は丸削。小破片で用途不明		
14 60	J10		19	舟物	板状	針葉樹(スギ)		11.2	3.0	0.5	舟物の舟頭部。表面に脚側部の削離がある	舟物の舟頭部。表面に脚側部の削離がある	
15 12-1	J10		19	板	板状	ヒノキ		104	4.1	0.5	小破片。舟頭部が見られる。表面に手垢がある。	小破片。舟頭部が見られる。表面に手垢がある。	
16 18-4	J10		19	木製品	板状	ヒノキ		67	2.1	0.5	品目で木製品。上端から脚側まで斜状にケブリ先端部は5度となる。	品目で木製品。上端から脚側まで斜状にケブリ先端部は5度となる。	
17 74	J09		40	柄物の柄	板状	針葉樹		26.5	2.0	0.5	用途不明	用途不明	
18 43 L11 SA05 H22	埴土	柄物の柄	板状	不明	22.5	1.7	1.0	南端部にケブリに切りが入り、上・下に2段落の斜めががある。	南端部にケブリに切りが入り、上・下に2段落の斜めががある。				
⑩ 41-1	H10	SD07	11	不明	板目	クリ		22.0	3.7	0.5	13先端部に削。ケブリ。断面方形	13先端部に削。ケブリ。断面方形	
⑪ 140		SD07	11	側り材板	板目	コナラ属 コナラ属		29.5	5.0	1.0	14の舟頭部の側面に削離があり、先端のケブリ・削離。他の物と接する部分は丸められ、表面は木のままである。	14の舟頭部の側面に削離があり、先端のケブリ・削離。他の物と接する部分は丸められ、表面は木のままである。	
21 12-3	J10	SD07	11	削離	板			4.1	1.5	0.5	削離に何箇かある。残存部分の上から脚側に削られていて、表面は方削れ。削離部は丸められ、表面は木のままである。	削離に何箇かある。残存部分の上から脚側に削られていて、表面は方削れ。削離部は丸められ、表面は木のままである。	
22 12-2	J10	SD07	11	削離	板			3.0	2.5	0.5	上端削離に何箇かある。残存部分の上から脚側に削られていて、表面は方削れ。削離部は丸められ、表面は木のままである。	上端削離に何箇かある。残存部分の上から脚側に削られていて、表面は方削れ。削離部は丸められ、表面は木のままである。	
23 113	L09	SD02		板材				29.0	4.0	1.0	丁字型ケブリ。花唐草彫刻。由来オレ	丁字型ケブリ。花唐草彫刻。由来オレ	
⑬ 59	J09		2枚	芯材	芯材	ヒノキ		22.0	0.9	0.5	木の舟頭部に削離に切りが入り、上・下に2段落の斜めががある。	木の舟頭部に削離に切りが入り、上・下に2段落の斜めががある。	
⑭ 132	J10		18	枕	芯材	ヒノキ		12.3	7.6	0.5	先端部に削。自然とし直行する2面をやや削角にしてケズル。先端部に削。自然とし直行する2面をやや削角にしてケズル。先端部のみ削。自然とし直行する2面をやや削角にしてケズル。	先端部に削。自然とし直行する2面をやや削角にしてケズル。先端部のみ削。自然とし直行する2面をやや削角にしてケズル。	
26 71	J09	SD07	19	削離	削離	針葉樹		7.5	5.4	2.0	上下両端に同方向からカーブ		
27 68		SD07	19	削離	削離	針葉樹		5.0	3.6	1.0	16削離内部に残存のあらミヨナ板	16削離内部に残存のあらミヨナ板	
⑮ 53	K10		19	枕	芯材	ヒノキ		6.8	2.1	1.0	先端削離4.4を基に脚側にケズル	先端削離4.4を基に脚側にケズル	
⑯ 50	K10		19	枕	芯材	ヒノキ		8.5	2.1	1.0	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	
⑰ 51 206	J09		枕	芯材	ヒノキ	エイジング漆		11.2	1.7	1.0	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	
⑲ 137 206	H12 AseB	枕	芯材	ヒノキ	クリ			19.8	6	1.0	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	16先端削離4.4を基に脚側にケズル	
⑳ 41-2	H10	AseA	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管	15.5	4.5	4.1	先端部のみ削。角部はS型ケブリ	先端部のみ削。角部はS型ケブリ	
㉑ 136	H10		枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管	16.9	6.9	5.3	5.3先端部のみ3面ケブリ	5.3先端部のみ3面ケブリ	
㉒ 37	N09		枕	芯材	ヒノキ	クリ		11.4	2.5	2.5	25.先端削離4.4を角にケブリ・脚側部の削離がある	25.先端削離4.4を角にケブリ・脚側部の削離がある	
㉓ 128	H11		枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管	17.6	3.3	3.2	3.2先端削離4.4を角にケブリ・脚側削離	3.2先端削離4.4を角にケブリ・脚側削離	
㉔ 127 285	J09	B	枕	芯材	ヒノキ	クリ		17.7	3.2	3.2	3.2自然木で芯材の先端部を4面から縦角にケブリ曲巻となる。術後一部に削離	3.2自然木で芯材の先端部を4面から縦角にケブリ曲巻となる。術後一部に削離	
㉕ 129 287	J09	B	枕	芯材	ヒノキ	ケブリ出し	マツ属	12.4	3.6	1.0	4.4削離4.4を角にケブリ・脚側削離。表面は削削。先端部は削離にケブリして、先端削離一部に削離。削離部の削離がある	4.4削離4.4を角にケブリ・脚側削離。表面は削削。先端部は削離にケブリして、先端削離一部に削離。削離部の削離がある	
㉖ 130 304	H12 AseB	枕材	芯材	ヒノキ	クリ	コナラ属		16.7	4.9	3.3	3.3先端削離4.4を角にケブリ・脚側削離にケブリがあり、削離が強い。側面にケブリ	3.3先端削離4.4を角にケブリ・脚側削離にケブリがあり、削離が強い。側面にケブリ	
㉗ 119 276	J10	B	枕	芯材	ヒノキ	クリ		8.5	8.0	1.0	7.8自然木削離4.4を角にケブリ・脚側削離。表面は削削。先端部は削離にケブリ	7.8自然木削離4.4を角にケブリ・脚側削離。表面は削削	
㉘ 118 293	H11 AseB	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管		33.2	6.2	6.2	6.2自然木の先端部を3面からケブリ	6.2自然木の先端部を3面からケブリ	
㉙ 130 273	H10 A	枕	芯材	ヒノキ	クリ			45.9	12.8	7.2	7.2自然木上端のみ4枚抜きあり、側面に斜めに切断 一部に奥底化 斜底削離	7.2自然木上端のみ4枚抜きあり、側面に斜めに切断 一部に奥底化 斜底削離	
㉚ 134 289	J09 B	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管		45.4	4.5	4.0	4.3先端一枚抜き側面に斜めに削離あり、側面なし 上端欠	4.3先端一枚抜き側面に斜めに削離あり、側面なし 上端欠	
㉛ 134 289	J09 B	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管		65.4	4.0	4.0	4.0先端一枚抜き側面に斜めに削離あり、側面なし 上端欠	4.0先端一枚抜き側面に斜めに削離あり、側面なし 上端欠	
㉜ 125	J09	19	枕	芯材	ケブリ出し	マツ属	高級精管	26	5.3	5	5.5表面は方削れ、先端部4面ともモチナ屋による丁寧なケブリ	5.5表面は方削れ、先端部4面ともモチナ屋による丁寧なケブリ	
㉝ 133 274	H10 A	枕	芯材	ヒノキ	クリ	マツ属		21.4	4.0	3.0	3.0自然木の先端部を3面から斜めにケブリ 上端欠	3.0自然木の先端部を3面から斜めにケブリ 上端欠	
㉞ 123 298	H12	枕	芯材	ヒノキ	クリ	マツ属		27.0	6.1	4.3	4.3自然木の先端部を3面から斜めにケブリ 上端欠	4.3自然木の先端部を3面から斜めにケブリ 上端欠	
㉟ 126 280	J10 B	枕	芯材	ヒノキ	クリ	マツ属		32.8	3.8	3.0	3.0先端削離、側面に斜めに削離あり、側面削離4面ケブリ 上端欠	3.0先端削離、側面に斜めに削離あり、側面削離4面ケブリ 上端欠	
㉟ 114 144	J09	枕	芯材	ヒノキ	クリ	コナラ属		38.3	7.1	5.0	5.0自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部の一部に削離、残存下部は削離が強い	5.0自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部の一部に削離、残存下部は削離が強い	
㉟ 134 290	J09	枕	芯材	ヒノキ	クリ	マツ属		27.8	6.0	5.0自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部を3面からケブリ 側面性化	5.0自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部を3面からケブリ 側面性化		
㉟ 116 272	H10 A	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管		26.9	7.5	6.4	6.4自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部の一部に削離、側面性化	6.4自然木の先端部を3面からケブリ側面性化にケブリ上端部の一部に削離、側面性化	
㉟ 131 273	J10	枕	芯材	ヒノキ	マツ属	高級精管		43.0	5.8	5.0	5.0先端ケブリ・側面性化	5.0先端ケブリ・側面性化	

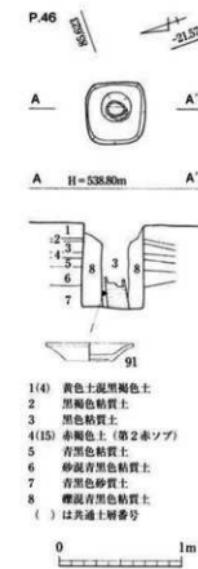
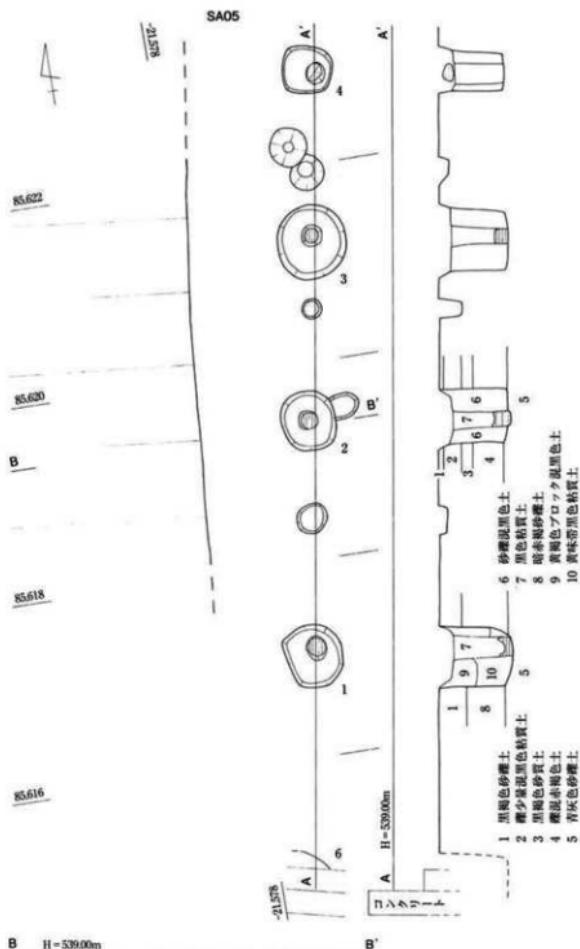
番号	標高	月別 積算量	出土品			部類	木製・木口	樹種	寸法(cm)			属性	備考
			グリッド	遺跡	層位				長	幅	厚		
④ 134	200			社	志村丸木	スギ	39	3.8	3.3	目地穴の端部に多面ケズり、企作に御波ある 上塗灰			
④ 128	382	H11	AerB	社	志村丸木	セモ	35.3	4.3	3.2	目地穴の端部多面ケズり、上塗灰部分の1箇所剥れ			
④ 118	303	H12	AerB	社	志村丸木	タリ	46.0	5.2	5.6	目地穴の端部多面ケズり 上塗剥灰化粧 オレ			
④ 21	267	H12	Aer3	社	志村丸木	タリ	50.4	5.8	4.7	目地穴の端部多面ケズり 企作に御波ある 上塗オレ			
④ 46	269	H12	Aer3	社	志村丸木	コナラ	64.0	7.0	6.5	目地穴の端部4箇所から縦方向にケズり、徐筋の半分に剥皮残る			
④ 144	113	SA06	竈方1	社	志村丸木	タリ	13.0	10.8		既成のみ複数、片側は底足、外側は底足、表側は表面剥離ケズり			
④ 149	111	SA06	竈方2	社	志村丸木	タリ	22.0	16.8	18.0	内部破損により底脚、板下等に剥離剥離、表面は凸凹、底筋のみ残			
④ 146	351	H11	B	社(日)	志村丸木	タリ	32.8	13.4	12.8	既成円柱、上端部および底部剥離、底面は水平かきり(底削) P.67			
④ 149	109			社	志村丸木	タリ	94.0	15.5	13.0	表面は円形、上内側木、底筋ケズり、表面が既成部分との会面に複数剥離			
④ 146	300	H11	B	社(日)	志村丸木	タリ	18.4	11.0	9.5	上端も少川面剥落、底部は表面後に斧による平底整形加工なし、底筋剥離直角			
④ 147	169	SD08	竈方1	社	志村丸木	タリ	15.5	13.8	12.3	前面に丁字などケズり跡無し、背面は軽微な勾配(2分勾配)にケズり、底筋に剥離、削削下等ケズり			
④ 150	100	F40	社	志村ケズリ出し	タリ	30.3	17.1	16.8	表面は削り光形、上端部は削れ、更には芯に向かい傾斜して方向からケズり、底筋の小剥れ、表面ケナヅリ				
④ 151	305	H10	B	社(日)	志村丸木	タリ	60.0	11.9	11.0	表面は削削で手筋に丁字を施すが見られ剥離ケズり、表面剥離			
④ 163	158			廻り板	クリ	74.6	12.0	10.0	唐松丸井の廻り板部分(背が削り)、表面に瓦葺の跡キリ痕あり				

第6図 兼用全図 芹川氏庭跡第1次～第4次調查地点と妙福寺（1:800）

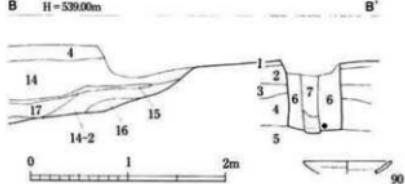




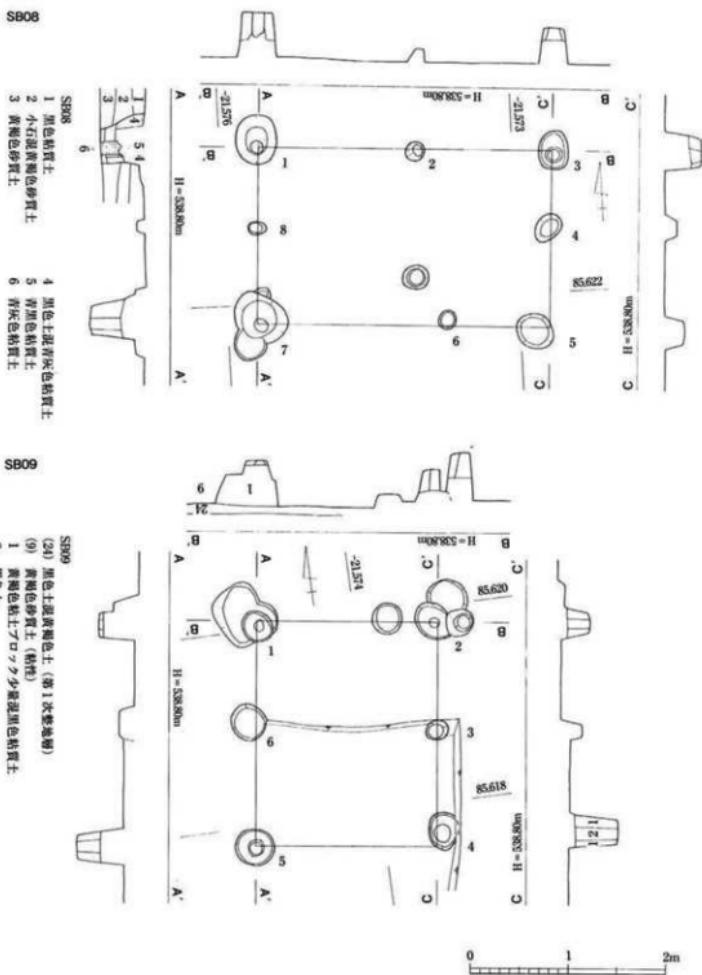
第7図 下層遺構（中世）発掘図（1:100）



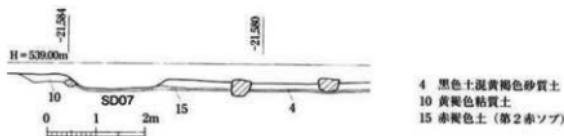
第9図 挖方 (P.46) (1 : 40)



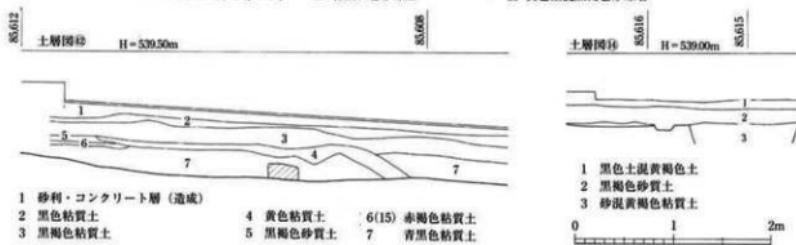
第8図 構列 SA05 (1 : 50)



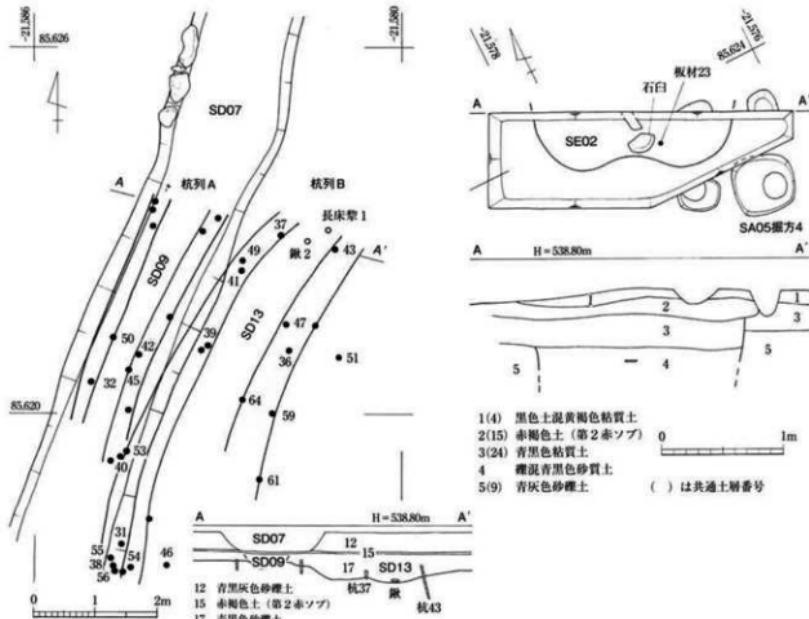
第10図 振立柱建物 SB08・SB09 (1 : 50)



第11図 溝 SD07と磁石建物関係土層図 (1 : 100)



第12図 土層図②・④・⑧ (1:50)



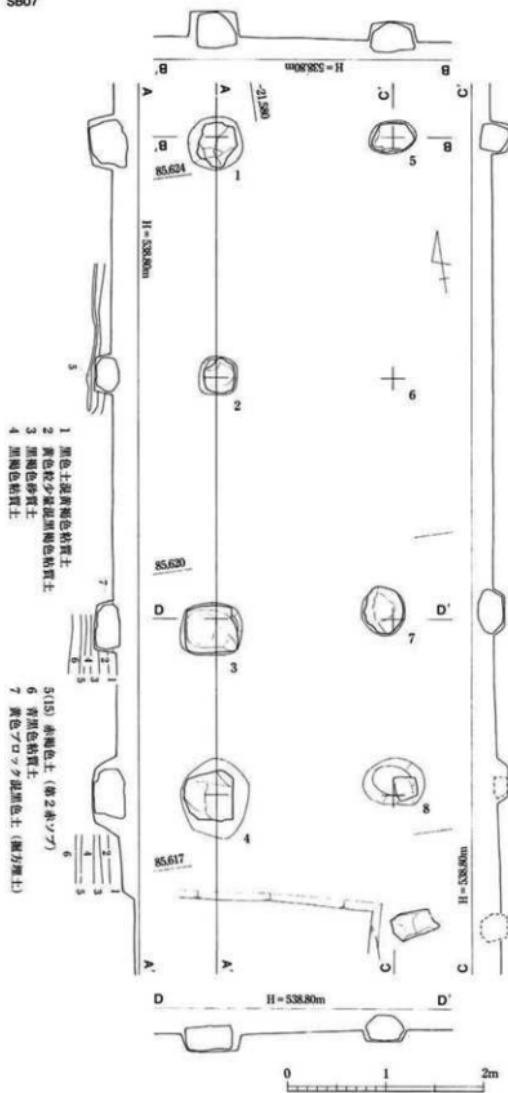
第14図 溝 SD09・SD13、杭列A・B (1:80)

第13図 井戸 SE02 (1:40)

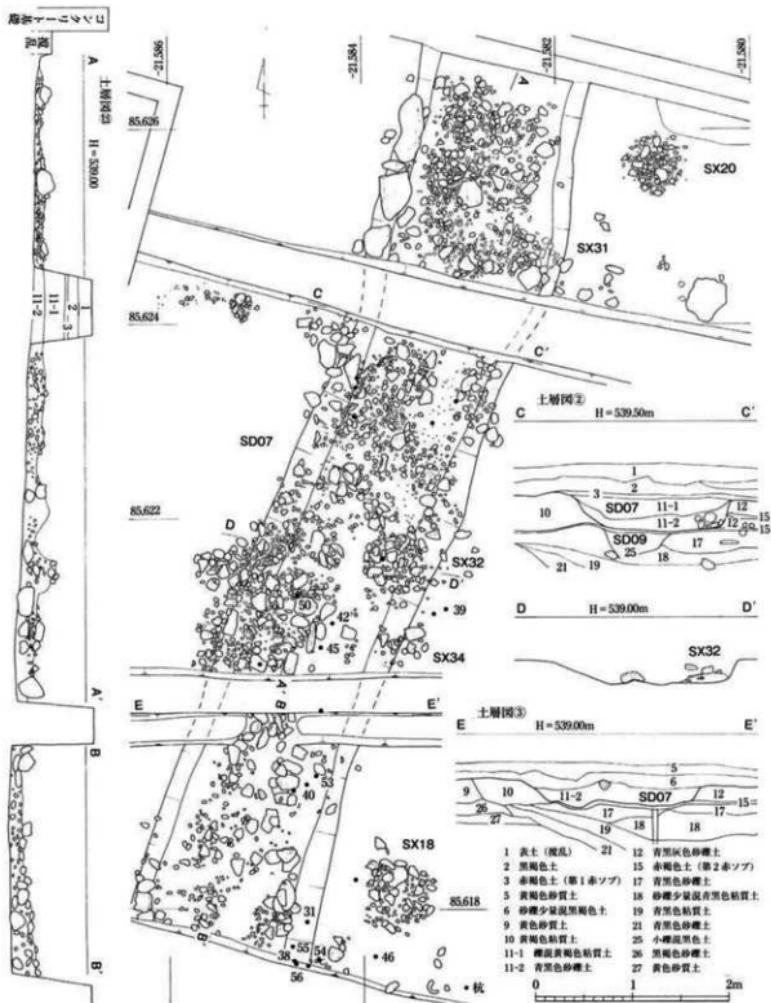


第15図 上層遺構（近世～近代）発掘図（1：120）ただし土坑・柱穴は時期不詳につき省略（第7図参照）

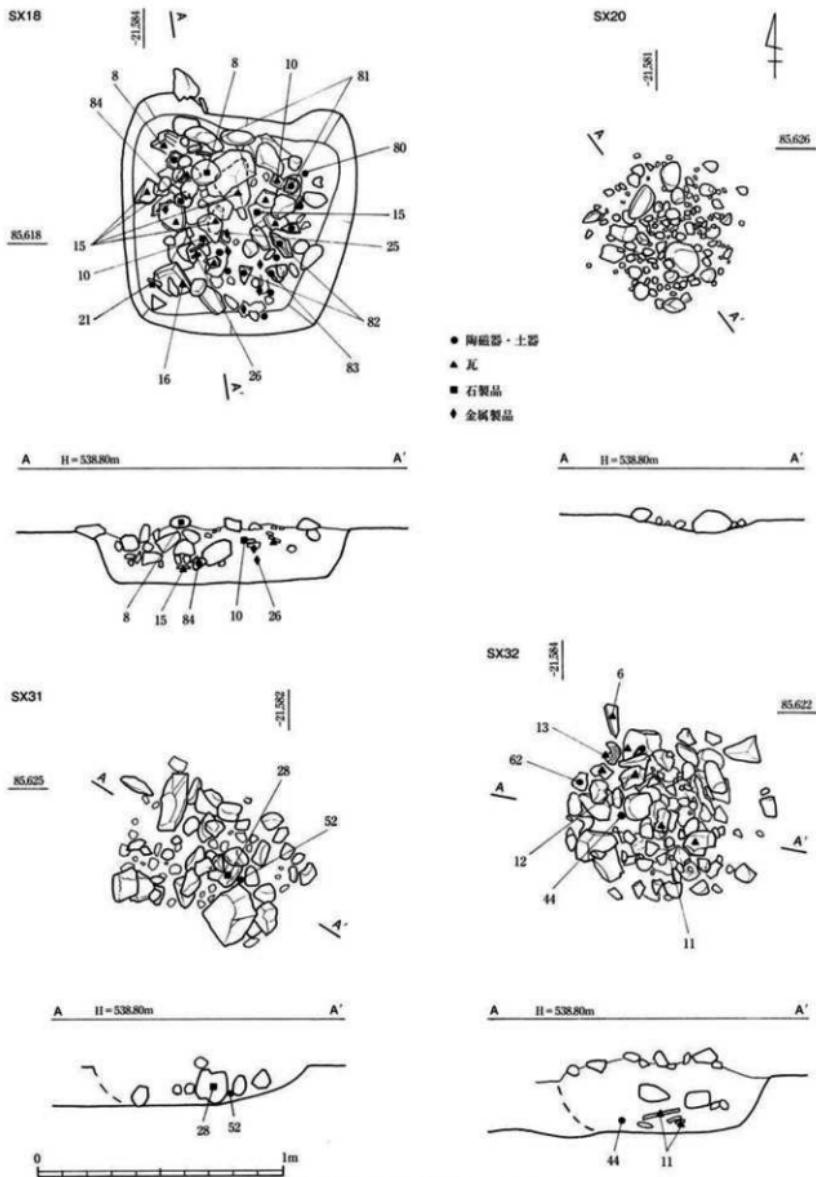
SB07



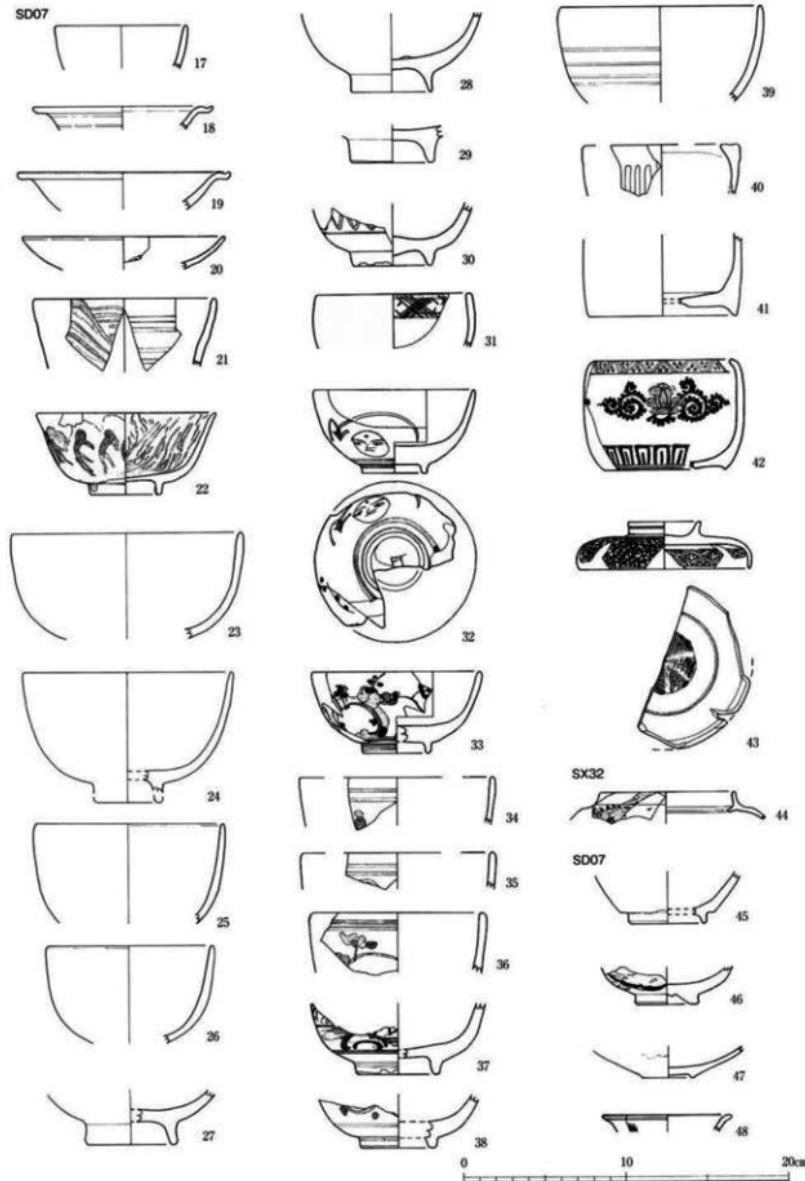
第16図 磁石建物 SB07 (1:50) 共通土層 4層 (第2次整地層) - 1・2層 14層 - 4層 15層 - 5層 17層 - 6層



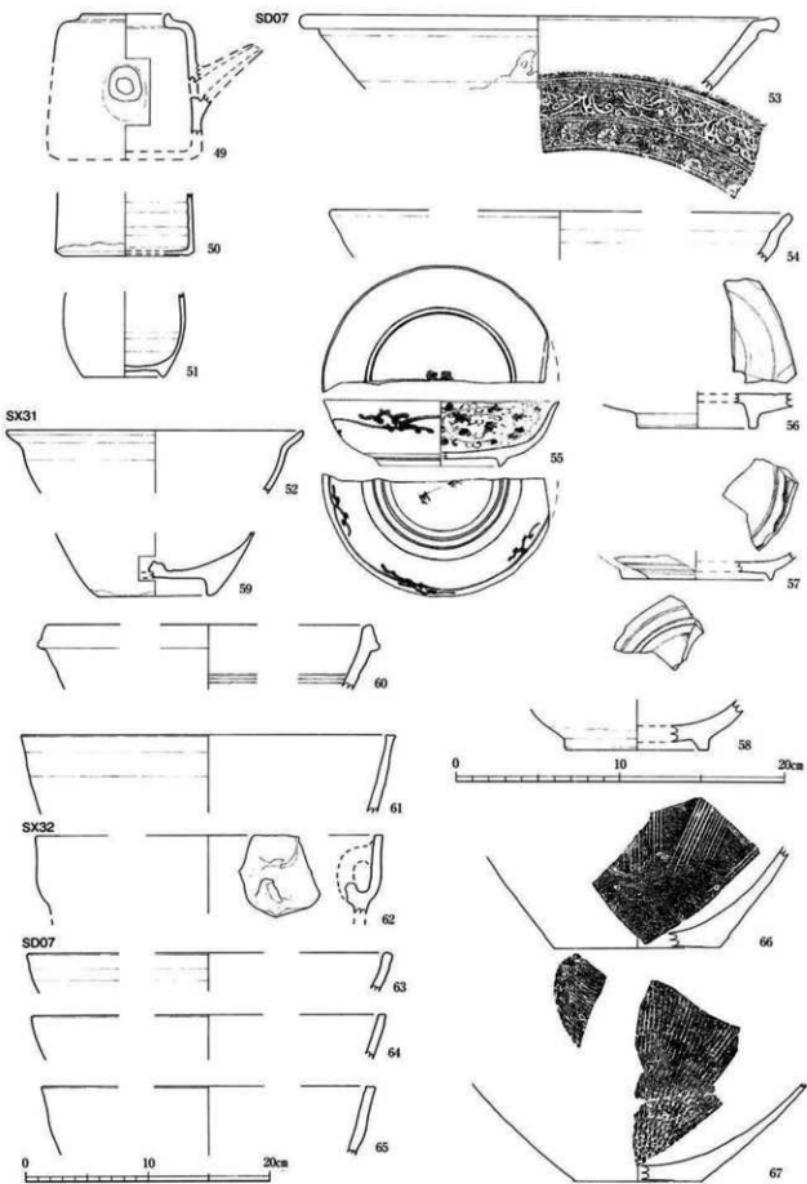
第17図 溝 SD07 (1 : 50)



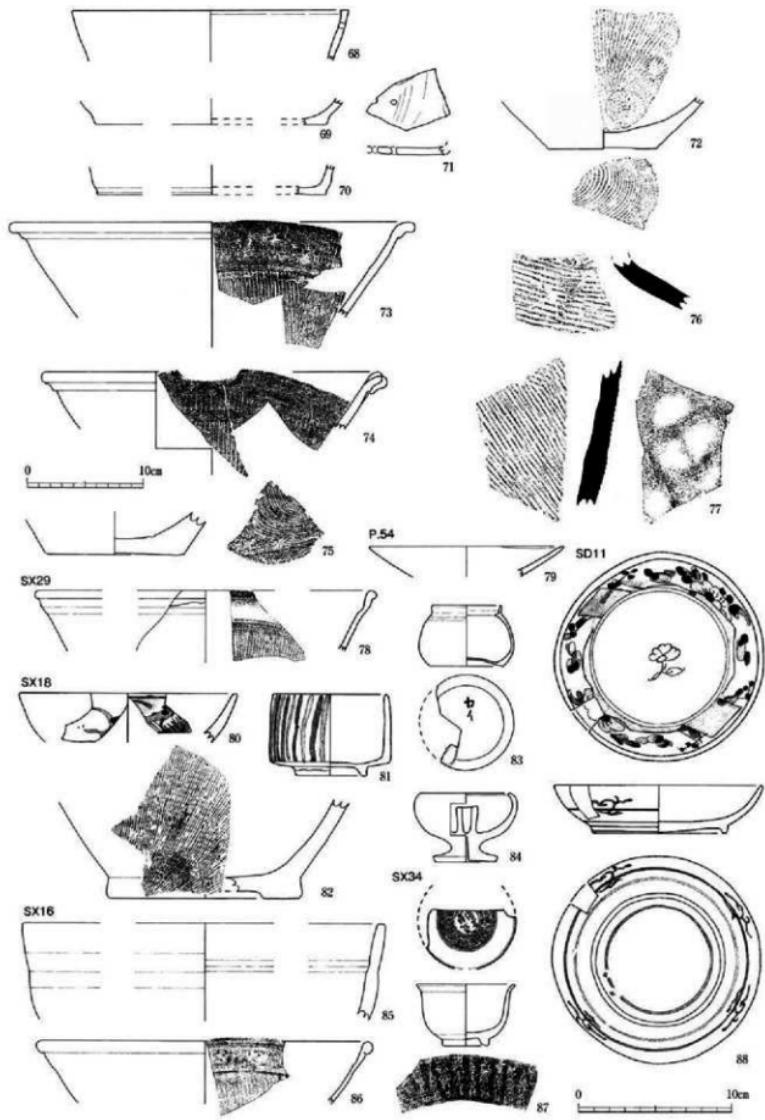
第18図 廃棄土坑 SX18・20・31・32 (1 : 20)



第19図 中世～近代の陶磁器・土器(1) (1 : 3)

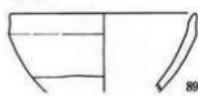
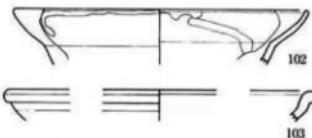


第20図 中世～近代の陶磁器・土器(2) (1 : 3, 1 : 4)

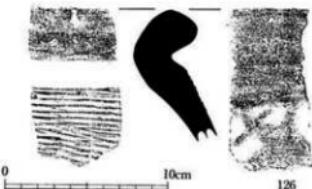
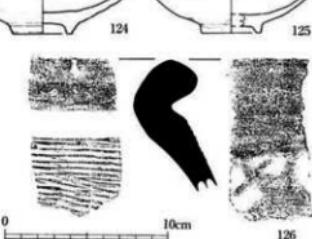
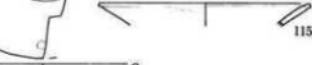
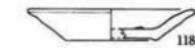
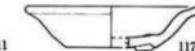
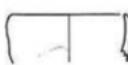
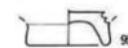
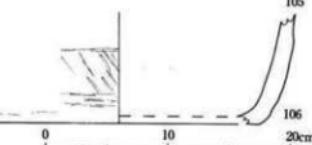
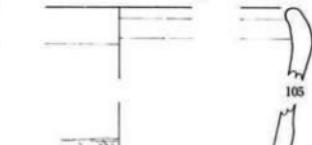
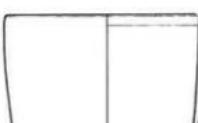
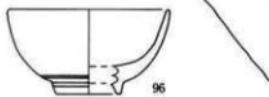


第21図 中世～近代の陶磁器・土器(3) (1 : 3, 1 : 4)

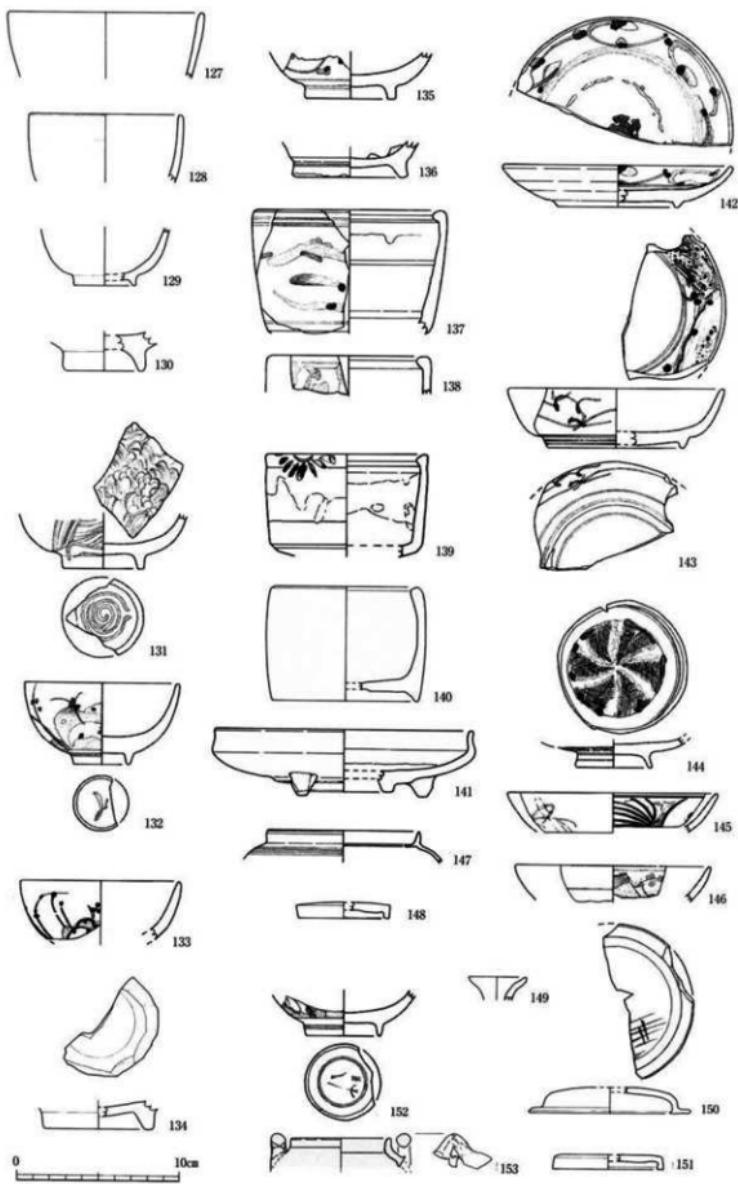
SX36

SA05  
擴方2

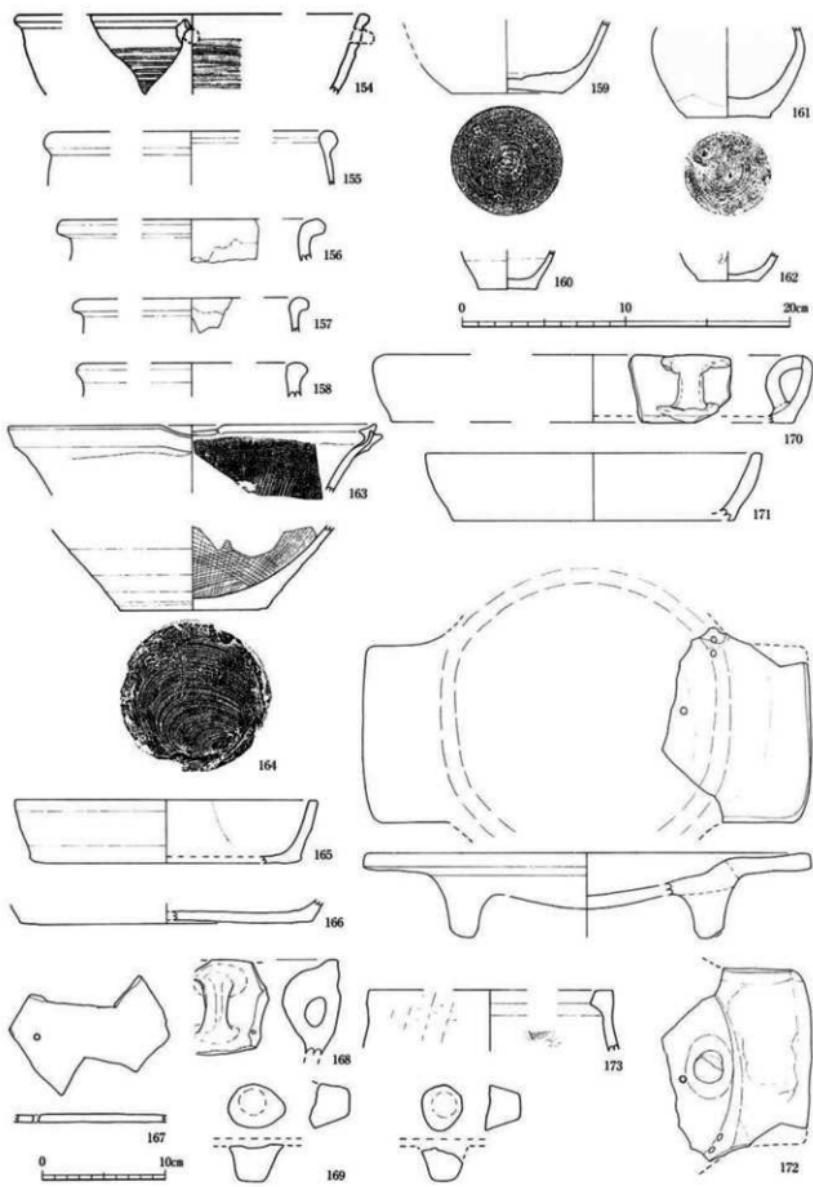
整地層・包含層



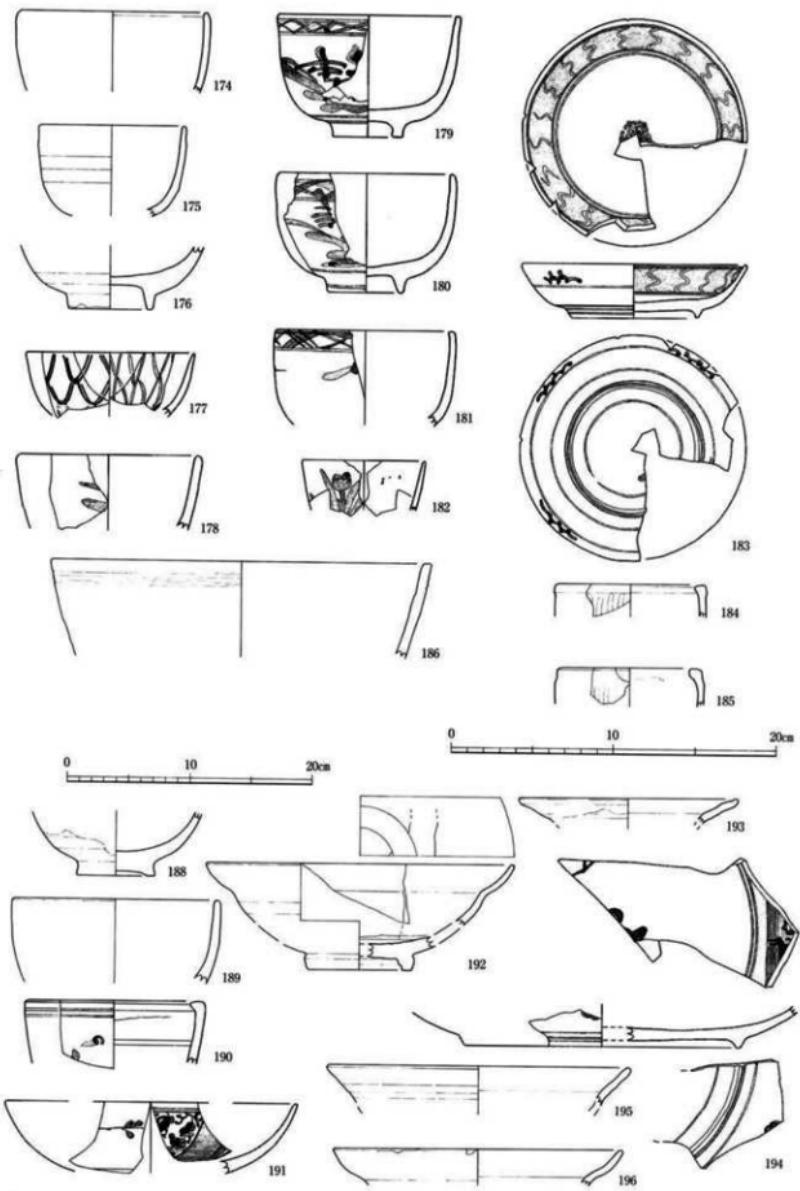
第22図 中世～近代の陶磁器・土器(4) (1:3、1:4)  
2層 (92~96・113・120) 4~4-2層 (第2次整地層) (97~109・122・124)  
24層 (第1次整地層) (114~115・117・121・125) 14~14-2層 (110~112・  
116~118・119・123) 19層 (126)



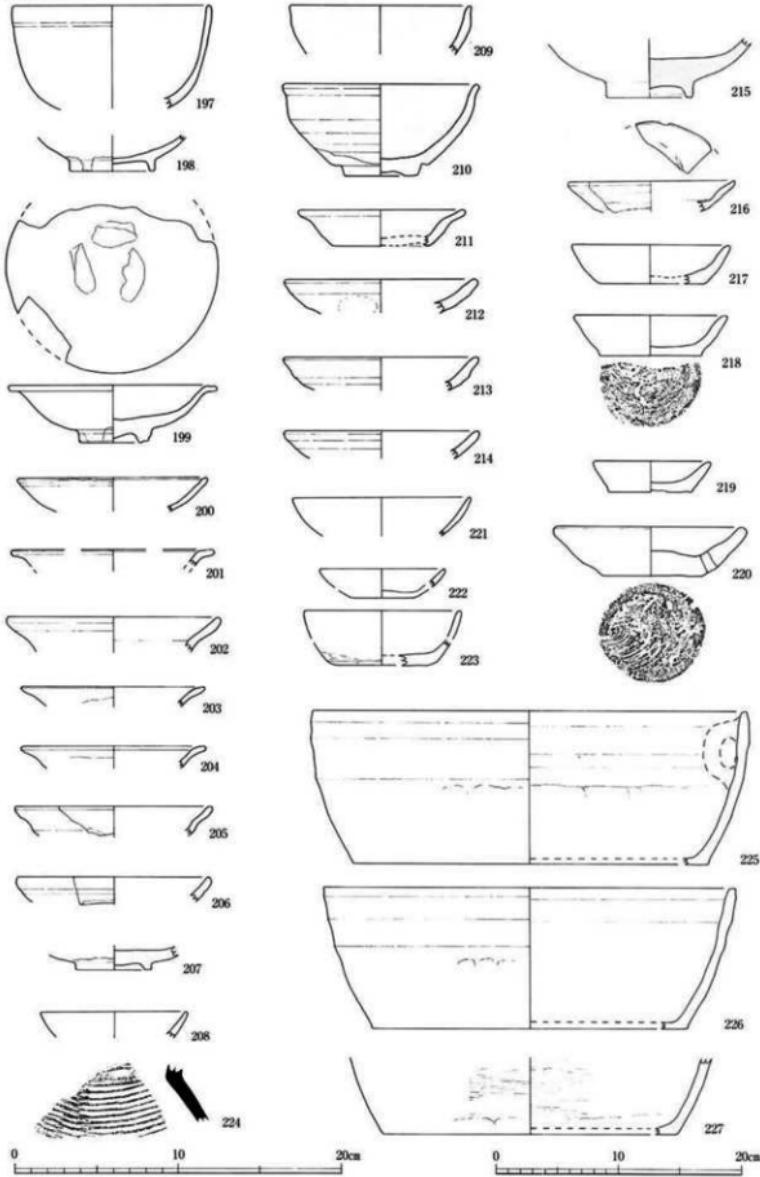
第23図 中世～近代の陶磁器・土器(5) (1 : 3) 1～3層 (129～131・142・144・150～153) 4・4～2層 (127・128・132～141・143・145～149)



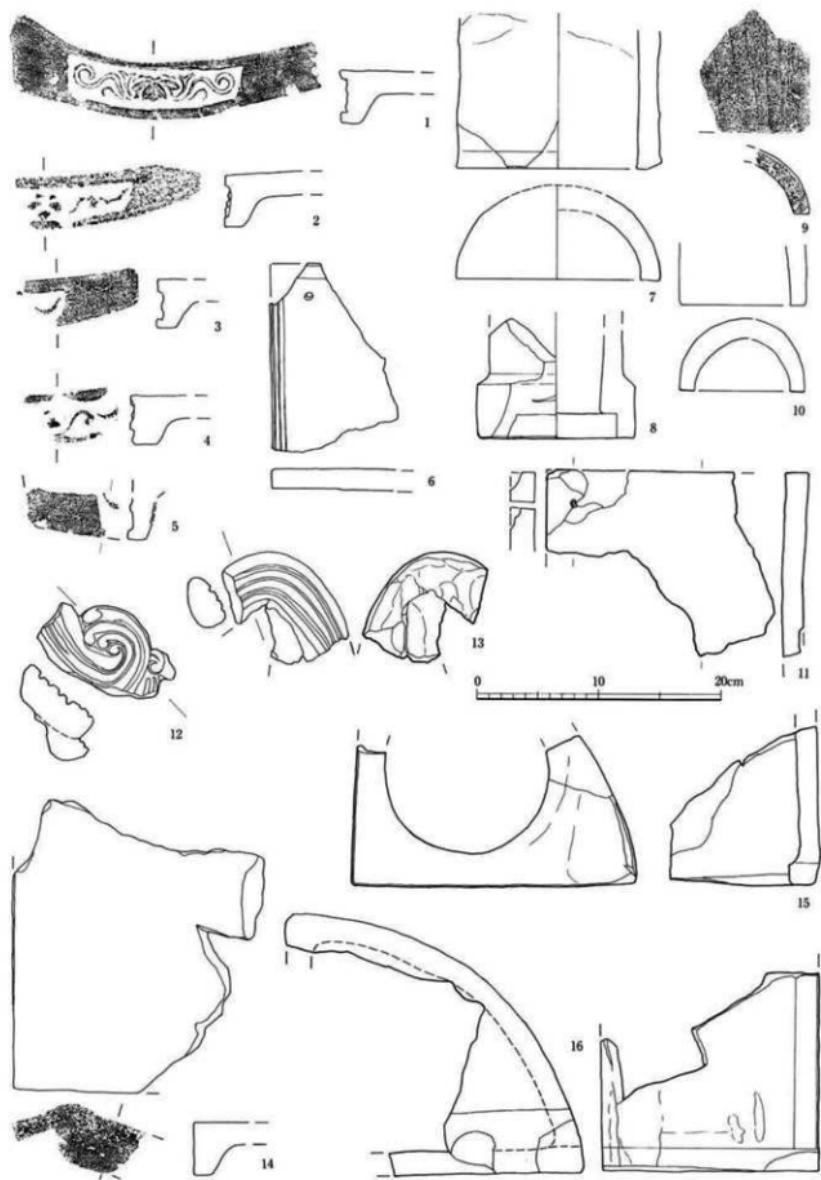
第24図 中世～近代の陶磁器・土器(6) (1 : 3、1 : 4) 2層 (156～158・163・165・173) 4・4・2層 (155・161・162・164・166～170・172) 12層 (154・159・160・171)



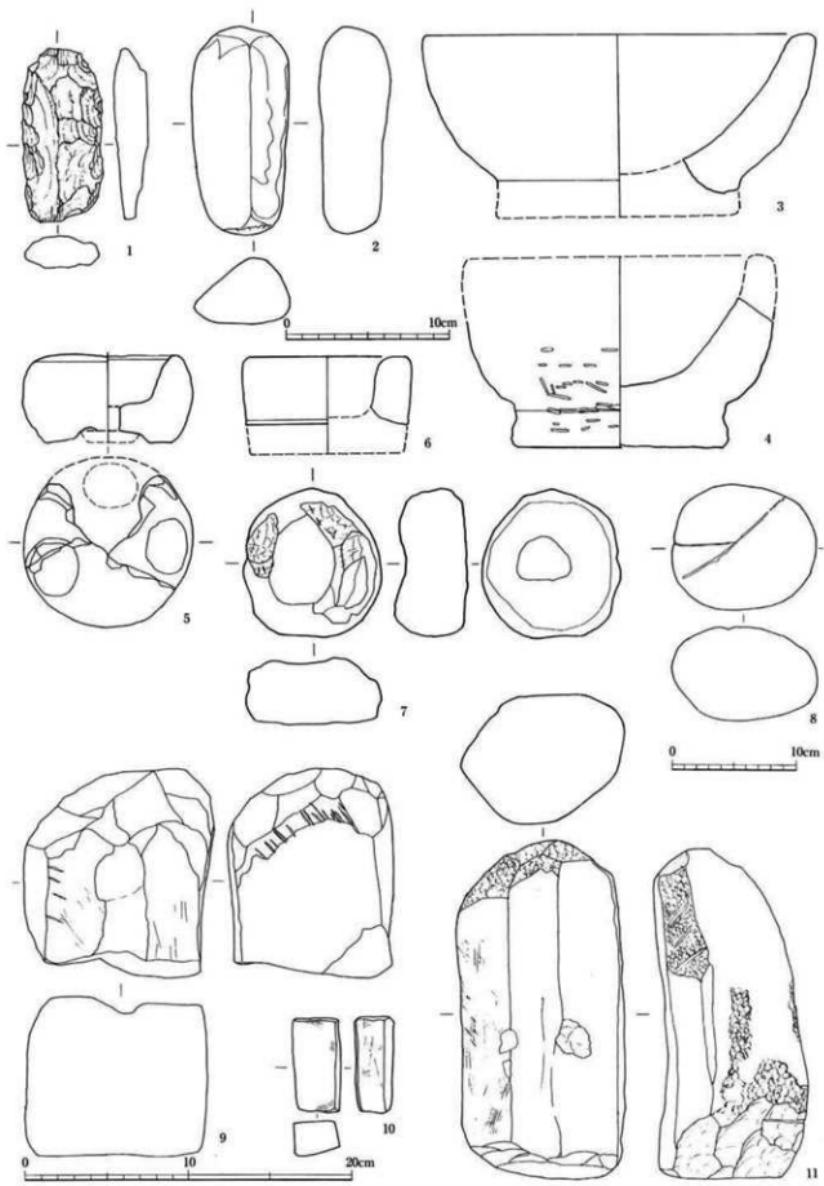
第25図 中世～近代の陶磁器・土器(7) (1 : 3, 1 : 4) 4層 (184・192～196) 12・14・15層 (174～183・188～191) 19層 (185・186)



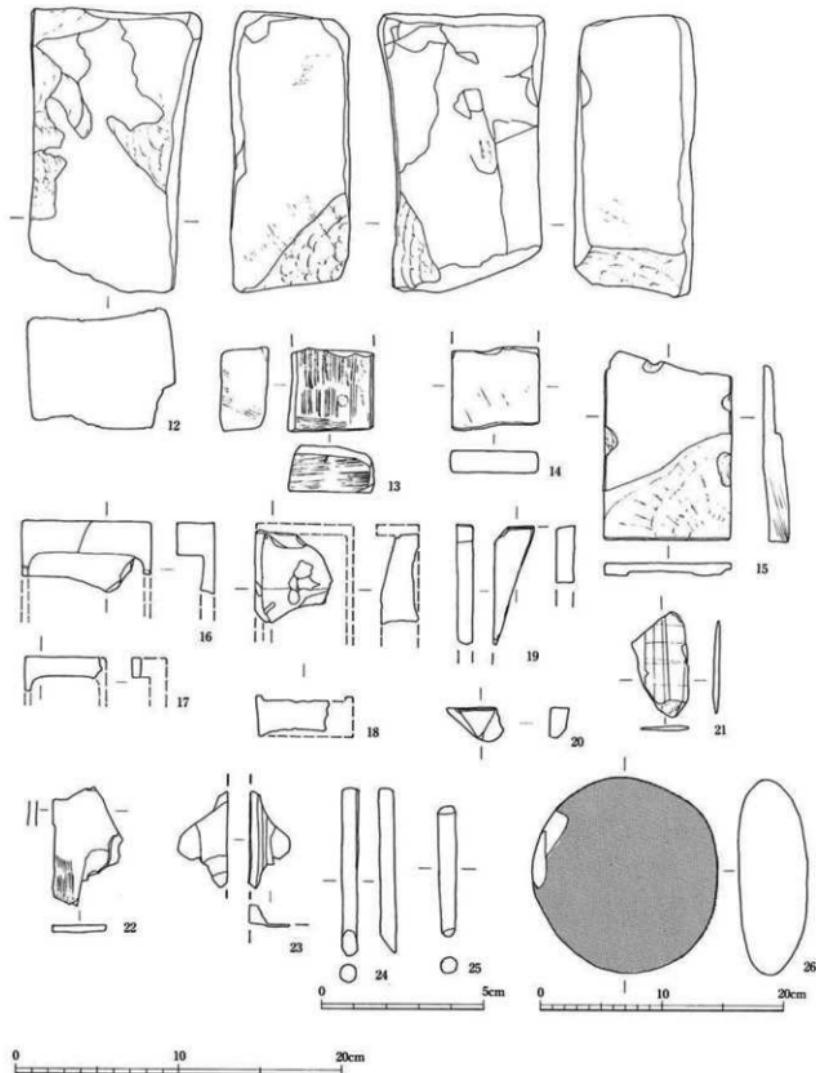
第26図 中世～近代の陶磁器・土器(8) (1 : 3, 1 : 4) 12～15層 (198・201・208) 17～19層 (197・199・200・202・207・209・214・216・224・227) 20～22層 (215・217～223)



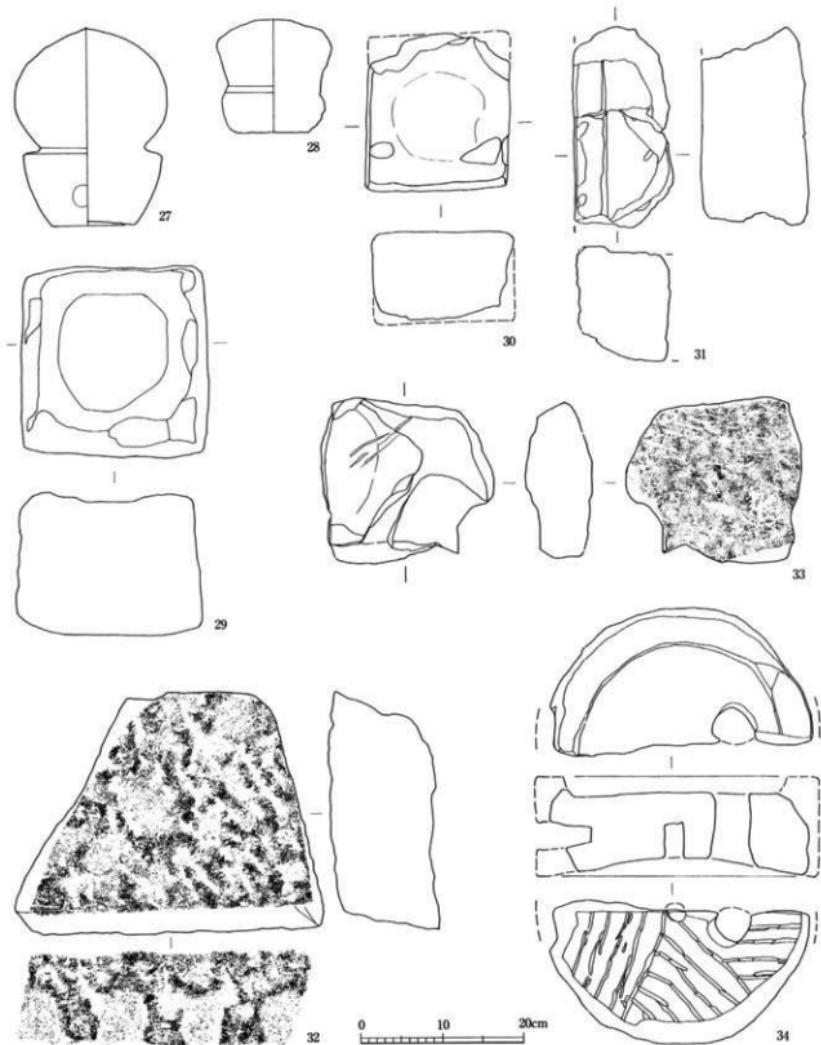
第27圖 瓦 (1:4) SX18 (8·10·15·16) SX32 (6·11~14) 他包含層



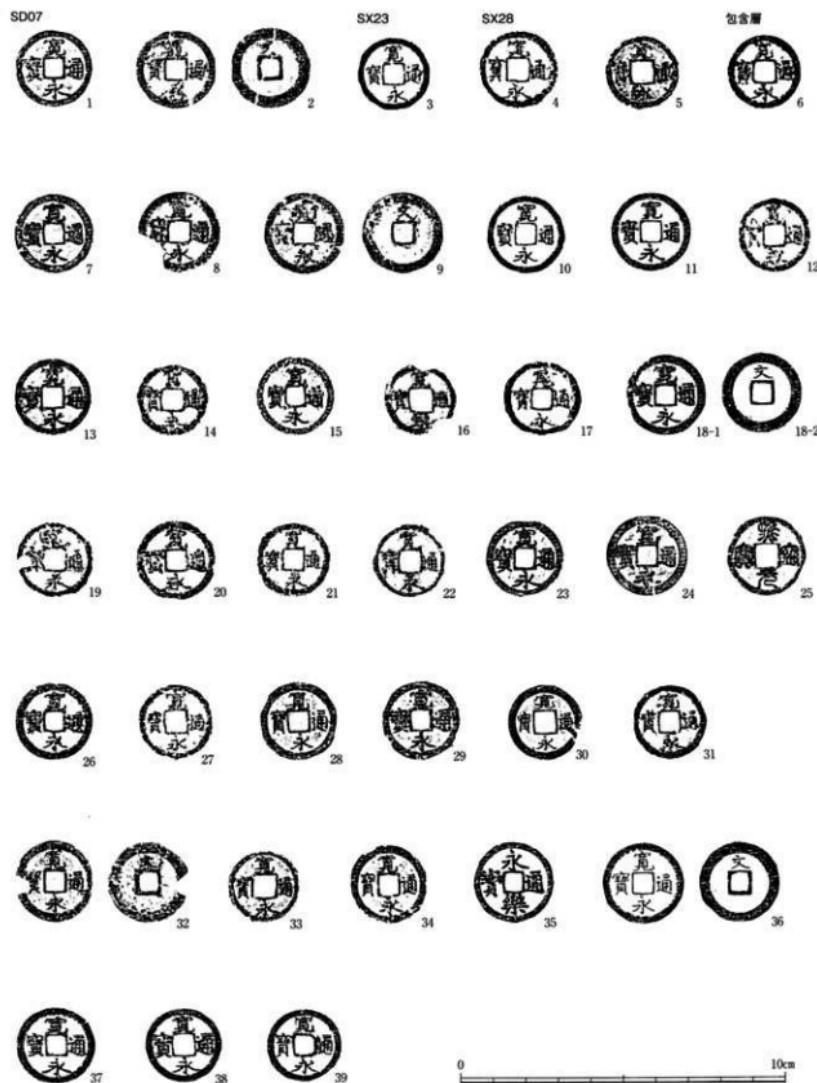
第28図 石器・石製品(1) (1 : 3, 1 : 4) SD05 (6) SD10 (5) SX18 (8・10) SX22 (11) SX24 (2) 披整地刷・包含層



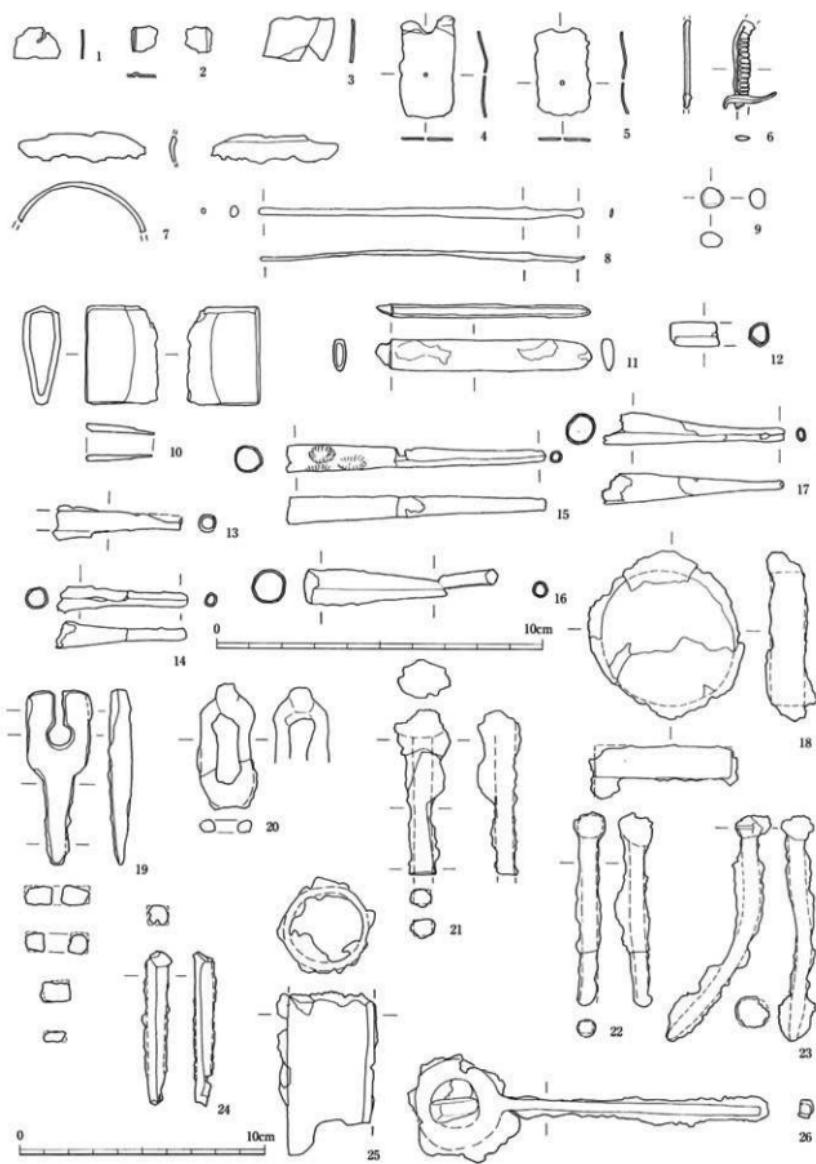
第29図 石器・石製品(2) (2:3、1:3、1:4) SD07 (13) SX18 (15・21) SX44 (12) 他整地層・包含層



第30図 石器・石製品(3) (1 : 6) SX31 (28) P.103 (33) 他包含層



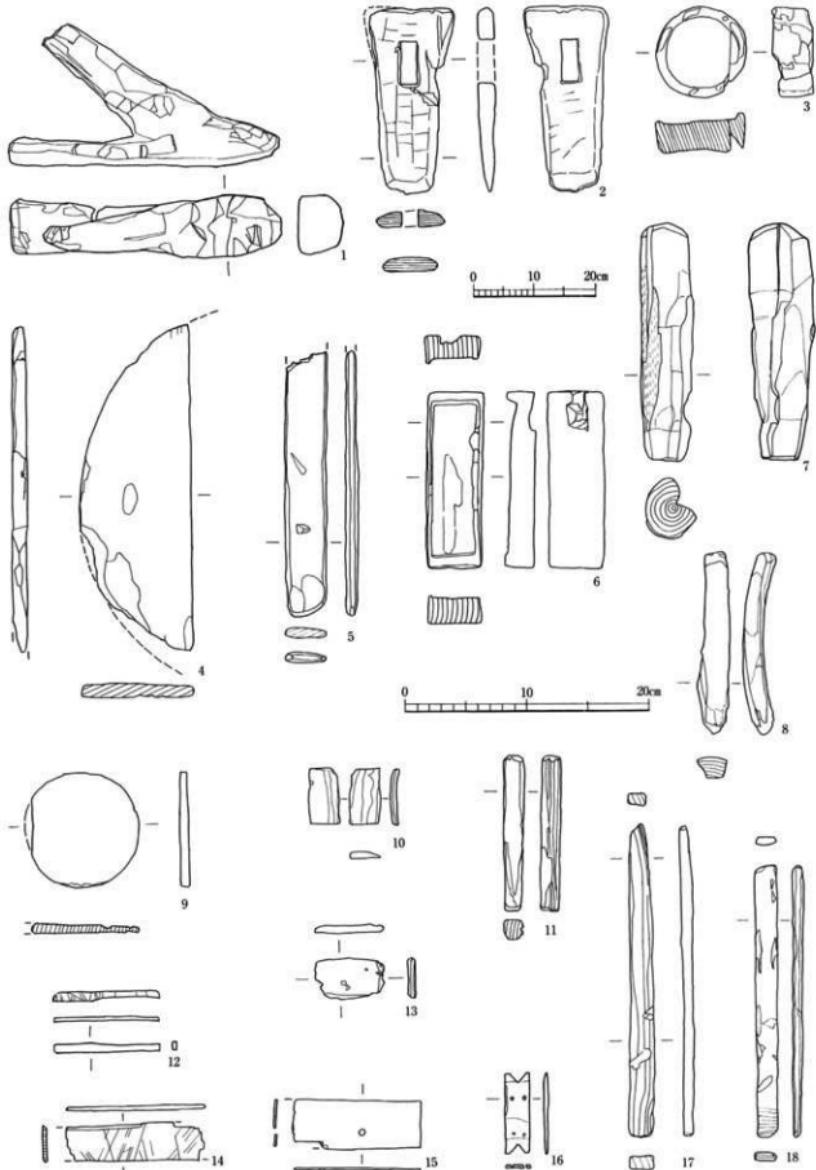
第31図 錢貨 (2 : 3)



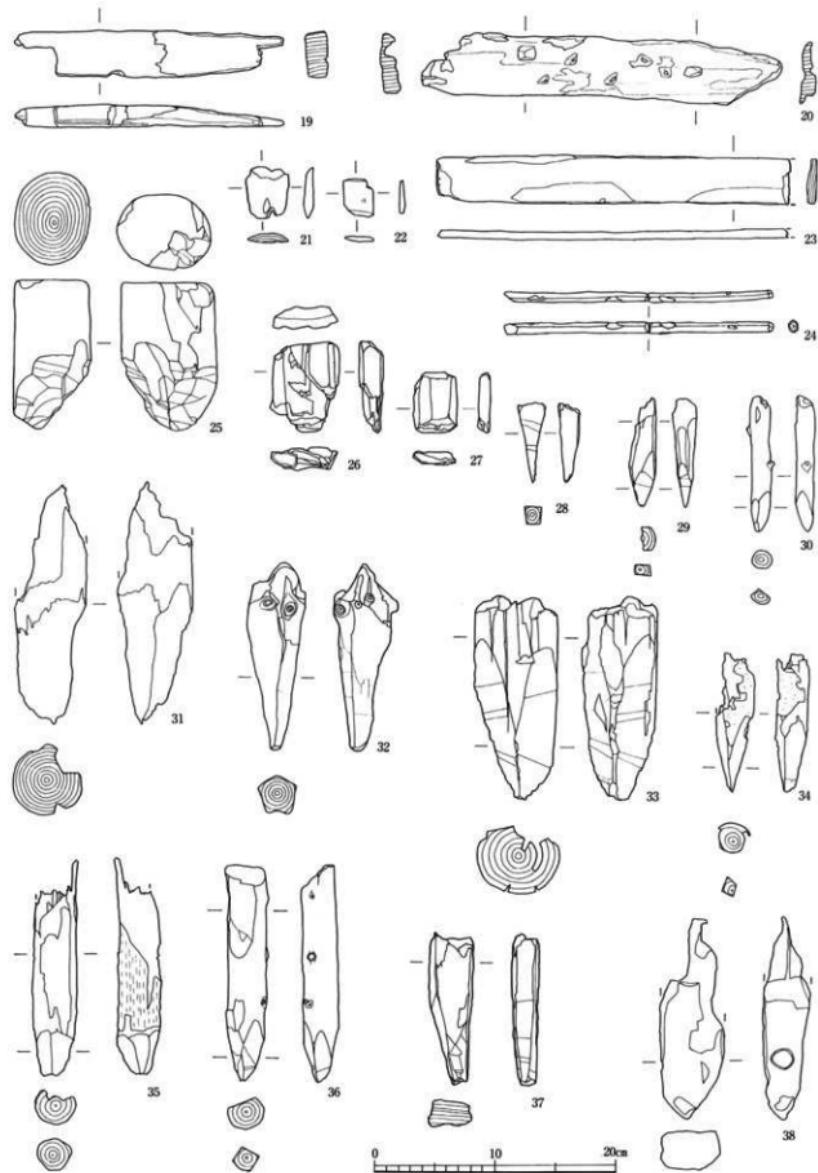
第32図 金属製品 (2:3, 1:2) SD07 (13・19) SD09 (7) SX18 (25・26) SX40 (3) 他整地層・包含層



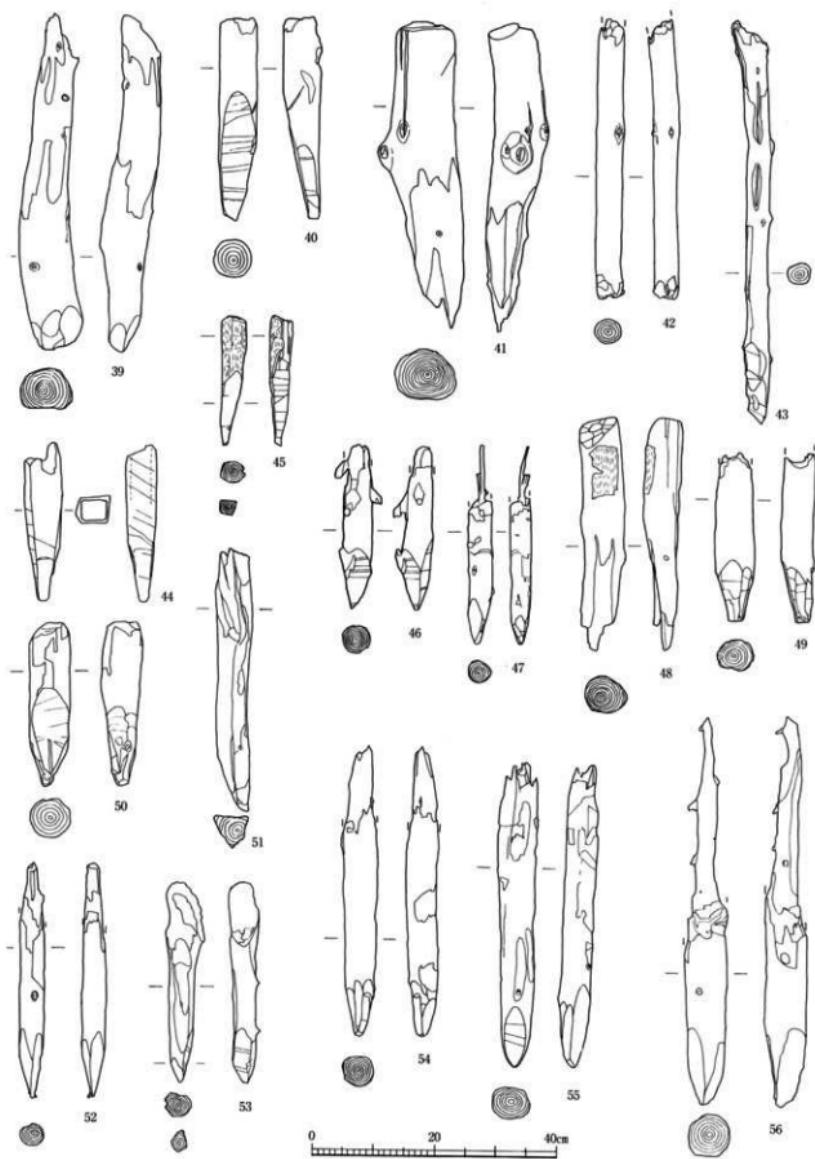
第33図 銀治関連遺物 (1:3)



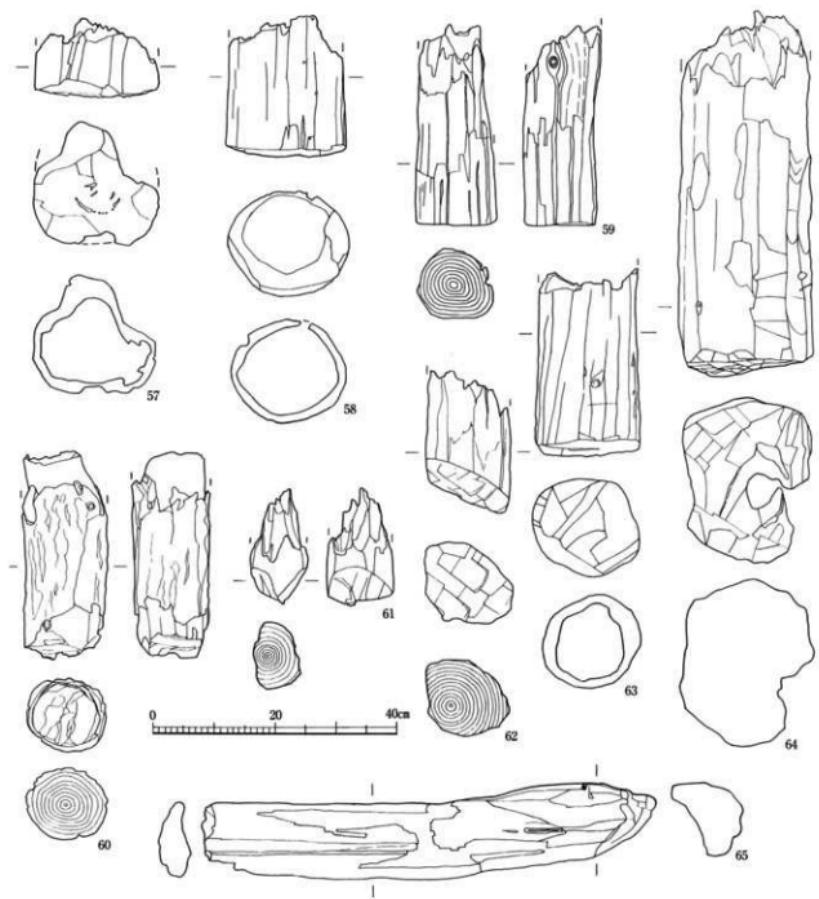
第34図 木製品(1) (1 : 4、1 : 8) SD13 (1・2) SD05 (3) SD07 (4・5・7・8) SA05図版2 (18) 他包含層



第35図 木製品(2) (1 : 4) SD07 (19~22・26) SE02 (23) 桁列 (31・32・36~38) 他包含層



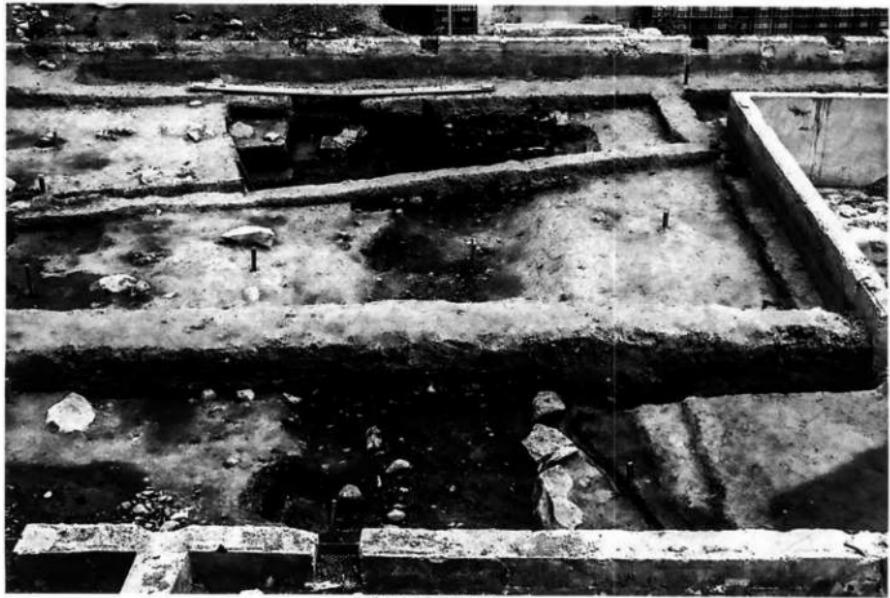
第36図 木製品(3) (1 : 8) 斜列 (39~43・45・47・50・53~56) 他包含層



第37図 木製品(4) (1 : 8) SA05擦方1 (57) 擦方2 (58) SB08擦方1 (62) P.46 (63) 枕列 (59・61・64) 他包含層



1. 溝 SD07 検出状況（北より）



2. 溝 SD07 完掘状況（北より）



1. 再建福正寺跡全景（西より、上方に妙福寺参道と冠木門）



2. 織石建物SB07（南より）



1. 東堀 SD05 と柱穴群（西より）



2. 東堀 SD05 と障子堀と柵列 SA05（東より）



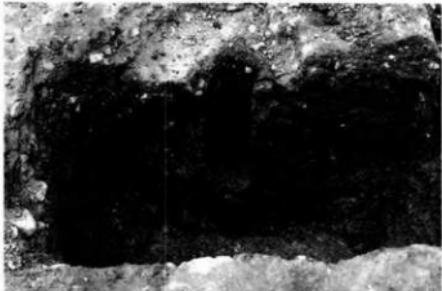
3. 東堀 SD05・柵列 SA05（南より）



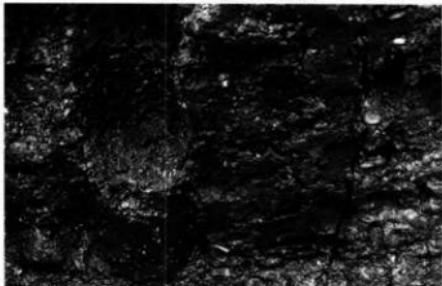
4. 東堀 SD05（東より）



5. 柵列 SA05・掘立柱建物群（南より）



6. 柵列 SA05 挖方 2 と柵痕跡



7. 柵列 SA05 挖方 2 と越中溜戸（中央下）



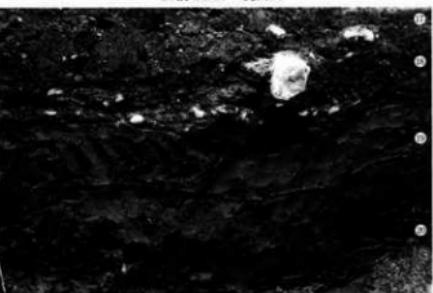
1. 溝 SD07 護岸用石組



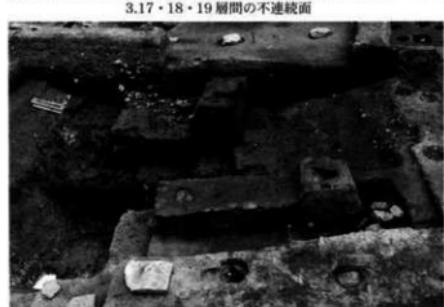
2. 溝 SD07・杭列A



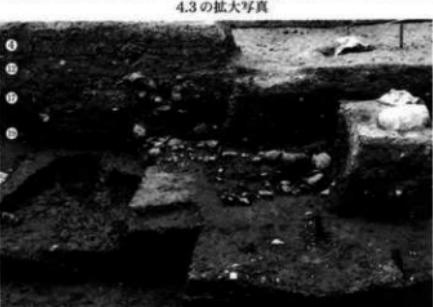
3.17・18・19 層間の不連続面



4.3 の拡大写真



5.17 層中の磚層



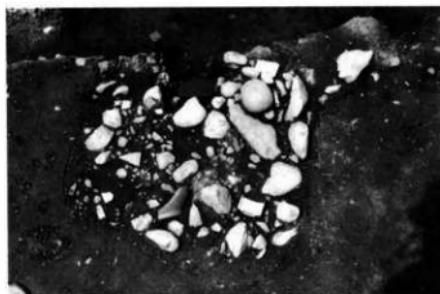
6.5 の拡大写真



7. 再建福生寺礎石・整地層と上位層



8. 磁と鏡の出土状態



1. SX18 上層



2. SX18 下層



3. SX32



4. SX23・24・28・29・42



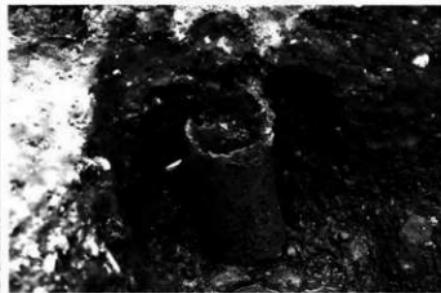
5. 再建福正寺整地層内の肥前陶磁 (22)



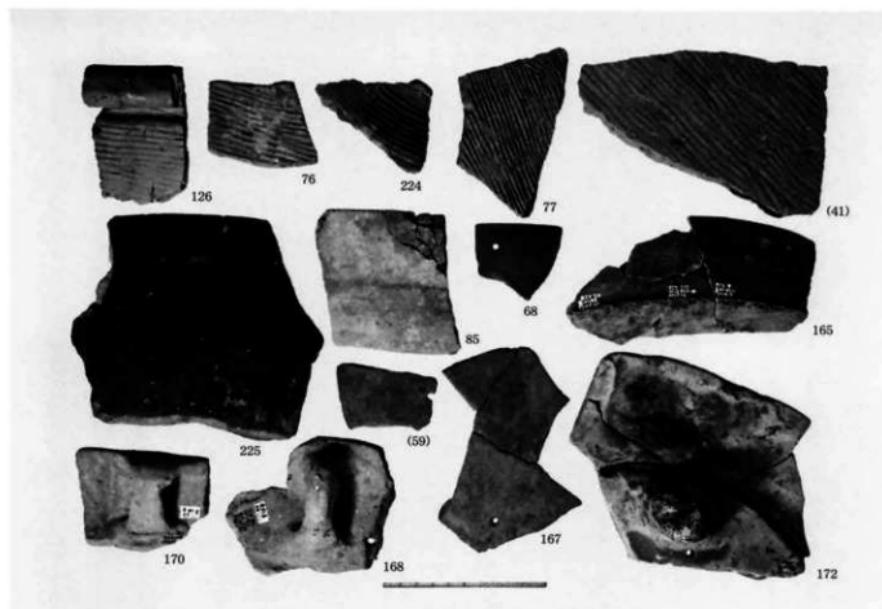
6. 再建福正寺整地層内の方室香炉 (139)



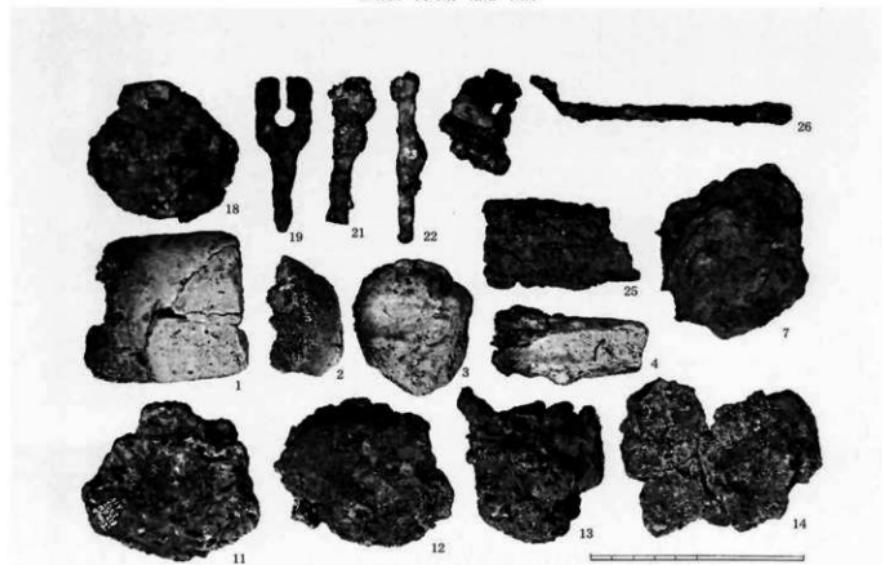
7. 再建福正寺整地層内の方室窯製品 (161)



8. ピット (側方) 46と柱底



1. 珠洲・内耳鍋・熔渣・火鉢



2. 鉄製品・輪羽口・鐵津



1. 木製品(曲物ほか) 2. 粉挽き臼 3. 長床基・壺 4. 石盤・石盤 5. 砂石・磨石 6. 五輪塔

(伝)願生寺跡

## 例言

1. 本書は「中山間地域等直接支払い事業ため地造成」に伴う「(伝) 須生寺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 使用した地図は国土地理院発行の25,000分の1（使用許可基準範囲内）、縮絃図全圖2,500分の1をもとにした。
3. 発掘調査の測量は簡易邊り方実測法で実施した。なお国際座標系世界測地系である。
4. 発掘調査及び報告書作成にあたって以下に業務委託または協力を得た（敬称略）。
  - ・飯綱町中山間地域等直接支払い事業上平担当部長 原田善美
  - ・測量（株）共栄測量設計社
  - ・人骨鑑定 京都大学名譽教授茂原信生
  - ・調査地周辺出土五輪塔撮影 高野智彦（所有者）
5. 報告書作成にかかる作業分担は下記のとおりである。

遺物整理・注記	峯山真庄美	石器実測・トレース	小柳義男	土器ほか実測	横山かよ子
土器トレース	富岡鹿子	遺構図トレース	レイアウト	横山・富岡・柳澤まち子	
6. 著筆は第1～3章は横山が第4章は笠澤治が分担した。
7. 本書の図表は横山が行い、笠澤の校閲を得た。
8. 遺跡の記録類、出土遺物は飯綱町教育委員会が保管している。

## 凡例

1. 遺跡名は「(伝) 須生寺跡」とし、記号は「GS」とした。これは奉札村遺跡群分布調査報告書（2000）記載「須生寺跡」名の変更に伴うものである。
2. 遺構記号は以下のとおりである。

SA	柱列	SB	獨立柱建物	SK	土坑
----	----	----	-------	----	----
3. 遺構・遺物の実測図の縮尺は概ね下記のとおりである。

全体図	1:200	掘立柱建物・柱列	1:80	土坑	1:40	火葬施設	1:20	火葬墓	1:40
石器	1:2	・1:3	土器	1:4	土器拓影	1:3	砾石	1:3	とした。
4. 遺構実測図において転石帯、焼土、炭化物、灰の検出部分はアミ掛けで表した。
5. 遺物実測図において須恵器、珠州の断面を黒塗り、黑色土器の内面、灰釉陶器の断面をアミ掛けとした。

## 目 次

序言

凡例

目次

第1章 調査の概要 .....	99
第1節 調査に至る経緯 .....	99
1. 調査の目的と調査に至る経緯 .....	99
2. 調査体制 .....	99
第2節 調査の方法 .....	100
1. 調査の方法 .....	100
2. 基本土層 .....	100
3. 調査日誌（抄） .....	100
第2章 遺跡の環境 .....	102
第1節 遺跡の位置と歴史的環境 .....	102
1. 遺跡の位置 .....	102
2. 歴史的環境 .....	103
第3章 遺構と遺物 .....	105
第1節 遺構 .....	105
1. 遺構の種類と分布 .....	105
2. 古代の遺構 .....	105
土坑 SK01・土坑 SK02・土坑 SK03・ピット群	
3. 中世の遺構 .....	105
(1) 堀立柱建物 SB01    (2) 横列 SA01    (3) 火葬施設 SK06    (4) 火葬墓 SK04	
第2節 遺物 .....	107
1. 縄文時代の遺物 .....	107
2. 古代の遺物 .....	107
3. 中世の遺物 .....	107
第4章 成果と課題 .....	108
1. 火葬墓と火葬施設 .....	108
2. 善光寺平の中世火葬墓 .....	108
3. 願生寺との関係 .....	109

引用・参考文献

図版

写真図版

あとがき

## 図目次

第1図 グリッド設定図	101	第6図 土層図	112
第2図 (伝) 順生寺跡位置と周辺の遺跡	102	第7図 火葬施設 SK06発掘図	113
第3図 地形図	104	第8図 土坑 SK01・SK05・SK02・SK07、火葬墓	
第4図 発掘全体図	111	SK04	114
第5図 掘立柱建物 SB01、横列 SA01	112	第9図 出土遺物	114

## 写真図版目次

PL1 1. 遺跡遠景(東より)	2. 調査区全景(北より)	
PL2 1. 掘立柱建物 SB01・横列 SA01(北より)	2. 火葬墓 SK04(北より)	3. 火葬施設 SK06(北より)
4. 土坑 SK02(東より)	5. 火葬施設 SK06(骨出土状態)	
挿入写真1 遺跡近景(東より)		104
挿入写真2 調査地隣地出土五輪塔(高野智彦氏所有)		107

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

#### 1. 調査の目的と調査に至る経緯

平成21年度中山間地域等直接支払い事業により、飯綱町大字平出字上平出1764-2番地において農業用ため池造成を行う旨、飯綱町上平出支部から飯綱町教育委員会に遺跡照会があった。この場所は遺跡の概要がわかつてないまでもまさしく薬生寺跡とされている場所であることから9月18日に試掘調査を実施した。その結果土師質土器を伴った小穴が検出され、本調査を実施することとなった。

#### 2. 調査体制

##### (1) 発掘調査（平成21年10月1日～11月20日）

調査主体者	飯綱町教育委員会教育長	柘澤 審
事務局	教育次長	長澤照和
	生涯学習担当企画員	柴木克裕
	生涯学習担当主査	小山丈夫
	産業建設課主査	久保田和祐
調査団長	飯綱町埋蔵文化財調査整理特別指導員	笠澤 浩
調査担当者	飯綱町埋蔵文化財調査整理指導員	横山かよ子
調査補助	飯綱町埋蔵文化財調査資料整理員	高山いづ美
発掘調査協力者	小林はる江 小林美枝子 原田教子 原田光子 平井利幸 山科清美	
(2) 整理作業（平成24年）		
飯綱町埋蔵文化財調査整理特別指導員	笠澤 浩	
飯綱町埋蔵文化財調査資料整理指導員	横山かよ子	
飯綱町埋蔵文化財調査資料整理員	峯山真由美	

## 第2節 調査の方法

### 1. 調査の方法

遠跡範囲周囲の地区割りを任意に設定した北西隅  $X = 80,591$ 、 $Y = -23,591$  を起点として大々、大、小地区に設定した。I～IV 地区の大々地区 ( $200 \times 200\text{m}$ ) に区画し、さらに大々地区を A～Y の 25 区画 ( $40 \times 40\text{m}$ ) して大地区とした。その大地区を 40 区画 ( $2 \times 2\text{ m}$ ) し、小地区（グリッド）とした。小地区は起点を北西隅として南北に 1～20、東西に A～T の記号を付した。基準杭設定は業者委託（株）共栄測量設計社とし、東西方向に 2 点南北方向に 3 点を設置した。それらを基準としてグリッド杭を設定した。よって、調査地は IJ・IO の両区にまたがる。尚、BM は  $X = 80,506$ 、 $Y = -23,426$ （世界測地系）、H = 623.219m である。遺構は基準杭をもとに簡易造り方で測量した。転石帯部分についてはトレンチ調査とし、それ以外の巨石などは移動可能な限り石下部を調査した。

### 2. 基本土層

月見川の一支流左岸南北方向の山腹一帯には小規模な扇状地が並ぶいわば複合扇状地である。各扇状地は浅い谷で区切られ一枝流の侵食面とは段差となり、各小扇状地はなだらかに傾斜をした舌状台地の貌を見せる。（伝）羅生寺跡はその扇状地末端にある。

基本土層は I 層～VI 層からなる。I 層は表土で 20cm、II 層は黒色土で 14cm、III 層は黒褐色粒子を含む黒色土で 30cm 前後、IV 層は漆黒色土で 15cm 前後であるが扇端部は厚くなる（厚さ未確認）。V 層は黄褐色ブロックを含む漸移層で VI 層は地山である黄褐色粘質土（ローム層）である。

小扇状地の中央部分は転石帯があり往々 2m 前後の石塊とともに多量の安山岩の角礫からなる礫層がある（F～M、18～20）。上方からの押し出しによるもので、基盤層にも場所により角礫を含む。この転石帯の北側は IV 層（漆黒色土）が台地末端ほど厚く堆積し、大部分の遺構がここに集中する。

扇状地の現状はこうした角礫を乱積した石垣や集石を等高線に沿って組み、3～4 段の平坦部を造作し、今日果樹園としている。しかし調査の結果では、平坦部はゆるく傾斜し整地はほとんど実施していない。調査地はその平坦部の最下段であり、2 段上方の平坦部で 1 組の五輪塔が出土したという（矢野恒雄 1997）。

### 3. 調査日誌（抄）

平成 21 年（2009）

10月 1 日（木）～4 日（日）表土剥ぎ（東南～西北方向）。

10月 5 日（月）発会式。調査地北側から調査開始。グリッド設定および杭打ち。

10月 6 日（火）西側検出（I・J 列）。ピットが 11 基検出。土器器、黒色土器、須恵器裏片など少量と砾石出土。

10月 7 日（水）調査地南半分の転石帯にトレンチ 1、トレンチ 2 を設定し、重機により表土剥ぎとグリッド設定。

トレンチ 4 は崩山までの表土は浅い。台地先端・N 列調査範囲を拡大、重機で表土下を掘り下げる。

10月 9 日（金）礫群下層の検出。グリッド杭の補充設置。矢野恒雄氏来訪。

10月 13 日（火）I～L (12～15) M～N (14～15) の遺構検出。

10月16日（金）トレーニング3の南北の二層調査。

10月20日（火）精査L～N（12～16）、P.21～P.23、P.25平面実測。火葬施設に長軸・短軸に十字にサブトレーニングを設定し掘り下げる。

10月21日（水）ピット掘り下げ。矢野恒雄氏来訪。

10月22日（木）G（15～17）の調査範囲を拡張しP.40～42を精査。P.25（SK05）、土坑SK01を掘り下げる。火葬施設のプラン精査。骨・炭・灰を残して掘り下げる。ベルトの二層観察。P.47を掘り下げる。

10月23日（金）ピット掘り下げと写真撮影。火葬施設サブトンネル土層図作成。

10月28日（水）SK01の土層図、平面図作成。

10月30日（金）トレーニング3拡張部分精査。L～N・12～16検出。

11月2日（月）トレーニング3拡張部分精査、写真撮影。火葬施設平面図作成。L～M・12～15遺構検出。

11月4日（水）火葬施設の人骨取り上げ。P.55、P.58掘り下げ。

11月6日（金）火葬施設土層図作成後、掘り下げ。L～M・12～15遺構検出。SK04土層図作成。

11月7日（土）SK02土層図作成。L～M・12～15遺構検出。清掃、全体写真撮影。SK04掘り下げ。

11月9日（月）大石を除き下層を観察。柱穴検出作業、I（17～18）。平面図I～N・14～16作成。縮尺1/20。SK04構造、写真撮影。

11月13日（金）・15日（日）調査範囲南北壁・東西壁の土層観察と写真撮影。

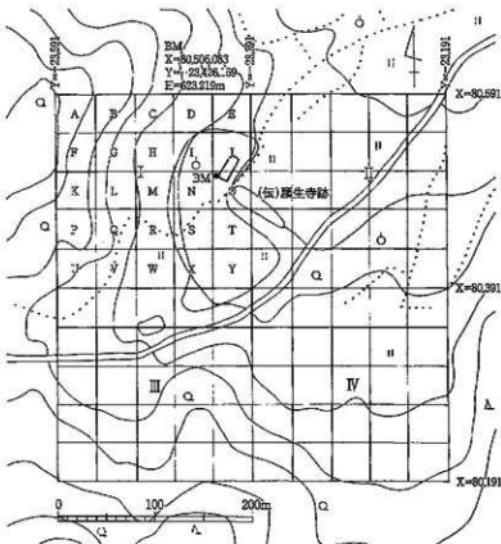
11月16日（月）南北東西の土層図作成。P.46を半割し埋立の観察と作図。

11月17日（火）降雨。地形50cmコンタ測量。柱穴半割。

11月18日（水）全体図作成。掘立柱建物の新たな柱穴検出作業G～I・12～17。

11月19日（木）掘立柱建物の新たな柱穴検出作業G～I・12～17。新しいピットP.66～70を全体図に記録。半割したピットP.09・P.11・P.14の断面図作成。

11月20日（金）最終確認。調査終了。



第1図 グリッド設定期（1:5,000）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と歴史的環境

#### 1. 遺跡の位置

(伝) 願生寺跡は長野県上水内郡飯綱町大字平出字上平出にある。

平出地籍は飯綱町南端にあり、鬱山山系で長野市若槻と、豊野丘陵で豊野町に接し、鬱山境を水源とする月見川が作った浅い谷間の平坦地とその背後の山境からなる。(伝) 願生寺跡は月見川支流の左岸に開拓された山腹上に立地する。月見川自体は背後の山境が小さいために水量も少ない小河川である。現在この水系沿いの谷地地形には棚田利用の水田耕作が、そして周辺の山腹にはりんごや桃などの果樹栽培が行われ、桃栽培による丹霞郷



第2図 (伝) 願生寺跡位置と周辺の遺跡 (1: 25,000)

は春の景勝地となっている。しかし月見川の用水だけではこの地域の農業経営には不足のため、ため池が平出地籍だけでも40ヶ所にも及ぶ。今回調査の起因となったため池造成もこうしたこの地域特有の農業経営に起因するものである。

## 2. 歴史的環境

平出は北国街道沿いに発達した集落であり、善光寺平から越後へ抜ける交通路上の要地のひとつである。古代には東山道から分岐し、越後の国府に抜けるいわゆる延喜の官道が通り、中世では矢筒城下（表可遺跡）を経て平出地籍を通り、白坂峠から豊野宿を経て長沼城に至るルートから、江戸時代以降は若狭を経て善光寺に至る北国街道が整備されるに及んで平出集落は一層の発展を遂げる。

このように平出地籍は信越間の交通の要地として地域史形成に深い関わりがあるが、これは先に述べた平出地籍の位置と地形が深く関わっている。

平出地籍の遺跡は少なからずこの地域の性格を反映している。5世紀代のこの地方唯一の前方後円墳である庚申塚古墳は叩き目文を持つ埴輪を配置していることで著明である（小柳1994）が立地位置が峰の位置にあることでも注目される。また善光寺平古代麻糸の一大生産地帯である巣山古窯址群があり、前高山古窯址群（笹澤・原田・佐藤・小林1986）、上ノ山窯址（小柳1992）、岸家遺跡（横山1998）がある。これらの窯で生産された須恵器は延喜の官道を下り善光寺平へと供給されたのであろう。

戰国期における巣山城（矢野1997）もまた甲越抗争の中で巣山山頂に構築された山城で、平出地籍に所在する意義もこうした視野のなかで理解できる。

（伝）巣生寺跡南東にそびえる巣山は南側と東側の斜面は急峻であり、自然の要害となっている。山頂は長野市と境を分け、本丸から南は長野市地籍となる。飯綱町地籍の北側は緩やかな斜面となり、堅堀、横堀の遺構が確認できる。この巣山城は16世紀中頃の信濃の領地をめぐっての武田氏・上杉氏の攻防に利用された。巣山の名前が出てくる文書に『岩船文書』（『信濃史料』12巻）がある。それには

「永禄七年九月五日、直江実綱、堀江宗親、岩船長忠ラシテ、武田信玄の軍に備ヘシメ、併せて水内郡旭口等ノ敵情ヲ探リ、之ヲ報ゼシム…敵もと…り山江小旗四五本二而毎日致武具由侯…」とある。これは直江実綱が彌江宗新と岩船長忠を武田軍に備え、水内郡の敵情を通報させた文書であり、武田氏の利用が確認でき、それまでの巣山城主は上杉氏と関係深い人物であったことがわかる。

巣山城主については「大高山巣生寺（平出巣生寺直系寺、現新潟県新井市真宗大谷派巣生寺）年歴」に「河中島合戦の時、八世祐賢は法師武即平出入道と名乗り、巣山城主として手兵を率い上杉軍に属し戦功を樹て各種の恩賞を受け、勝利の望みにより巣山城を譲り黒川祐ノ山（東黒川袖瓶巣生寺跡あり）に移り」との記述があり、ここから上杉謙信以前の城主は巣生守であると矢野恒雄氏は推考している（矢野1997）。

平出の名の初出は寺伝では丰礼本町の證念寺蔵の『方便法身尊形』の裏書に「実如 月日 坂東 信州 □□郡 平出巣生寺 真宗祐賢」とあり、永正年間（1504～1520）か、大永年間（1521～1527）のことである。文献上では、天正10年（1582）上杉景勝朱印状案知行方之覚で「百貫文鷹津領平出」とある（1969『信濃史料』補遺巻上）のが最初である。

地元に伝わる地名伝承には調査地の「寺屋敷」以外に「みどうの田（御堂の田）」「だいもん（大門）」の地名がある。これはいいづな歴史あれあい館の小山丈夫氏が、発掘調査終了後、地元の方から調査地の南方に隣接した畠田の一角を「みどうの田」と呼び、平出一袖之山間の道路に至る直線的な農道を「だいもん」と呼んでいるという伝承がある旨、教示を受けたものである。調査地の「寺屋敷」地名以外に新たに「みどうの田（御堂の

田)」「だいもん(大門)」地名が加わったことになる(第3図)。



第3図 地形図(1:4,000)



挿入写真1 遺跡近景(東より)

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 遺構

#### 1. 遺構の種類と分布

調査地は西から東にかけたやかな舌状台地にあり、先端は崖となる。調査範囲は東西15m 南北20m の300m<sup>2</sup>と転石帯内のトレンチ1~4である。検出された遺構は掘立柱建物と柵列各1基、火葬施設と火葬墓各1基、少數の土坑(SK01~07)にこれも少數のピットである。各遺構は転石帯よりも北側一帯に散在していた。ただし火葬墓は転石帯の中に認められた。各遺構は第III層の黒色土で検出された。埋土内に地山である黄褐色粘質土の粒子やブロックを含むことにより検出した。

#### 2. 古代の遺構（第8図）

土坑 SK01 台地東端に検出された平面円形で径128cm、底径75cmの土坑である。壁はほぼ垂直で深さ105cmである。井戸跡とも思われるが、台地上では湧水はこの程度の深さでは求められないし、別の機能を考えなければならない。埋土内から土器器窓片が4点出土した。

土坑 SK02 調査区中央西端の最高所にある。SK02は不定形な長径77cm 深さ30cmの土坑で土坑底に10数個の角礫がある。さらに同規模のSK07がある。

土坑 SK03 調査区東端に検出された。長径75cm、深さ15cmの不定形の土坑である。

ピット群 調査区全域に小規模なピットが散在的に認められた。大多数は中世と思われるが細部は不明である。

#### 3. 中世の遺構

##### (1) 掘立柱建物 SB01 (第5図、PL.2)

調査地中央北寄りの緩傾斜地にある。1×3間で主軸はN18°Eで等高線上にある。桁行5.8、梁行3mで、中世の遺構である。深さは60cm前後で埋土は黒色土で黄褐色粘質土粒を含むか漆黒色土である。柵列 SA01をSB01掘方1(P.52)が切る。掘方7(P.53)埋土からカワラケの小片が、掘方5(P.55)埋土から古代の黒色土器片が出土した。掘方の形状および出土遺物から中世の遺構である。

##### (2) 柵列 SA01 (第5図、PL.2)

掘立柱建物 SB01と一部重複し、掘方は梢円形で径70cm 深さ30cmである。埋土は黄褐色粘質土粒子やブロックを含み黒色土からなる柱痕跡が認められる。試掘調査時から存在が確認されており、本調査でも精査したが掘立柱遺物とする掘方は不明であり、柵列と思われるが、その構造などは明らかにし得なかった。SA01掘方1(P.52)はSB01掘方1と切り合いでSB01が新しく、近接するP.17で土器器鉢が出土するなどから中世であろう。主軸はN31°Eで掘方間隔は2.1mで2間分が認められた。ただし同一線上にP.46があるがP.14との間隔が4.6mあり、その間に掘方は認められなかった。よってP.46は別に考えねばならないものと思われる。

##### (3) 火葬施設 SK06 (第7図、PL.2)

調査区の中ではもっとも東寄りの崖に近い部分でII層下部で検出された。長方形土坑で120×70cm、深さ20cmである。等高線に沿って南北方向に主軸がある(N0°S)。土坑は黄褐色粘質土(V層)を埋めめており、

壁面及び床面と掘道部分は著しく焼け壁では厚さ4cmに達していた。掘道は土坑中央の床面を幅20cm深さ14cm、長辺に直交して掘り盛り、さらに東壁を貫いて壁外60cmまで設けている。土坑埋土と床面上には焼けた人骨片、焼土、炭、灰が認められた。骨片の中には左側肩平骨を含むが個体数は不明である。上田典男氏が指摘するとおり、火葬の場であり、火葬墓とするにはさらなる検討が必要であり（上田1993）、本報告でも上田氏の提言を受け火葬所と火葬墓とは区別して使用している。こうした火葬施設は善光寺平や松本平の中世墓に広くみとめられるが、本例によって島居川水系でも初めて検出されたことになる。

#### （4）火葬墓 SK04（第8図、PL2）

転石帯にいれたトレンチ3内に検出した。転石帯の一角に一部転石をぬいて設けられた土坑内に焼けた人骨碎片と炭、焼土を埋納した中世墓である。土坑は不定形で長径120cm、深さ40cmであり、壁・床には焼けた痕跡は認められなかった。

## 第2節 遺物

調査地の北東域のⅡ、Ⅲ層及び掘立柱建物、横列、土坑SK01埋土内から出土した。縄文時代早期の山形押型文土器1、搔器2、平安時代の土師器壺、黒色土器壺、灰釉陶器光ヶ丘1号窯期の碗、中世の土師器皿（カワラケ）、内耳鍋底部、土師器鉢底部片、珠洲・瓦質の擂鉢、鉢と砥石がある。

### 1. 縄文時代の遺物（第9図）

山形押型文土器（2）1片が出土した。厚さ8mmで胎土内に風化した長石粒を含む。石器は頁岩製の大型搔器（1）と黒曜石製の搔器（3）がある。大型搔器は全長13.7cmで側刃に僅かに調整がある。以上は押形文土器に伴う石器であろう。他に黒曜石製の剥片1点がある。

### 2. 古代の遺物（第9図）

平安時代の土師器・黒色土器・須恵器と灰釉陶器がある。いずれも小破片で総数は78点である。壺類は土師器で総数35点あり、そのうち20点が黒色土器である。壺は煮沸用の土師器壺片38点と

貯蔵用の須恵器壺片3点の計41点である。土師器壺は叩き目のある北信型（7・8）を主に北武藏型・小型壺が少数であり、須恵器壺（9・11・12）では内面に青海波文をとどめる。灰釉陶器は手付瓶（6）と碗の各1点がある。碗の見込みに刷毛目痕をとどめるところから手付瓶とも東濃系の光ヶ丘1号窯期のものと思われる。微細な破片が多く、詳細は不明であるが出土資料を見る限り須恵器壺を欠くこと、黒色土器壺が多数を占めること、多様な土師器壺と灰釉陶器などから9世紀後半以降の土器類である。月見川沿いの谷水田を開拓した人々の居住地の一角が遺跡内にあると思われるが、周辺部にある前高山古窯址群との関係も注意しなければならない。

### 3. 中世の遺物（第9図）

土師器皿（カワラケ）4点（13・14）、内耳鍋6点（16）、瓦質土器擂鉢1点（10）、鉢2点（15・17）とV期の珠洲壺（壺）1点（11）、器種不明の土師器底部片1点（18）と梶花凝灰岩製の砥石1点（20）がある。資料は細片のため詳細は不明であるが、瓦質土器や珠洲から15世紀後半から16世紀代の中世後期の戦国期のものであろう。18は底径22.5cmの大型器種で器壁は2.2cmと厚く器面はユビでナデ整形している。体部立ち上がり部に一条の粘土帯を雜に貼り付け、指でナデしている。底部は体部器壁に比較して薄く、底部外面に離れ砂が付着している。胎土には雲母を含ませるなど底部の属性とともに内耳鍋と共通する。鍋としてとらえておく。鉢（15）は口縁部片で端部は内傾し、頸部で僅かに外へ張り出す。巻き上げロクロ成形である。



挿入写真2 調査地隣地出土五輪塔（高野智彦所有）

## 第4章 成果と課題

### 1. 火葬墓と火葬施設

(伝) 願生寺跡からは発掘調査の結果、绳文時代早期の押運土器と石器、平安時代の土器片と中世の遺構と遺物が得られた。绳文時代や平安時代では遺物はごく少量であり遺構も少ない所から遺跡の中心地からははずれたものと思われるが、小規模台地上の遺跡例を新たに加えることができ大きな成果のひとつであるが、ここでは遺跡名にもあるとおり中世の遺構・遺物から願生寺について検討を試みる。

検出された中世の遺構は1×3間の掘立柱建物1棟と横列1基、火葬施設(火葬土坑)と火葬墓各1基である。他に少數のピットや土坑などがある。すでに述べたとおり、これらは中世後期、15世紀後半から16世紀代のものである。ピットからは鏡と思われる土器底部が出土している。他に包含層出土資料ではあるが、土器器皿(カワラケ)、内耳鍋、瓦質土器の擂鉢、珠洲V形の毫片があり、遺構の時期を示すものである。

遺構は調査地の台地中央の転石帯北側に1棟の掘立柱建物と横列が重複し、崖寄りの台地先端に火葬施設がその南寄り転石帯の中に火葬墓がある。転石帯は押し出しによる大小転石の集積からなりその切れた空間に1基の火葬墓を設置していた。転石には径2mを越える大石も含まれ、それ故にこの部分の調査はトレンチ調査で終わつたが、大石の間に火葬墓がさらに設置されていた可能性がある。山形県立石寺の山内の岩窟における供養塔と納骨(道月1976)を連想させる。あるいは中野市西山中世墓地(権原2010)などに見られる集石と同様に転石を窓の河原に見たてた地蔵信仰と関係があるものと思われる。納骨と墓地とは厳密には区別して考えねばならぬが、これらも含めて検討する上で転石帶内の火葬墓の在り方は今後注意してゆかなければならぬ課題と思われる。その意味でも転石帶内の調査をいま少し続けるべきであったと反省をしなければならない。

調査地の3段上方の平場状の畠地では五輪塔1組が出土している。火葬墓からは水平距離で60m、高低差は10mである。五輪塔は4石でそろいであるが組合せが正しいかどうかは疑問である。地下にはまだ埋まっているとのことであるが未確認である。現在別地に移転されている。いずれにしても発見者の言葉からは相当数の五輪塔があることによって遺跡一帯は善光寺平に多い五輪塔を伴なう火葬墓であることが想定される。以下この点を発掘例とともに検証する。

### 2. 善光寺平の中世火葬墓

善光寺平の中世墓は長野市松原遺跡(上田・賀田2000)に端的に示される。中世集落内の土坑墓主体の土葬墓群に対して背後の山腹(山麓斜面)には、階段状に整地されたテラス上に火葬骨を有機質または少數の珠洲の藏骨器に入れて埋納した火葬墓とそれにそわせた多數の五輪塔群からなるもので、きわだつた対称を見せてている。両者には、少數ではあるが火葬施設が伴なう。平地における五輪塔を伴なわない土坑墓群はかつて千曲市城ノ内遺跡で調査した(篠澤・岡田1969)が、墓群としての調査例は意外と少ない。

善光寺平で調査された中世墓を立地及び墓の様相から以下に分類する。五輪塔を伴なう火葬墓群をA、松原遺跡や城ノ内遺跡の五輪塔を伴なわない平地の中世墓をB、中野市建店寺遺跡(権原2010)など寺院内の墓をCとすれば、善光寺平の調査された中世墓の多くはAである。Aは山麓にある坂城町觀音平経塚(若林1999)、中野市対面所(中島1998)、西山中世墓址、清水山中世墓址(中野市教育委員会1994、権原2010)などA1と、長野市三才遺跡(上田1998)のように平地にあるA2がある。A1には経塚と一体である觀音平経塚の中世墓や板碑が伴なう清水山中世墓などの相異もある。平地にあるA2型は掘立柱建物からなる集落域の一角にあり、調査例

は意外と少ないが中野市吉田五里原遺跡がこの例である（榎原2010・吉原2011）。このほか小布施町玄熙寺・飯田氏居館遺跡（土屋・中島・難田1997）や飯綱町夜可遺跡（佐澤・原田・小林2014）などのように当初の設置地を離れ、戸井や流路の石組、上水施設などの用材に転用され、本来の墓が付近に想定される例、五輪塔出土地や各地に残る「五輪」堆名などを加えたならば中世墓はさまざまな形態が予想される。特に善光寺境内地（宿野2000）や善光寺背後の花崗平など（小山2000）の五輪塔や宝篋印塔・板碑などの供養塔出土を加えると中世の葬送儀礼に係わる考古学資料は多様であり、善光寺信仰も含めたさまざまな視点からの検討が必要であり、中世墓も地域・時間、そして寺院や宗派の影響も含めて多角的に検討が必要である。特に五輪塔を伴う火葬墓群は例えば榎原氏は中野市内の発掘資料をもとに造墓集団の階層について考古学資料を個々に検討し、そこに国人層の興与を想定している（榎原2010）。坂城町鶴音平経塚や中野市対面所遺跡の報文中にはその造墓立地から北信の有力国人村上氏や善光寺との関係も述べている。五輪塔などの中世の石塔類の製作とその建立には多大な労力と思想的背景を考えねばならず、石塔類の生産集団や寺院の存在を無視して成立しないからである。（伝）願生寺跡は山腹上の高台にあるA1型の中世墓となる。しかし五輪塔出土地点と火葬墓・火葬施設が検出された調査地の間が全く不明であり、火葬墓に五輪塔が伴なわないなどの相違もあるが、A型のバラエティーとしてここではとらえておく。

### 3. 願生寺との関係

「願生寺跡」とした埋蔵文化財包蔵地（牟礼村教委2000）の根拠は矢野恒雄氏の『牟礼村誌』の記載にもとづき、骨子は私見を加えてあれば以下の3点である。

1点目は飯綱町豊念寺所蔵の「方便法身尊形」の裏書「実如 月日 坂東 借州□□郡 平出願生寺 祖主祐賀」と妙高市新井除戸真宗大谷派願生寺の「大高山願生寺年歴」を基本史料としている（矢野1997）。両史料がいつ書かれたか不明であり云わば「寺伝」と云うべき史料と思われる。

2点目は願生寺と（伝）願生寺跡の南方にある山城齋山城との関係である。齋山城は甲成の争いの中で上杉方の前駆基地として、川中島の戦いにおいて上杉方の山城として重要な役割を負っていたが、矢野氏はこれより前は「大高山願生寺年歴」の記載による「八世祐賀は法師武即平出入道と名乗り、齋山城主として手勢を率い上杉軍に属し戦功をたてた」とある記載により、願生寺が城主であり、位置的関係から調査地を比定地としたのである。これについては遠藤公洋氏が齋山城の構造上の分析を通して、上杉方が構築したと云う見解（遠藤2009）によれば、矢野氏の見解と異なって来る。齋山城がいつ作られたかに保証して来るのである。つまり遠藤説に従えば、上杉方の築城ということになるが、築城時期の問題は先述には発掘調査によらなければならない。むしろ、ここでは「寺伝」によるとは云え願生寺が一向宗寺院として、平出の差にあり、上杉方の一大武力として存在していたことである。北信地方の一向宗寺院が「芋川の乱」で大きな役割をはたしたことは池上裕子（1998）や小山丈夫氏（2000）があれでいるし、筆者も同説を引用しながら本書前編第5章であふれた。

（3）3点目は「寺屋敷」などの地名、北国街道成立前の古道や古地形、平出集落との関係、とくに調査地における五輪塔の出土地については「寺屋敷」の地名とともに願生寺比定について大きな根拠としていた。

以上矢野恒雄氏の説を中心に願生寺に係わる事項について述べて来たが、発掘調査では寺院跡は検出されず、願生寺比定地は中世墓域であることが明らかとなった。墓域が寺院内に設置されるのは江戸幕府の寺制度（榎原2000）によるものである。中世社会では僧侶やごく一部の上層国人層などで、一般的ではない。もっとも北信地方では中世寺院の発掘調査例がほとんどないので、今後の課題であるが、五輪塔が出土したから、それを持つて供養地とすることはできても、墓地とすることはできないし、供養塔・墓地と寺院との三者関係は短絡的に結

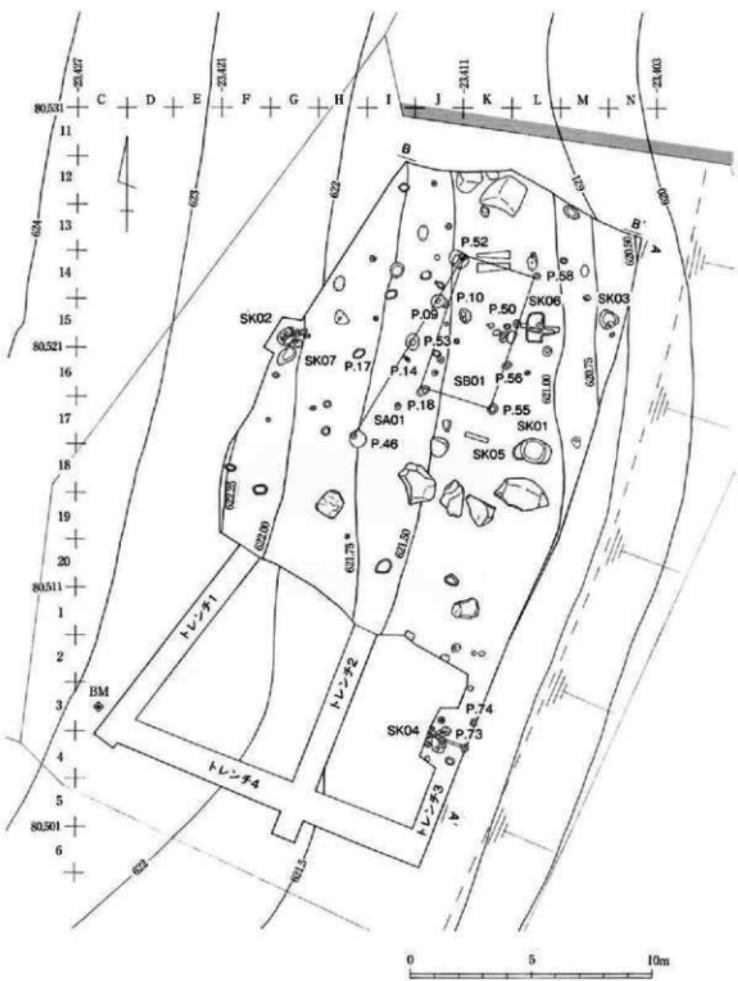
び付けられるものではない。

最後に並んで伝承としてある「みどうの田（御堂の田）」「だいもん（大門）」について述べる。いずれも調査並に近い平昌から袖之山方面に丸う道路沿いの畠田の一角にある。「大高山願生寺年歴」には八世祐賢の性格が上杉方の武将としての侧面が強く記載されており、恐らく願生寺は堀で防衛された施設が考えられ、この点からも台地上にある調査地ではなく、巻山北麓の月見川支流沿いの「みどうの田（御堂の田）」伝承地が願生寺跡比定地としては最有力地となり、調査地が願生寺と係わりのある中世墓地となる。堀立柱建物跡は火葬に係わる施設であるかも知れない。

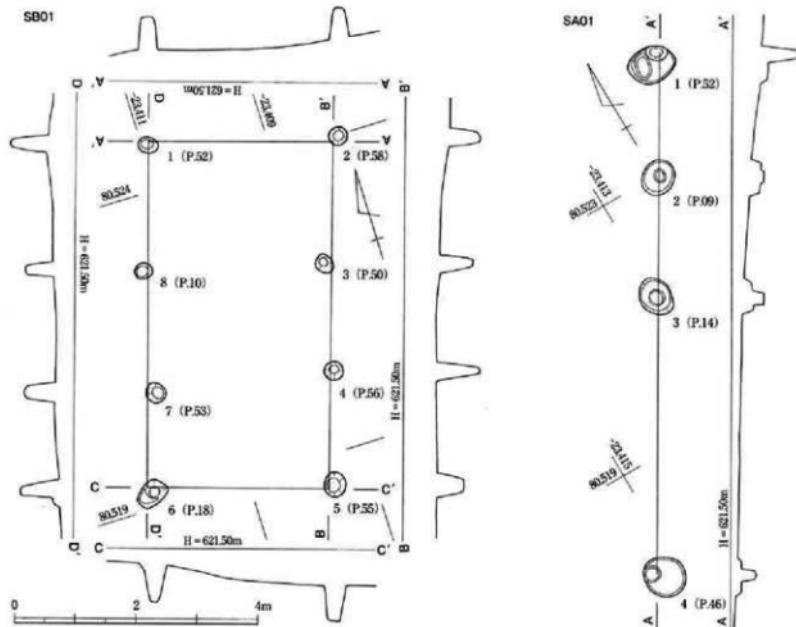
今次調査によって願生寺や巻山城に係る資料が得られたことは最大の成果のひとつであり、不確定要素が多いものの、城館的性格が強いと考える願生寺と恐らく一体と考えられる墓域の調査例は数少ない中世史解明に新たな資料が加えられたことになる。

#### 引用・参考文献

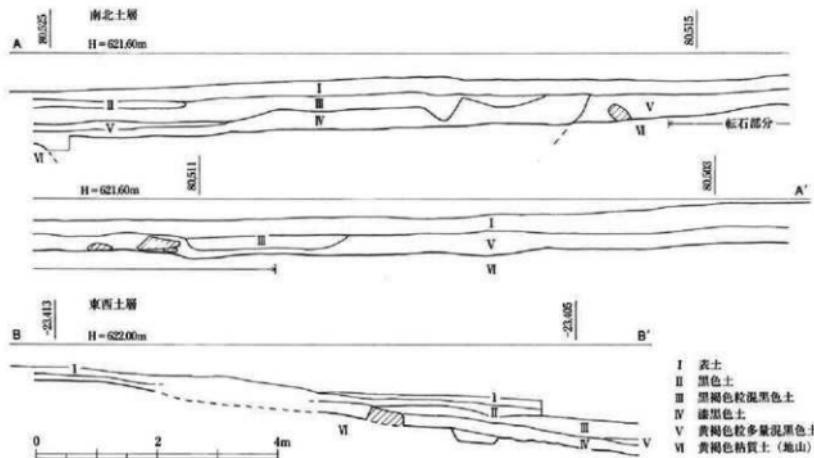
- 池上裕子 1998 「戦国期北信の武士と上杉氏の支配」『史料研究ながの』第5号
- 上田典男 1993 「長野県における中世の『火葬施設』をめぐって」『帝京大学山梨文化財研究室』16号
- 上田典男・鷲田 明 2000 「中世以降の調査」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5—長野市内その4—松原遺跡・古代・中世・本文編』長野県埋蔵文化財センター
- 上田 真 1998 「浅川原状跡遺跡群三才遺跡」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その2』長野県埋蔵文化センター
- 遠藤公洋 2009 「磐大城と長野県北部の城館遺跡一横堀遺構に着目した再評価の視点ー」『市誌研究ながの』第16号
- 遠藤公洋 2013 「巻山城」『美濃県の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版
- 小柳義男 1992 「平出造跡群発掘調査報告書」牛込村教委
- 小柳義男 1994 「庚申塚古墳発掘調査報告書」牛込村教委
- 小山丈夫 2000 「石造文化財」『長野市誌 第二巻 聖史編 原始・古代』
- 小山丈夫 2000 「戦国時代の大三莊」『豊野町の歴史 豊野町誌2』豊野町説明会
- 佐澤 浩・原田勝美・佐藤慶二・小林 卑 1986 「若高山窟跡群」牛込村教委
- 佐澤 浩・岡田正彦 1969 「更埴市城ノ内遺跡」『信濃考古学』No.27 長野県考古学会
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料」第12巻
- 信濃史料刊行会 1969 「信濃史料」補遺巻上
- 宿野隆史 2000 「大本願院照殿地点の調査概要」『長野遺跡群・元善町遺跡・善光寺門前町跡(2)』長野市教委
- 権原長則 2010 「中野市の中世墓跡と関連する遺跡」『考古学からみた高社山周辺の歴史』しなのき書房
- 土屋 積・中島英子・鷲田典昭 1997 「飯田古里敷遺跡」「玄照寺跡」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—小布施町内・中野市内その1・その2—」長野県埋蔵文化財センター
- 鷲田典昭 1997 「牛出古窯遺跡—中世以降の遺構と遺物」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13—小布施町内・中野市内その1・その2—」長野県埋蔵文化財センター
- 中島英子 1998 「対面所遺跡」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14—中野市内その3・豊田村内—」長野県埋蔵文化財センター
- 中野市教委 1994 「南木山古窯跡発掘調査報告書」
- 牛込村教委 2000 「牛込村遺跡群分布調査報告書」
- 望月豊弘 1976 「仏教の遺跡と遺物—遺跡」『新版仏教考古学講座 第一巻 繼続』雄山閣
- 矢野恒雄ほか 1997 「牛込村誌」牛込村
- 横山かよ子 1998 「家原遺跡」牛込村教委
- 吉原佳市 2011 「五里原遺跡・吉田宮跡遺跡—市道吉田西条線築造工事に伴なう発掘調査報告書」中野市教委
- 若林 卓 1999 「頬音耳経塚」「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21」長野県埋蔵文化財センター



第4図 発掘全体図 (1:200)

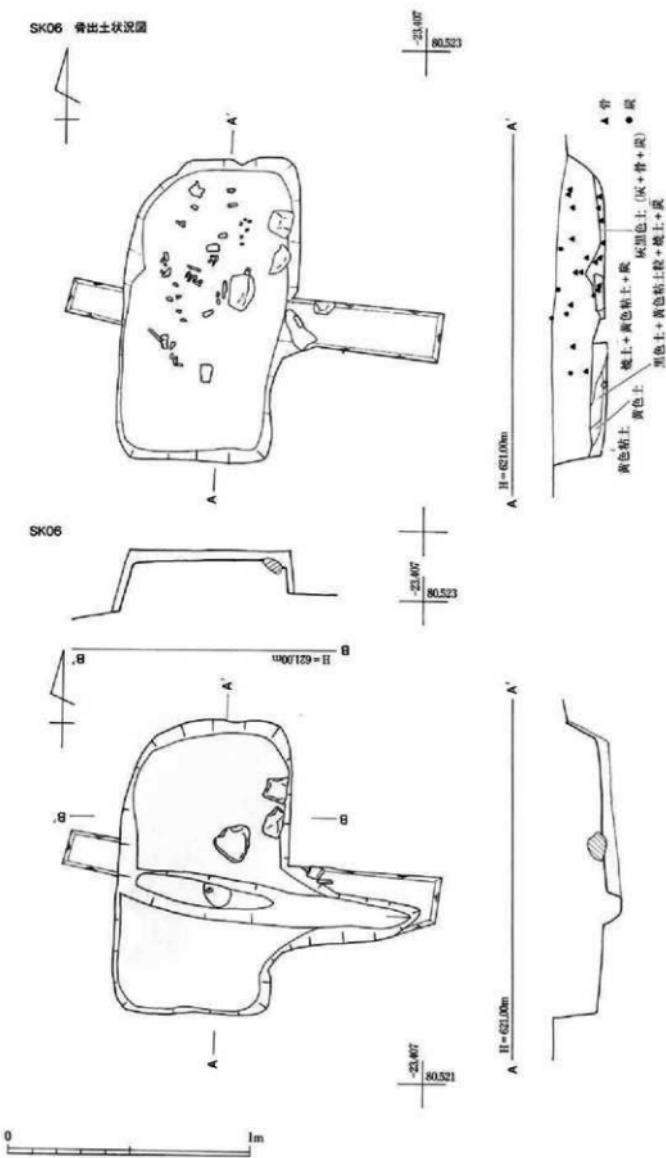


第5図 振立柱建物SB01、構列SA01 (1 : 80)

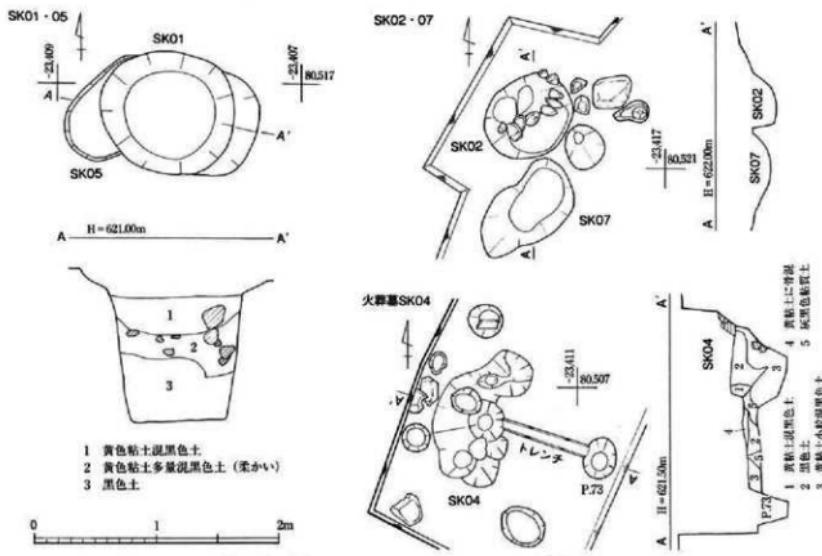


第6図 土層図 (1 : 80)

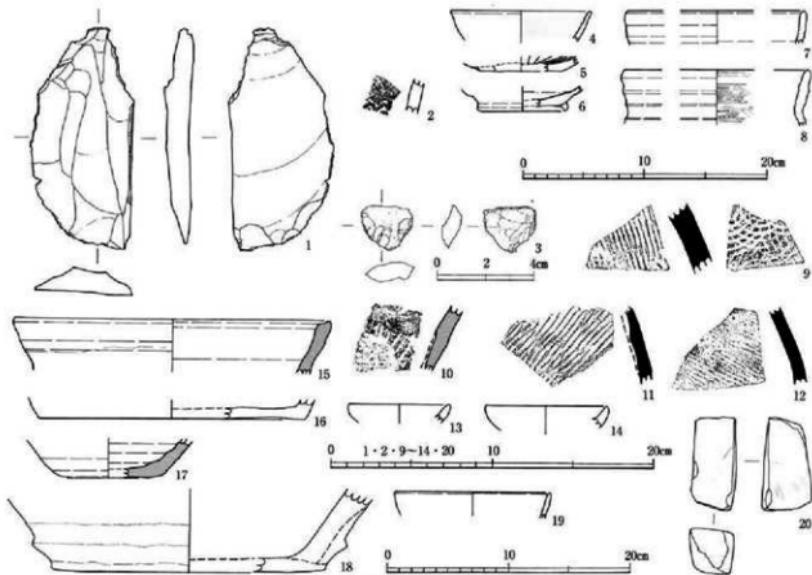
SK06 骨出土状況図



第7図 火葬施設 SK06発掘図 (1:20)



第8図 土坑 SK01・SK05・SK02・SK07、火葬墓 SK04



第9図 出土遺物 (1:3, 1:2, 1:4)



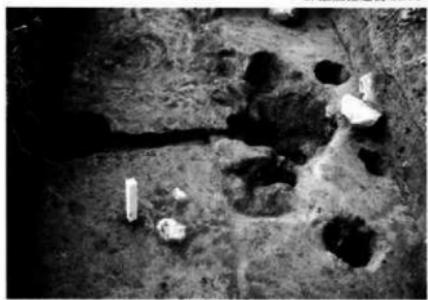
1. 遺跡遠景（東より）



2. 調査区全景（北より）



1. 墓立柱遺物 SB01・柵列 SA01（北より）



2. 火葬墓 SK04（北より）



3. 火葬施設 SK06（北より）



4. 土坑 SK02（東より）



5. 火葬施設 SK06（骨出土状態）

## あとがき

平成21年度に飯綱町内で発掘調査を担当した表町遺跡について、芋川氏館跡（第4次）と（伝）願生寺跡について報告書を刊行することができた。いずれも中世から近世または近代に遡る遺跡であり、同時代史料がほとんどなく、云はば伝承によって語られてきた遺跡である。発掘調査では伝承は底辺に置くものの、考古学上の調査を重視した。しかし、芋川氏館跡の上層遺構である再建福正寺については、明治12年前後の3点の史料をほぼ同時代史料として、調査の成果に活用した。史料を利用するにあたっては、いづれも歴史的・小柳義男・小山丈夫両氏の助言を受けた。お二人には他にもいくつかの教示を受けた。

発掘調査では検出した遺構の年代比定が欠かせない。木簡などの文字資料が出土すればかなり有益であるが、ほとんどの場合こうした資料に恵まれることはまずないので、多くの場合に指標となる土器などを使用する。表町遺跡や芋川氏館跡の溝や堀など厚い堆積層では層位ごとに出土する遺物とくに陶磁器から、各層の年代比定を行なうことは、文献との対比においても必修事項である。特に戦国期から現代まで、多様な土地利用の歴史を刻む芋川氏館跡では、地域史を明らかにする上で極めて有効であり、本報告中にその成果を示した。芋川氏館跡では、一定量の陶磁器に恵まれ、文献と併用して、整地層を含む土層の年代比定をおこなった。肥前陶磁を含む広域流通の陶磁器などは発跡資料を中心に、一型式30年前後の編年が樹立され、ほぼ全国規模で採用できる。よって、陶磁器の鑑定を長崎県埋文センターの市川恵之氏に依頼した。本報告の遺構などの年代比定は市川氏の協力があってのことである。ただし、発掘調査では可能な限り層位を重視し、必要に応じてレベルも含めて取り上げたが、複雑な低湿度特有の土層と、たび重なる土地利用もあって、一部に不徹底となり、除外した資料もある。また図面及び解説表作成も、出土状態の検討などとともに実施されたため、結果として不徹底となった。再度再構成するにしても、染付などの表現を優先として焼成による旧印刷法を採用したため、それもかなわず、不統一となつた。いずれにしても、出土状態とその記録化には相当の作業量となった。現在三次元測量による遺物の出土状態の記録化を佐久市教育委員会や長野県埋文センターなどで実施し成果をあげているので、多層にわたり遺物が出土する調査ではこうした調査法も必要かと思われるが、この場合にも、出土状態の検討は不可欠である。どちらにせよ結論を導くまでは遺物の固形化も含めて気の遠くなるような作業量を必要とする。

こうして、表町遺跡では矢筈城下である「まほろしの表町」を、（伝）願生寺跡では、鳥居川水系はじめ中世の火葬施設と墓群を明らかにした。芋川氏館跡では前回調査の成果と併せて、芋川氏館の規模が確定し、掘のすべてが累内では全例のない障子掘であることがはわかった。芋川氏の船防衛が並々ならぬものであったことが知られる。それは甲越の抗争のなかでとった芋川氏の対応策である。同様に今回初めて横列が検出された。1点の越中瀬戸小皿の出土によって、設置時期が定まり、思いもかけずに、中世から近世過渡期の徳川と上杉抗争の一端を知ることとなり、併せて芋川氏と妙福寺の密接な関係も知ることとなった。また、跡地に建てられた福正寺関連では普光寺地蔵の関与が考古学的にも実証された。

かように今次調査によって、今まで伝承や史料の一部でしかなかった飯綱町の中世以降の地域史がおほろげではあるが明らかとなった。

報告書作成にあたり、考古学・歴史学・建築史・民俗学・保存科学・植物学など多くの研究者、平出・田中地区など地元の皆さん、妙福寺住職中嶋秀靖氏、研究調査機関や工事施工業者など、なによりも発掘調査や整理作業に従事した皆さん、時間のかかる印刷方法を採用して下さった（株）信毎書籍の小山義広氏と忍耐強くサポートしてくださった事務局のみなさんに深く感謝申し上げる。

（笠澤 浩）

## 報告書抄録

書名	芋川氏館跡(第4次)・(仮)誕生寺跡						
収容名	芋川氏館跡—般磨町芋川中公会堂建設に伴う滋賀文化財発掘調査報告書 (仮)誕生寺跡—中山・賀茂地域等直接交払い事業ため造成に伴う滋賀文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
収容者名	芋川氏館跡—笠澤 浩 原田勝美 (仮)誕生寺跡—笠澤 浩 横山かよ子						
調査機関	般磨町教育委員会						
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡飯綱町大字牟礼2795-1 TEL026-253-2511						
発行年月日	2014(平成26)年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界遺産地図)			
芋川氏館跡	笠澤町上水内郡飯綱町 大字芋川字中庭 主	20590		36° 13'~ 46° 15' 28° 18'	200904.3 ~ 20090630	518.6m <sup>2</sup>	公会堂建設
(仮)誕生寺跡	笠澤町上水内郡飯綱町 大字平坂字芋出 754番地	23590		36° 13'~ 43° 14' 31° 04'	20091001 ~ 20091120	340m <sup>2</sup>	ため池造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
芋川氏館跡	塹跡	古代-近代	芋川氏館跡 東湯-摩子堀 櫛列 獨立柱造物 井戸 福正寺跡 監造署-第1次 第2次 礎石建物跡 築 犬塚 土坑 その他 枕死、ピット等、廐 廐土坑	須恵器・土器等、灰釉陶器 輪入陶器 青磁・白磁・青花 国産陶器(16c~近世) 古戸戸・瀬戸美濃 広前 越中朝日 萩 宇喜清 方舟・赤堀焼 中世須恵器・珠陶 在施產土器 - 土器器皿(カワラ ケ) 内瓦 焼物 焼器 火鉢 瓦 - 瓦瓦 瓦瓦 石製品 - 磨削白石 石棒 回石 砥石 五 輪塔 遊歩石材 石棒 石板 石碑 金萬製品 - 小僧 烏 犬 犬馬具 会釣製 品 銅製品 煙管 犬猿 犬具 紙貨(寛 永通宝・照寧元宝・水滸通宝) 木製品 - 館器 長床 着座 素 物 木製 硯 研 鐵冶製造 - 羽口 鐵滓 砕石	- 古代の集落域 - 陣子窯、窯跡 - 肥前窯器 I 期からの 搬入(粘土質・砂目質) - 磁中窯戸(1層)の小 口(複数の年代比定) - 赤堀焼 - 内耳環・培塿 - 美濃菊(一木造り)		
要約	<p>・芋川氏館跡は今次調査で東堀の位置が確定し、遺構とともにすべてが竪子堀で囲まれていたことにより、甲越抗争の中で闘争地帯にいる国人芋川氏の性格を知るとともに東堀外縁に併置された滑列は中世から近世にかけた政治的動向を反映した遺構として注目される。</p> <p>・鉢跡の上層遺構である福正寺跡は慈光寺造営で破壊後再建された施設であるが、寺跡や廐造跡後も含めて土地利用の歴史が明らかとなったことは発掘調査の成果として幹擧される。</p>						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
(仮)誕生寺跡	塹落跡	绳文時代		押忍文土器・石器			
		平安時代		土師器・須恵器・内黒土器・灰釉陶器			
		中世	獨立柱造物 櫛列、火葬施設、火 葬墓	内耳土器・カワラケ・漆器・瓦質土器・ 瓦石			
要約	・誕生寺跡は未検出。しかし、これと関係すると思われる中世墓の一部を検出。誕生寺は鶴山城と同様があり、芋川氏館跡などともに甲越抗争史料の一資料となるものである。						

## 芋川氏館跡（第4次）・（伝）願生寺跡

---

発行日 平成26年3月31日

---

発行 飯綱町教育委員会  
上水内郡饭纲町大字牟礼2795-1

---

印刷 信毎書籍印刷株式会社  
〒381-0037 長野市西和田1-30-3

---